

社会のグローバル化に対応した 初等中等カリキュラムの開発Ⅲ

— 大学と連携した研究開発システムの構築に向けて —

平成 27 年 3 月

広島大学附属学校園
研究推進委員会

【はじめに】

スーパーグローバル大学の一翼を担う附属学校

昨年の秋、本学は「スーパーグローバル大学創成支援事業」のタイプ A に選ばれ、「世界トップ100の総合研究大学」を目指すことになったのは承知のことであろう。4つの観点から、数値目標を含めた具体的な取組を示している。世界から優秀な人材を惹きつける（グローバル入試の標準化、英語による学位コースの充実など）、国際流動性の高い教育システムを構築する（ジョイントディグリーの充実、海外サテライト・キャンパスの拡充、世界トップレベルの協定校との交流など）、国際通用性の高い教育を提供する（教育の交際質保障、質の高い学修時間の確保など）、学長・役員会による迅速な改革（学長の戦略的リーダーシップの強化、A-KPIの導入、大学運営体制の国際化など）がそれにあたる。県内のある高校の校長が、これまでの「旧帝大」に代わり「スーパーグローバル大学タイプ A」が名門大学となるのではないかと言っておられた。本学の発展にエポックメイキングな出来事であることは間違いない。

その一環として教育学研究科では、急速に進みつつあるグローバル化に対応できる教員を養成するため、「グローバル教員養成プログラム」の開発に取り組んでいる。学士課程ではグローバルマインドを育成し、英語で授業ができる教員の養成を目指して、グローバル教育実習、米国留学、グローバルマインドの育成、英語授業の指導と計画などの授業を、また、大学院課程ではIB校やIS校で勤務できる教員の養成を目指して、IS校実習、グローバル学力と評価、IS教師活動、IS校ケースワークなどの授業を提供する。それぞれ海外の大学とのジョイントディグリープログラムとすることを目指している。用意のできる科目から27年4月から開設する予定である。

附属学校もそのようなグローバルな大学の一翼を担うことになった。その状況下で何が求められるのであろうか。一言で述べると、世界標準の学力を保証する教育の提供と、グローバル化に対応できる教員養成への協力である。

本委員会では、主に前者について検討し、実践している。本学の附属学校園が考えるグローバル人材に求められる資質・能力の見直しを行い、そこで同定された資質や能力を、学校教育の15年間でいかに付けるのかを検討した。それらの資質・能力は、EUがまとめたキーコンピテンシーやアメリカで定義されている21世紀スキルと通ずるものであり、世界標準の学力に近いものと呼べるものであると言えよう。

本年度は、各学校園がその中のいずれかの資質・能力を付けるためのカリキュラムを実際に試行した。幼稚園から高等学校まで、それぞれの校種に応じた指導方法を開発して実践した内容をまとめたものがこの報告書である。先進的な取組が多いので、他の学校園での取組をぜひとも読んで参考にさせていただきたい。

最後に、本年もまた本プロジェクトの推進に尽力されてこられた研究推進委員会の先生方、とりわけ教育学研究科の先生方には心より感謝を申し上げたい。

平成27年3月

広島大学副理事（附属学校担当）松浦 伸和

目 次

はじめに「研究推進委員会設置の目的と本年度の課題など」（松浦副理事）

1. グローバル人材に求められる資質・能力（岩田委員）	1
2. 各学校園の取組	
I. 広島大学附属幼稚園	5
II. 広島大学附属小学校	11
III. 広島大学附属中・高等学校	25
IV. 広島大学附属東雲小学校	30
V. 広島大学附属東雲中学校	37
VI. 広島大学附属三原幼稚園・小学校・中学校	45
VII. 広島大学附属福山中・高等学校	60
3. 海外の取組（シンガポール視察報告）井上委員	69
4. コメント（1）教育学研究科 山元隆春	79
（2）教育学研究科 丸山恭司	82
おわりに（山元委員長）	86

グローバル人材に求められる資質・能力

教育学研究科 岩田昌太郎

1. はじめに

近年、世界的にグローバル化は刻一刻と進展している。その一方で、持続的な成長と生産性向上を実現するための鍵を握るのが人材の育成と活用である。その人材の育成の基盤を担っているのが、まさに学校教育であり、その進むべき方向性や具体策が現在議論されている渦中である。

この2年間、広島大学附属学校園研究推進委員会として、「グローバル人材に求められる資質・能力とその要素」を策定してきた（岩田，2012, 2013）。その策定の拠り所としてきたのが、わが国におけるグローバル化における様々な提言や方策が議論であった（経済産業省，2010；グローバル人材育成推進会議，2012）。

例えば、経済産業省（2010）は、グローバル人材に共通して求められる能力として、①社会人基礎力（アクション・シンキング・チームワーク）、②外国語でのコミュニケーション、③異文化理解・活用力の3つの「力」を提言している。また、グローバル人材育成推進会議（2011）においても、グローバル人材の定義について、要素Ⅰ：語学力・コミュニケーション力、要素Ⅱ：主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感、要素Ⅲ：異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティー、といった3つの要素の項目を挙げている。

しかしながら、策定した要素は、わが国の社会人として求められるグローバル人材の視点であり、学校教育におけるグローバル人材の育成に特化したものではない。

そこで本稿では、グローバル人材に求められる資質・能力について、昨年度の本報告書と国立教育政策研究所（2013）「社会の変化に対応する資質や能力を育成する教育課程編成の基本原則」を手がかりとして、グローバル人材に求められる資質・能力の再整理と各附属・学校園における取組みを再検討することを目的とする。

2. グローバル人材に求められる資質・能力

現在、育成すべき人間像をめぐって、断片化された知識や技能ではなく、人間の全体的な能力を「コンピテンシー（competency）」として定義し、その「コンピテンシー」に基づく教育改革が世界的潮流となっている（国立教育政策研究所，2013）。

例えば、学習到達度調査（PISA）の基となったOECDのDeSeCoプロジェクト（1997～2003）による「キー・コンピテンシー」の概念が、PISAやPIAACなどの国際調査にも取り入れられた。他にも、北米では「21世紀型スキル」を定義し評価のあり方を検討したり、イギリスでは「キー・スキル」、そしてオーストラリアでは「汎用的能力」などの用語で、21世紀に求められる資質・能力を定義したり、とその定義を基盤にしたナショナルカリキュラムの開発が進められている。

わが国では、こうした世界的な教育課程改革の潮流や日本で蓄積されてきた研究開発学

校などの成果を踏まえ、共通性を見出すとともに、これまで求められる資質・能力の枠組みの試案として「21世紀型能力」が提案された。「21世紀型能力」とは、「生きる力」としての知・徳・体を構成する様々な資質能力から、とくに教科・領域横断的に学習することが求められる能力を汎用的能力として抽出し、それらを「基礎」「思考」「実践」の観点で再構成したものである（国立教育政策研究所，2013）。図1は、その概念図であり、資質・能力を「基礎力」（言語スキル，情報スキルなど），「思考力」（問題解決・発見力・創造力，論理的・批判的思考力など），

「実践力」（自律的活動力，人間関係形成力など）という三層構造で整理している。すなわち，世界レベルで共通する学力が捉え直される中で，わが国においても，その潮流を踏まえた教育改革の一端として「21世紀型能力」が提言された。

以上より，グローバル人材に求められる資質・能力として，わが国においては「21世紀型能力」を基盤にして，その各能力をどのように学校教育で保障していくことが喫緊の課題となっている。それでは，次節において，グローバル人材に求められる資質・能力の再整理と本学の各附属・学校園における取組みについて再検討する。

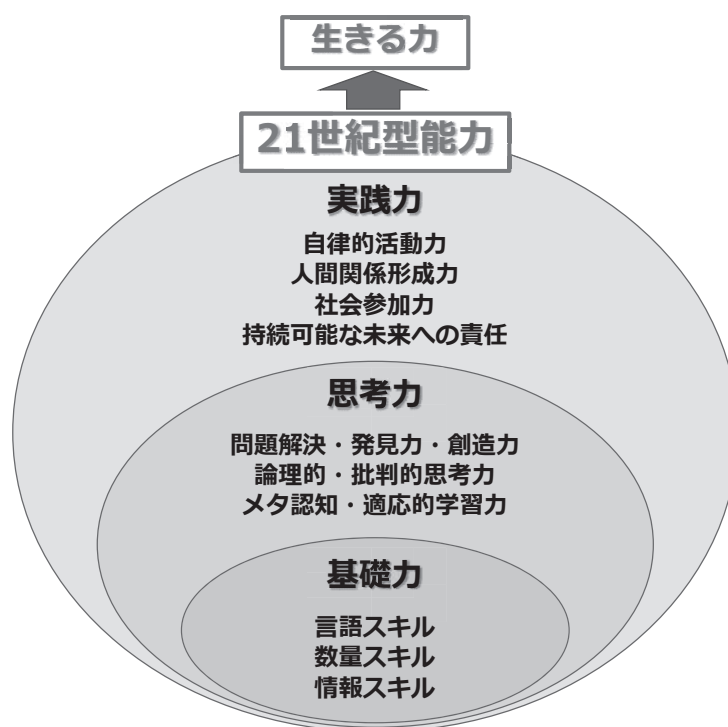


図1 「21世紀型能力」の概念図
（国立教育政策研究所，2013）

3. 各附属・学校園におけるグローバル人材育成の取組み

各附属・学校園では，グローバル化における方向性や具体策への貴重な示唆を与える多くの有益な実践事例を蓄積していることが平成24年度と平成25年度の報告書から確認できる。しかも，その取組みは，多種多様であり，独創的な実践事例を示すものである。しかしながら，各附属・学校園における様々な取組みの独自性とともな，その共通性や発展性を模索する中で，さらなる各附属・学校園の発展を検討していくことは，各附属・学校園の将来的なグローバル人材育成をより具現化する上において重要な課題であろう。

そこで表1は，H25年度の「報告書」で検討した各附属・学校園における特色ある取組みとグローバル人材育成の要素の対応を示したものである（岩田，2013）。この表1では，グローバル人材育成推進会議（2012）の審議のまとめとして提言された「グローバル人材育成」の要素を援用した。しかしながら，先述したようにわが国における教育課程の鍵概念として「21世紀型能力」が提言されているため，表1を表2のように修正した。

表 1 各附属・学校園における特色ある取組みと「グローバル人材育成」への対応表

	幼稚園	附属小	附属中・高	東雲小	東雲中	三原	福山
要素 0 要素 I～III の基礎となる心情・意欲・態度	◎						
要素 I 語学 コミュニケーション	○	◎ ◎	○ ○	○ ○	○ ◎	◎	○ ○
要素 II 主体性・積極性 チャレンジ精神 協調性・柔軟性 責任感・使命感	○ ◎ ○ ○			○ ○ ◎ ○	○ ○ ◎ ○	◎ ◎	○ ○ ○ ○
要素 III 異文化理解 アイデンティティー	○	○ ○	○	○ ○	○ ○	◎	○
その他の要素 問題解決能力 批判的思考 ICT 活用能力		○ ○ その他○	○ ○		○ ○ ○	◎ ○	◎ ◎ ○

表 2 各附属・学校園における特色ある取組みと「グローバル人材育成」への対応表(改訂版)

		幼稚園	附属小	附属中・高	東雲小	東雲中	三原	福山
基礎力	要素 0 要素 I～III の基礎となる心情・意欲・態度	◎						
	要素 I 語学 コミュニケーション	○	◎ ◎	○ ○	○ ○	○ ◎	◎	○ ○
	その他の要素 ICT 活用能力		○	○		○	○	○
思考力	その他の要素 問題解決能力 批判的思考		○ ○	○		○ ○	◎	◎ ◎
	要素 II 主体性・積極性 チャレンジ精神 協調性・柔軟性 責任感・使命感	○ ◎ ○ ○			○ ○ ◎ ○	○ ○ ◎ ◎	◎ ◎	○ ○ ○ ○
実践力	要素 III 異文化理解 アイデンティティー	○	○ ○	○	○ ○	○ ○	◎	○

表2からもわかるように、左欄の「基礎力」「思考力」「実践力」に対応して、従来の要素の位置が若干移動して整理された。しかしながら、基本的には各附属・学校園の特色ある取組みは少しの変更点のみであり、「21世紀型能力」の育成に関してすべて網羅していることが見受けられる。

各附属・学校園の実践で共通する要素が多いものは、附属間で協働的に実践を共有できる1つの可能性を示唆するものである。しかも、今後の全附属・学校園の横の連携を一層強化する可能性を示唆するものである。

一方、共通していない要素については、各附属・学校園が独自に新たな実践を企画・運営していくことが今後の検討課題として挙げられる。と同時に、策定した能力（要素）が育成されているのか、3つの「しこう」、つまり、「志向」→「試行」→「思考」のサイクルを繰り返しながら、その能力（要素を）身につけさせたエビデンスを提示していく必要があるであろう。

4. おわりに

前節より、グローバル人材の育成を目指して、各附属・学校園が特色ある多くの有益な実践を蓄積していることが明らかとなった。本年度は、その蓄積を基盤として、附属学校園の研究開発システムを構築するにあたり、共通的な実践あるいは独自のな実践を企画・運営する試行的に実施した経緯がある。その試行により抽出された成果や課題を継続的に再検討して、子どもたちの成長につなげていくことが重要である。

文献

岩田昌太郎（2012）コメント（3）.平成24年度広島大学附属学校園研究推進委員会報告書：pp.94-96.

岩田昌太郎（2013）グローバル人材に求められる資質・能力とその要素.平成25年度広島大学附属学校園研究推進委員会報告書.社会のグローバル化に対応した初等中等カリキュラムの開発Ⅱ：pp.1-4.

国立教育政策研究所（2013）社会の変化に対応する資質や能力を育成する教育課程編成の基本原則.教育課程の編成に関する基礎的研究 報告書5.研究代表者（勝野頼彦）

グローバル人材育成推進会議（2012）グローバル人材育成戦略 審議のまとめ.平成24（2012）年6月4日.文部科学省.

(<http://www.kantei.go.jp/jp/singi/global/> 閲覧2015.3.13)

経済産業省（2010）報告書～産学官でグローバル人材の育成を～.産学人材育成パートナーシップ グローバル人材育成委員会.2010年4月

(http://www.meti.go.jp/policy/economy/jinzai/san_gaku_ps/global_jinzai.htm 閲覧2015.3.13)

各学校園の取組

I. グローバル人材に求められる資質・能力の基礎を培うための 幼児期におけるカリキュラムの試行

広島大学附属幼稚園

1. グローバル人材育成のため幼児期に育てたい資質や能力

(1) 幼児期に育てたい「要素0」を中心とした内容について

グローバル人材育成推進会議(2012)では、「グローバル人材」の概念として以下の要素を挙げている。

- 要素Ⅰ：語学力・コミュニケーション能力
- 要素Ⅱ：主体性・積極性，チャレンジ精神，協調性・柔軟性，責任感・使命感
- 要素Ⅲ：異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティー

(グローバル人材育成推進会議審議まとめより)

以上、要素Ⅰ～Ⅲの資質や能力がグローバル人材には求められることが提言されているが、これらは主に青年期における海外留学や海外勤務を想定してのものである。同まとめには「初等中等教育段階では、基礎的な学力・体力・対人関係力等をしっかりと身につけさせることが重要である」とあり、グローバル人材育成のための基礎を培うことの大切さが述べられている。

幼児期の教育はそもそも、「生涯にわたる人格形成の基礎を培う(教育基本法第1章第1、幼稚園教育の基本)」ものであり、「義務教育及びその後の教育の基礎を培う(学校教育法第22条)」ものである。前述の要素Ⅰ～Ⅲの資質や能力を有するグローバル人材育成のためのカリキュラムを考える場合、幼児期において大切なのは、小学校以降の教育につながるための礎となる学力・体力・対人関係力等であると私たちは考えた。そして、要素Ⅰ～Ⅲの基礎となる内容を私たちは一昨年度の研究推進委員会報告書において「要素0」として位置づけた(広島大学附属幼稚園，2013)。

グローバル人材育成のために、幼児期には「要素0」を育成するカリキュラムを開発する必要がある。その具体的内容を、昨年度の研究推進委員会報告書において、私たちは以下のものであると提言した(広島大学附属幼稚園，2014)。

0-①他者とのかかわりを通じた自己肯定感・他者への信頼感の獲得

0-②森での遊びを通じた好奇心や探究心の育成

0-③自然とのかかわりを通じた豊かな感動体験による感性の涵養

0-④森での遊びを通じた体力・身のこなしの向上

また、要素Ⅰ～Ⅲの中でも、主体性やチャレンジ精神などは特に幼児期から継続して育むことが大切であると私たちは考えた。そこで、グローバル人材育成のための幼児期のカリキュラムに以下の内容も含むこととした。

II-①自然とかかわる遊びや活動による積極性やチャレンジ精神の育成

以上の計5つの資質や能力が、本園の考えるグローバル人材育成のために幼児期に育てたい「要素0」を中心とした内容である。

(2) 本年度試行したカリキュラムについて

本園では、グローバル人材育成のために幼児期に以上5つの資質・能力を重点的に身につけることが大切であると位置づけた。そのために、本年度は試行的にそれらを育てるためのカリキュラムを検討・開発し、試行することを通して、成果や課題を検討することとした。

2. グローバル人材育成に向けての具体的取組とその結果

(1) 要素0の獲得に向けて

0-①他者とのかかわりを通じた自己肯定感・他者への信頼感の獲得

取組：どのような人材を育成するにしても、自分に自信をもち、他者を受け入れる心が育っていることが前提となるだろう。この「自己肯定感と他者への信頼感の獲得」の両者は表裏一体のものである。本園では、自己充実欲求である「私は私」の心と、繋合希求欲求である「私は私たち」の心の両面をバランスよく育むことを中心とした新たなカリキュラムを開発し、それを試行することとした。学校教育のスタートである幼稚園の時期に、自分に対する肯定感と他者への信頼感を獲得することをめざしたカリキュラムを開発し、保育実践を行った。

評価・検証方法：具体的な場面をエピソードとして収集し紀要にまとめ、育ちを考察した。また、保護者アンケートにより、その育ちを検証した。

結果：入園から2～3年間の保育を通して、自己肯定感や他者への信頼感を獲得していく具体的な姿、及びその過程における具体的な支援内容を紀要にまとめることができた。特にある子どものエピソードを縦断的に積み重ねる方法は、可視化しにくい幼児期の心の育ちを示したものとして幼児教育関係者から高い評価を頂いた。保護者アンケートにおいても、「自分が大好きな子ども、友だちが大好きな子どもに育っていますか」という質問に対し、98.7%の保護者が「大変そう思う」もしくは「そう思う」と肯定的に回答した。

成果と課題：新たに作成し試行したカリキュラムが、「要素0」の「自己肯定感や他者への信頼感の獲得」に寄与していることが示唆された。来年度も引き続き、本カリキュラムをブラッシュアップしながら、継続して実践することが求められる。

0-②森での遊びを通じた好奇心や探究心の育成

取組：幼児は遊びを通して様々な事を学んでいく。遊び込むことで、そこからさらにやってみようという気持ちやどうなっているんだろうという疑問などが生まれ、好奇心や探

究心が育成されていく。特に、「幼児期において自然のもつ意味は大きく、自然の大きさ、美しさ、不思議さなどに直接触れる体験を通して、幼児の心が安らぎ、豊かな感情、好奇心、思考力、表現力の基礎が培われることを踏まえ、幼児が自然とのかかわりを深めることができるよう工夫すること（幼稚園教育要領，2008）」とあるように、幼児期には、自然とのかかわることで好奇心や探究心が培われる。そこで、一日中森で過ごす「森の日」を保育カリキュラムに取り入れ



一日中森で過ごす「森の日」

るなど、自然の中でたっぷりと直接体験する機会を保障することを通して、好奇心や探究心が培われることを目指すこととした。ここで育まれた好奇心や探究心は、小学校以降の学習との連続を生み、語学力をはじめ学びの基礎として生きてくると考えた。

評価・検証方法：具体的に好奇心や探究心を働かせている場面をエピソードにより抽出した。また、これらの能力がその後の学力に反映されているかどうか検証するため、卒園児の標準化された学力テストの成績を平均と比較しようと考えた。

結果：幼児が好奇心や探究心を働かせている場面は、エピソードとして多く抽出することができ、紀要としてまとめることができた。しかし、それらがその後はどう反映されるかについての卒園児の学力テスト結果は、その収集方法が難しく行うことができなかった。

成果と課題：好奇心や探究心を働かせている場面を多く抽出できたことで、試行したカリキュラムはそれらの体験を保障できていることが示唆された。しかし、その効果について検証するための、卒園児の学力テストの結果の収集についてはできなかったため、今後どのような方法であれば収集し比較することが可能であるかを検討する必要がある。

0-③自然とのかかわりを通した豊かな感動体験による感性の涵養

取組：本園は「森の幼稚園」として五感を通した原体験を大事にしている。原体験の必要性と現代社会における不足は様々に指摘されているところである。「子ども体験活動の実態に関する調査研究」報告書では、自然における原体験、感動体験の不足により、子どもの心が育ちにくくなっていることが指摘されている（国立青少年教育振興機構，2010）。そこで私たちは、自然の中で原体験をカリキュラムに取り入れることとした。幼児期に五感を通した原体験を保障する保育を展開することで、センス・オブ・ワンダー（神秘さや不思議さに目をみはる感性）を働かせ、美しさ



大きな氷を見つけてびっくり！

や不思議さ、神秘さ、雄大さ、驚きや感動など様々な感情体験を積み重ねることができる保育を実践することとした。そのことにより、豊かな感性を涵養できると考えた。

評価・検証方法：具体的な場面をエピソードとして収集し、育ちを考察した。また、保護者アンケートにより、その育ちを検証した。

結果：センス・オブ・ワンダーを働かせて美しさや不思議さなど様々な感情体験をしている場面をエピソードとして抽出することができ、紀要としてまとめることができた。保護者アンケートにおいても、「森でセンス・オブ・ワンダーを働かせながら生き生きと遊ぶ子どもに育っていますか」という質問に対し、97.5%の保護者が「大変そう思う」もしくは「そう思う」と肯定的に回答した。

成果と課題：試行した原体験を保障するカリキュラムが、豊かな感動体験を保障しており、「要素0」の「豊かな感動体験による感性の涵養」に寄与している可能性が示唆された。来年度も引き続き、本カリキュラムをブラッシュアップしながら、継続して実践することが求められる。

0-④森での遊びを通じた体力・身のこなしの向上

取組：自然の中には直線はないと言われるように、森の中には平坦な部分はほとんどない。森の中で遊びや活動を行うことは、斜面やでこぼこなどがある環境で過ごすことになる。また本園は、広島大学が所有する陣が平山を日常的にフィールドとして使っており、幼稚園と山頂との標高差70mを行き来している。さらに山際には、全身を使って遊ぶことのできる綱渡りや縄ばしごなどの手作り遊具が設置されている。そこで、これらの環境を十分に活かすことをカリキュラムに取り入れることで、遊びや活動の中で体力や身のこなしが身につくことを目指した。また、幼児期に身につけた体力や身のこなしは、小学校以降の体力にもつながると考えた。



全身を使った森での遊び

ここで、これらの環境を十分に活かすことをカリキュラムに取り入れることで、遊びや活動の中で体力や身のこなしが身につくことを目指した。また、幼児期に身につけた体力や身のこなしは、小学校以降の体力にもつながると考えた。

評価・検証方法：幼児の運動量の調査を行い、他園の運動量と比較することとした。また、幼児期に培った能力がその後の体力に反映されているかどうか検証するために、卒園児の新体力テストの成績を全国平均と比較した。

結果：久原他による学部・附属学校共同研究（未刊行）を通して、保育時間中の歩数を調査し比較したところ、本園幼児は一般的な幼稚園の幼児よりも多く歩いたり走ったりしていることが示された。また、本園卒園児の体力・運動能力を小学生の新体力テストの結果と比較したところ、小学校1年生の時点ではおおむね平均的であったが、2年生以降になってから約半数の種目で平均よりも有意に高くなっていた。

成果と課題：以上の結果から、試行した本園の森の環境を活かしたカリキュラムの保育

実践は、幼児期に多くの身体的活動を行うことを促しており、「要素Ⅰ」の「体力・身のこなしの向上」に寄与していることが示唆された。また、幼児期に身についた体力や身のこなしは、小学校入学以降の体力・運動能力向上に寄与している可能性が示唆され、グローバル人材育成の基礎としての役割を担っていることが示された。来年度も引き続き、本カリキュラムを継続し、具体的な調査を通して検証することが求められる。

(2) 要素Ⅱの獲得に向けて

II-①自然とかかわる遊びや活動による積極性やチャレンジ精神の育成

取組：現代の子どもたちは、多くのことが禁止された状況の中において、挑戦の機会を奪われているので、本来自分のもっている能力を十分発揮できないままの子どもも多いと言われている（汐見，2001；河合，2003 など）。本園ではそのような禁止をなるべく少なくし、子どもたちが自然に立ち向かっていく「挑戦的な遊び」を推奨したカリキュラムを作成し、保育実践を行うこととした。具体的には一本橋渡りや斜面登り、森の空中の綱渡り、おとまり保育での暗闇探



道なき道を行く山越え探険

険、卒園前の少人数グループで行う山越え探険などを行うこととした。これらの実践を通して、積極性やたくましいチャレンジ精神を育てていきたいと考えた。

評価・検証方法：具体的な場面をエピソードとして収集し、育ちを考察した。また、保護者アンケートにより、その育ちを検証した。

結果：リスクを求める遊びを通して、よりチャレンジしていく事例をエピソードでとらえることができた。また、松本他による学部・附属学校共同研究における保護者へのアンケート調査（未刊行）から、自らの子どもが本園での自然とかかわる遊びを通して、入園前よりも積極性が増しチャレンジ精神が育ってきていると感じていることが示された。

成果と課題：以上の結果から、試行した保育実践により、チャレンジする機会が保障され、「要素Ⅱ」の「チャレンジ精神」を育成していることが示唆された。そのことは、保護者も実感をもって感じていることが明らかになった。来年度も引き続き、本カリキュラムを継続するとともに、その育ちの内容を具体的に示すことが求められる。

3. 来年度に向けての展望と課題

本年度、グローバル人材に求められる資質・能力の基礎を培うための幼児期におけるカリキュラムを試行したところ、上記の通り、本園の考える資質や能力がおおむね育っていることが示された。来年度以降も、本年度試行したカリキュラムについて、必要な部分を

見直しながら継続して実践していくことが必要であろう。

本年度の試行において苦勞したのは、目に見えない幼児の心情・意欲・態度をいかにして目に見える形でとらえるかであった。幼児の場合、自分自身で自己評価することは難しい。そこで本年度も行ったように、保育者がエピソードという形で具体的に育ちをとらえると共に、保護者にアンケートを行ったり、数値化できる調査を取り入れることを通して、説得力のある育ちの根拠を示すことが必要であろう。本年度行うことができなかった学力テストの追跡調査については、可能な方法を検討することが求められる。

引用文献

グローバル人材育成推進会議（2012）グローバル人材育成戦略 審議のまとめ．平成 24（2012）年 6 月 4 日．文部科学省．

（<http://www.kantei.go.jp/jp/singi/global/> 閲覧 2014.2.15）

広島大学附属幼稚園（2012）グローバル人材に求められる資質・能力の基礎を培う．

平成 24 年度広島大学附属学校園研究推進委員会報告書：pp.3-5.

広島大学附属幼稚園（2013）グローバル人材に求められる資質・能力の基礎を培うための幼児期におけるカリキュラムの開発．平成 25 年度広島大学附属学校園研究推進委員会報告書：pp.5-9.

河合雅雄（2003）森に還ろうー自然が子どもを強くするー 小学館

国立青少年教育振興機構（2010）「子どもの体験活動の実態に関する調査研究」報告書

（http://www.niye.go.jp/kenkyu_houkoku/contents/detail/i/62/ 閲覧 2014.2.15）

久原有貴・関口道彦・小鴨治鈴・松本信吾・七木田敦・杉村伸一郎・中坪史典・上田毅・松尾千秋（未刊行）「森の幼稚園の園児および卒園児の身体活動量と体力・運動能力との関係」 学部・附属学校共同研究紀要

松本信吾・杉村伸一郎・中坪史典・清水寿代・金岡美幸・久原有貴・堀 奈美・上山瑠津子（未刊行）「遊びのリスクに対する幼稚園保護者の認識の変容要因」 学部・附属学校共同研究紀要

文部科学省（2008）幼稚園教育要領

汐見稔幸・加用文男・加藤繁美（2001）これが、ボクらの新・子どもの遊び論だ 童心社

体験活動と指導のあり方に関する調査研究委員会（2004）「少年期に必要な体験活動と指導のあり方」ー少年・少女が一人前になるための体験活動ー．国立信州高遠少年自然の家：pp.44-101

Ⅱ. グローバル化社会に対応するための人材育成に関する取組

広島大学附属小学校

1. グローバル化社会に求められる各教科で育成すべき資質・能力について

(1) グローバル化の規定と、各教科で取り組む必要性について

前年度までの取組で、本校ではグローバル化の規定と、それに対するために必要となる資質・能力について、限られた教科ではあるが、実践を踏まえて明らかにすることができた。しかし、後に示すグローバル化の規定にあるように、グローバル化というのは極めて広範囲にわたる多様な社会の変化であるといえる。そのような社会の変化に対応していくためには、多様な教科でもって、学校教育全体で取り組む必要があると考えた。そこで、本年度では、この取組を本校の各教科に広げ、グローバル化社会に求められる各教科で育成すべき資質・能力について明らかにし、それらの育成を図るための授業の具体を提案していくことを目的とした。

まずは、本校の規定する「グローバル化」については、前年度までの研究で次のように明らかになっている⁽¹⁾。

情報通信技術の進展、交通手段の発達による移動の容易化、市場の国際的な開放等により、人、物、情報の国際的移動が活性化して、様々な分野で「国境」の意義があいまいになることで、カリキュラムの目的論、内容論、方法論にも大きな影響を及ぼし得る、共生と競争の両方が求められる社会の多面的な変化。

このような社会の変化に対して、各教科でどのような資質・能力を育成していかないといけないのであろうか。本校での各教科の取組により、右の表に示すことが明らかになった。ここに示すように、本校では、学校全体の取組を通して、多様な資質・能力を育成しようとしている。これらの資質・能力を、「各附属・学校園における特色ある取組と「グローバル人材育成」への対応表に照らし合わせて考えると、本校の取組は、主に要素Ⅰの「語学、コミュニケーション」、要素Ⅲの「異文化理解、アイデンティティ」、その他の要素の「問題解決能力、批判的思考」に対応しているといえるのではないだろうか。要素Ⅰについては、国語科や英語科が担っている部分であると考え。また、コミュニケーションに必要な他者理解という点については、体育科も関わっている部分である。そして、要素Ⅲについては、アイデンティティを含めた読書リテラシーを育成しようとしている国語科や、造形科が該当する。そして、その他の要素については、問題解決能力を含めた算数科の取組やそれを社会事象に当てはめて子どもに考えさせていく社会科、自然事象に当てはめて考えさせていく理科が該当すると考える。それでは、各教科が育成しようとしている資質・能力の詳細は一体いかなるものなのであろうか。次にその概要について述べていきたい。

各教科	育成すべき資質・能力
国語科	読書リテラシー
社会科	社会形成力
算数科	数学的な考え方
理科	科学的リテラシー
造形科	創造的想像力
体育科	他者理解の力
英語科	コミュニケーション能力

(2) 国語科 — 読書リテラシーの育成 —

グローバル化社会を生き抜くために国語科が育成すべき力として、自らの考えを筋道立てて分かりやすく表現することのできる力、他者との差異を認めグローバルなコミュニケーションができるようになるための自己のアイデンティティの確立、多角的にももの見方・考え方をひろげていくことを明らかにした。これらの育成に大きな役割を果たすのが読書である。そこで先行研究をもとに、学習指導要領の「読むこと」の目標との関係を視野に入れ、読書リテラシ

一、つまり読書能力の育成を目指した指導のあり方について研究した。

(3) 社会科 — 社会形成力の育成 —

今年度より、第1学年から社会科の授業を実施し、子どもたちへの社会形成力の育成を目指している。社会形成力については、先行研究に基づき、「社会の形成要因を追究し、その形成要因にもとづいて、よりよい社会を構想していく力」と規定している。このような規定のもとで、グローバル化社会に生き抜く子どもを育成するための社会科の指導のあり方について研究した。

(4) 算数科 — 数学的な考え方の育成 —

子どもたちは将来、グローバル化社会の中で、異なる文化や価値観、経験をもつ人々とも信頼関係を築き、かかわり合いながら生きていくことになる。そして、算数的知識は社会的に創り上げていくものであるという考えのもとで、算数的知識を社会的に創る過程を大切に授業づくりを中核にすえて取り組んでいく。特に、問題解決的な学習の集団解決に着目し、集団解決の機能（公表→検討・修正→合意）を充実させることで数学的な考え方の育成をめざす指導のあり方について研究した。

(5) 理科 — 科学的リテラシーの育成 —

今年度より、第1学年から理科の授業を実施し、グローバル化社会において必要となる科学的リテラシーの育成を目指している。科学的リテラシーについては、PISAの「自然界及び人間の活動によって起こる自然界の変化について理解し、意思決定するために、科学的知識を使用し、課題を明確にし、証拠に基づく結論を導き出す能力」という規定に沿っている。このような規定のもとで、グローバル化社会に生き抜く子どもを育成するための理科の指導のあり方について研究した。

(6) 造形科 — 創造的想像力の育成 —

造形科としてグローバル化社会に寄与できる部分を自分とは異質な他者のみかた、感じ方、表し方の違いを受け入れ、認めることのできる資質を育てることととらえている。そして、造形科における表現と鑑賞の活動は他者理解と自己理解を同時に促し育むことのできる活動であり、他者理解と自己理解につながる創造的想像力の育成を目指し、その指導のあり方について研究した。

(7) 体育科 — 他者理解の力の育成 —

グローバル化とは「共生と競争の両方が求められる社会の多面的変化」である。そして、多様な個人が存在している。体育科においても、各学級において「できる」の段階は多様であるといえる。このような集団の中で、ルールづくりを視点とした実践を行い、だれもが楽しみながら競い合うためのルールづくりを通して他者理解の力を高めていくための指導のあり方について研究した。

(8) 英語科 — コミュニケーション能力の育成 —

昨年度より、第1学年から英語を教科の授業として設定し、コミュニケーション能力の育成を目指している。その中で低学年、中学年、高学年と系統性を確保し、実践を行っている。各学年の取組においては、英語を話すことや聞くことだけでなく、読むことや書くことについても取り組んでおり、中学校、高等学校の英語学習をさせる基盤を作ることを重視している。そのような指導のあり方について研究した。

(9) 目指す児童像について

本校では各教科におけるこのような資質・能力の育成を通して、グローバル化社会に対応するための人材育成に取り組んできた。そして、このような取組を通して見えてくる小学校段階で目指す児童像についてまとめると、次の3点が浮かび上がってくる。

- 資質・能力を身に付けるための基盤となる知識や技能を習得する児童
- 学びを通して身につけた資質・能力を必要な文脈に応じて使い分ける児童。

○自他の違いを把握し、異質さの大きな他者との関わり合いの中でも他者理解ができる児童。
 教科の固有性から導き出される資質・能力を獲得するためには、基盤となる知識や技能は必要であろう。そして、獲得された資質・能力は、必要な文脈に応じて使いこなされないと、活性化した社会の人・物・情報の変化に対応できないのではないだろうか。そして、他者との共生や、国際競争を生き抜いていくためには、自他の違いを踏まえた上で、様々な他者と関わることができることが重要であると考え。以下、一つ一つについて、解説を加える。

「○資質・能力を身に付けるための基盤となる知識や技能を習得する児童」は、グローバル化に対応する人材のベースとなる部分であり、知識・理解や資質・能力を身に付けることの重要性が含まれる。これは各教科での教科固有の知識や、各教科の固有性から導き出される資質・能力の獲得にあたる部分と考える。

「○学びを通して身につけた資質・能力を必要な文脈に応じて使い分ける児童」は、グローバル化に対応する人材育成において、必要に応じて能力を使い分けることの重要性を示している。特に、社会事象を取り扱う社会科や、環境問題を自然事象において取り扱う理科においては、このような児童を育成することにつながる教科だと考える。

「○自他の違いを把握し、異質さの大きな他者との関わり合いの中でも他者理解ができる児童」は、他者とのかわりに注目した部分である。ここでの「他者」とは、直接的に相対する他者もちろんであるが、例えば造形科において、絵画を通して触れ合うことのできる「作者」もまたここでの「他者」には含まれるものとする。このように他者をとらえるのであれば、そのような他者、しかも、きわめて異質さの大きな他者との触れ合いを自らの学びに変えていくというのは重要であると考え。

以上のように各教科の育成すべき取組を踏まえ、3つの児童像を設定した。これらの子ども像と各教科の関連について案ではあるが示すと以下の表のようになると考えている。

	国語科	社会科	算数科	理科	造形科	体育科	英語科
○資質・能力を～	◎	○	◎	○	○	○	○
○学びを通して～	○	◎	○	◎			
○自他の違いを～					◎	◎	◎

本稿では次に、これらの実践について、その具体を述べていくこととする。その際、これらの中でも特に新しいと考えられる社会科、理科、英語科の3点に絞って述べていくこととする。

2. 小学校6年間を見通した英語科の実践（要素Ⅰに関する取組）

(1) 中・高卒業段階で求められる英語力

まず初めに、現行の学習指導要領に基づいて、中・高卒業段階において、生徒に求められる英語力はどの程度のものであろうか。「国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的施策」（2011）では、以下の通りとなっている⁽²⁾。

【中学校卒業段階】

初歩的な英語を聞いたり読んだりして話し手の意向などを理解したり、初歩的な英語を用いて自分の考えなどを話したり書いたりすることができる。（英検であれば3級程度以上）

【高等学校卒業段階】

英語を通じて、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりすることができる。（英検であれば準2級～2級程度以上）

ところが「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」（2013年12月13日文部科学省

発表)⁽³⁾では、「初等中等教育段階からグローバル化に対応した教育環境づくりを進めるため、小学校における英語教育の拡充強化、中・高等学校における英語教育の高度化など、小・中・高等学校を通じた英語教育全体の抜本的充実を図る」としている（下線、筆者。以下同じ）。また、「2020年（平成32年）の東京オリンピック・パラリンピックを見据え、新たな英語教育が本格展開できるように、本計画に基づき体制整備等を含め2014年度から逐次改革を推進する」となっている。具体的には、グローバル化に対応した新たな英語教育（以下、「新たな英語教育」）の目標・内容等（案）の中で、目標について以下のように述べられている。

【中学校】

身近な事柄を中心に、コミュニケーションを図ることができる能力を養う。

CEFR A1～A2程度（英検3級～準2級程度等）

【高等学校】

英語を通じて情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりするコミュニケーション能力を養う。

CEFR B1～B2程度（英検2級～準1級、TOEFL iBT57点程度以上等）

以上のように、中・高の卒業段階で達成される英語力の目標が一段階上がった（前倒しされた）のである。さらに、「新たな英語教育」の目標・内容等（案）では、以下の点も述べられている⁽⁴⁾。

○生徒の英語力の検証

- ・外部検定試験を活用し、各学校段階における生徒の客観的英語力を検証するとともに、指導改善に活用。
 - ・大学入試においても4技能を測定可能な英検、TOEFL等の資格・検定試験等の活用の普及・拡大。
- 小・中・高等学校を通じて目標・取り扱う内容・評価を改善
- ・「英語を用いて何が出来るようになるか」という観点から目標を具体化し、小中高を通じて一貫した学習到達目標を設定。
 - ・言語活動の内容（聞き取り、多読、速読、作文、発表、討論等）や量を増加。
 - ・「英語を用いて～することができる」という形式による目標設定（CAN-DOリスト）に対応する形で4技能を評価。
 - ・我が国や郷土の伝統や文化について英語で伝えるという視点を含める。

小・中・高の各段階を通じて英語教育を充実し、生徒の英語力を向上させ、外部検定試験を活用して生徒の英語力を検証するとともに、大学入試においても4技能を測定可能な英検、TOEFL等の資格・検定試験等の活用の普及・拡大を図るというものである。そこで、目標にTOEFL iBTの点が明記されたものと考えられる。

また、小・中・高を通じて一貫した、CAN-DOリストの形式での学習到達目標設定をして、それに対応する形で4技能を評価するという方法が示された。そのために、先ほどの「新たな英語教育」の目標（案）の中に、CEFRという指標が登場したのである。CEFRとは、the Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment（学習、教授、評価のためのヨーロッパ言語共通参照枠）の略称で、欧州評議会（Council of Europe）が2001年に公表した言語能力の到達度指標である。英語に限らず、外国語に関する言語能力をA（基礎段階の言語使用者）、B（自立した言語使用者）、C（熟達した言語使用者）の3つのレベルに大きく分け、それをさらに、A1・A2、B1・B2、C1・C2の合計6段階のレベルに分けて表している。そして、レベルごとに、「その言語を用いて具体的に何が出来るか」ということが‘can do’

descriptor（能力記述子）によって文で示されている。

（２）小学校における英語教育

ここまで、中・高卒業段階において、生徒に求められる英語力を見てきたが、それを踏まえて、小学校において、児童に求められる英語力とはどの程度のものであろうか。まずは、現行の学習指導要領の外国語活動の目標は以下の通りである⁽⁵⁾。

外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。

現行の学習指導要領では、外国語活動は5，6年生に週1コマ行うことになっている。ところが、上記の「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」（2013）では、「新たな英語教育」の在り方として、以下のことが挙げられている。

- 小学校中学年：活動型・週1～2コマ程度
 - ・コミュニケーション能力の素地を養う。
 - ・学級担任を中心に指導。
- 小学校高学年：教科型・週3コマ程度（「モジュール授業」も活用）
 - ・初歩的な英語の運用能力を養う。
 - ・英語指導力を備えた学級担任に加えて専科教員の積極的活用。

「コミュニケーション能力の素地」という言葉は、上記の通り、小学校高学年向けの外国語活動の目標に書かれており、「初歩的な英語」という言葉は、現行の中学校学習指導要領の英語等の目標に書かれている。すなわち、小学校の英語教育も中・高と同様に一段階上がった（前倒しされた）のである。というよりは、小学校の英語教育の高度化に伴って、中・高の英語教育も高度化されたと言うべきである。さらに、「新たな英語教育」の目標・内容等（案）の中で、目標について以下のように述べられている。

【小学校中学年】

英語を用いてコミュニケーションを図る楽しさを体験することでコミュニケーション能力の素地を養う。

【小学校高学年】

読むことや書くことを含めた初歩的な英語の運用能力を養う。

「読むこと」や「書くこと」では、英語教育の在り方に関する有識者会議「今後の英語教育の改善・充実方策について 報告」（2014年10月17日文科科学省公表）⁽⁶⁾の中でも、「高学年では（中略）積極的に「読む」「書く」の態度の育成を含めたコミュニケーション能力の基礎を養う」とある。

（３）広島大学附属小学校における英語教育

そこで、広島大学附属小学校ではどうかと言うと、「グローバル人材」を育成するために、平成25年度より英語を教科として第一学年から導入し、授業実践を重ねてきた。本年度はその第2年目である。英語科の目標は以下の通りである。

《広島大学附属小学校 英語科目目標》

英語を通じて、ことばや文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、英語コミュニケーション能力の基盤を養う。

現行の外国語活動の目標は、上記の通り、コミュニケーション能力の「素地」を養うことであるが、広島大学附属小学校英語科においては、中・高での英語学習を支える基

盤を作ることを意識して指導を行っている。そのため、学年が上がるに従って、「活動型」から「学習」を意識した授業へと実践を変化させている。

さらに、昨年度、英語科の創設に際して、CEFR-J（CEFR に準拠した日本の英語教育における英語能力到達度指標）との関連を持たせた「CAN-DO リスト」を附属中・高との共同研究で作成し、1～6年生までのカリキュラムを、児童の発達段階を考慮して考案した。CEFR-J は、日本人の大半が A レベルと言われる中、A1 の下に Pre-A を置き、A1 を A1.1～A1.3 の 3 つに、A2～B2 までは各レベルを 2 つにそれぞれレベル分けしたもので、広島大学附属小学校では、6年間を通して A1.3 レベル を目指している（今後、さらにレベルを上げていくことも検討している）。

本校における英語科の概要については、次のような時数と指導体制で実践を行った。

表1 各学年の指導時間・指導形態・学習場所

学年	時間数	指導形態	場所
1・2年生	週2時間 (年70時間)	英語専科教員と ALT との TT	各教室・特別教室1（英語ルーム）での指導
3～6年生	週2時間 (年70時間)	英語科専科教員による単独授業、ALT と担任等との TT	各教室での指導

英語科の目標に基づき、本校英語科では、児童の発達段階を考慮して、低・中・高学年の目標を表2のように設定した。

表2 《本校英語科の低・中・高学年各段階の目標》

	コミュニケーションへの 関心・意欲・態度	表現の能力	理解の能力	言語や文化についての 知識・理解
低	英語を用いて積極的にコミュニケーションを図る。	自分や身の回りのものについて英語で話すことができる。	自分や身の回りのものについて英語で理解することができる。	自分や身の回りのものについての初歩的な英語の単語や表現を理解する。
中		地域や郷土について英語で表現することができる。	地域や郷土について英語で理解することができる。	英語の綴りや発音・イントネーションなどを理解する。
高		社会や世界について英語で表現することができる。	社会や世界について英語で理解することができる。	言葉の決まりや、異なる文化について理解する。

低・中・高学年の各段階での言語材料の積み上げは図1のとおりである。

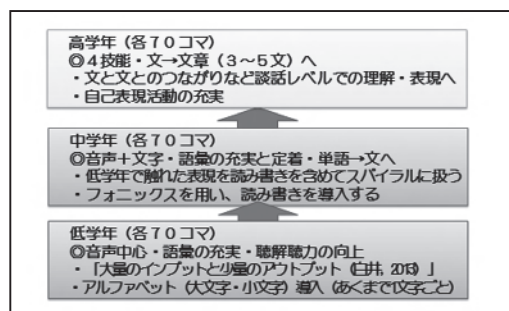


図1 低・中・高学年の積み上げ

本校では、文部科学省から研究開発学校の指定を受けて、全教科で、教科の特性を活かした形で「グローバル人材」の育成のための取り組みを行っている。グローバル社会に対応する人材の姿については以下のように考えている。

- (1) 国や地域が違う人たちと共通の言語で語り合える姿
- (2) 物事の道理にそって考え、表現している姿
- (3) 相手と自分との差異を把握しようとし続ける姿・差異を把握している姿
- (4) 予想外の出来事にも対応できる姿

この4つの姿のうち、英語科としては、とりわけ(1)に関する取り組みを行っており、コミュニケーション能力の育成を目指している。

実践例としては、中学年では、低学年で慣れ親しんだ語彙・表現をスパイラルに扱い、その定着を図っている。フォニックスの学習も取り入れ、徐々に「読むこと」（語レベル）の学習も導入しており、児童の負担を考慮しながら、「書くこと」（語レベル）の学習も取り入れている。4年生は、後期からフォニックスを意識した、初歩的な文レベルの「読むこと」の学習も開始している。

高学年では、「読むこと」や「書くこと」の比重を増やし、児童の負担を考慮しながら、4技能を統合した授業を行っている。

「読むこと」においては、Oxford Reading Tree (ORT) の Stage One と Two を読む学習を導入している。「書くこと」においては、これまでに学習した表現（ORTを含む）を用いて日記を書いたり、Christmas letter を書いて、米国 Austinburg Elementary School

との交流を行ったりした。



3. 小学校6年間を見通した社会科（その他の要素）

なぜ、今、「グローバル化社会を生き抜く子どもを育てる」ために、低学年から社会科をスタートするのか。端的に言えば、次の二点の考えに基づいている。

一点目は、グローバル社会に対応するために、より一層社会形成力を充実していく必要があるからである。二点目は、現在と生活科を導入した時とは時代背景が異なるからである。

このような考えのもとで、実践事例として、第1学年の社会科の概要について述べていくこととする。

(1) 生活科で学習する公園の特徴

生活科の目標の一つに、「主に自分と人や社会とのかかわりに関すること」がある。学習指導要領には次のように記されている。

(1) 自分と身近な人々及び地域の様々な場所、公共物などのかかわりに関心をもち、地域のよさに気づき、愛着をもつことができるようにするとともに、集団や社会の一員として自分の役割や行動の仕方について考え、安全で適切な行動ができるようにする。

生活科では、自分を中心として、「身近な人々及び地域の様々な場所、公共物などのかかわ

り」に関心をもたせ、地域のよさに気付かせていく。身近な公共物として地域にある公園が取り扱われた場合、生活科では春、夏、秋、冬と4回と繰り返して公園に行くことにより、子どもの気付きを深めることを試みている。

では、何を気付かせることをねらいとしているのか。学習対象・学習活動等が「公共物や公共施設を利用する」の場合の、「思考・認識等」「能力・態度等」の内容を、同じく学習指導要領から記す。

【思考・認識等】

身の回りにはみんなで使うものがあることやそれを支えている人々がいることなどが分かる。

【能力・態度等】

それらを大切にし、安全に気を付けて正しく利用することができる。

これらの内容から、生活科の公園学習は次の特徴がある。それは、「公園はみんなが使うものであること」「公園を支えている人々がいること」の認識である。また、「公園を大切にし、安全に気を付けて正しく利用する」能力や態度を養うという特徴である。

(2) 低学年社会科(1989年以前)で学習する公園の特徴

生活科以前の低学年社会科では、公園をどのように学習していたのか。『小学校指導書社会編』(文部省、大阪書籍、1980)によると、次のような記述がある。

ここで、「学校や公園にある」と示しているのは、学校や公園に備え付けられているものであることを指している。そして、その「道具や施設を人々が共用している」という場合の人々とは学校であれば、児童を指すことになるが、公園その他の場合では、幼児、児童、生徒などを含めて考えることができるであろう。ここでのねらいは、人々がこのような道具や施設を共用していることに気付かせることにある。

公園は、公共施設であり、公園内の遊具や道具は、公共物であるという認識をしていくことをめざしている。生活科では、「みんなで」という表現だったものが、自分自身を含めた児童や、幼児、生徒などと例示がされていた。つまり、生活科の公園を用いた学習と、低学年社会科の公園学習はめざす認識が共通していた。次の低学年社会科の記述も、生活科の「公園を支えている人々がいる」と共通している。

また、これらの道具や施設の世話をしている人々がいることにも気付かせることが大切である。

これらのことを踏まえて、公園の花壇を整備したり、公園を掃除したりしている地域の人に着目した実践も行われている。このような実践では、地域の人による花壇整備、公園掃除という事実より、「わたしたちのために、誰かがお世話してくれている」という、社会的な見方や考え方を育ててきていた。

このような生活科や低学年社会科(1989年以前)の公園学習の特徴を踏まえて、本研究における低学年社会科の公園学習は次の3点に留意する。1点目は、生活科や低学年社会科に共通していた、共用や支えている人々(世話をしている人々)を踏まえるということ。しかし、これだけでは、グローバル社会に対応した公園学習とはいえない。それは、グローバル社会にともない、社会状況も変化し、公園の施設や遊具が変わったためである。そのため、2点目として、社会的状況の変化による、公園の変化に留意する。例えば、水飲み場の形状。写真のように、小さい子どもが使いやすい位置にあつたり、お年寄りが使いやすいように手すりがついていたりする。また、車いすでも使いやすいようなスペースが設けられている。車いすでも使いやすいものとして、多目的トイレを備えている公園も多



(写真：ユニバーサルデザインの水飲み場)

い。写真のように、砂場の形状にも、車いすに配慮されている公園がある。

3点目は、グローバル社会への対応を考慮することである。本校のグローバル化は、「社会の多面的な変化」が生じるととらえている。公園における多面的な変化とは、「公園はみんなが使うもの」の「みんな」がより、幅広くなってきているということである。この「みんな」は誰を指しているのか。上記の例でいえば、幼児、子ども、大人、お年寄りとすべての人である。特定の人が入りにくいような公園ではなく、できるだけ、どんな人でも入りやすいような公園も設けられている。より幅広くなので、車いすの人、外国の人といった人々も含まれる。「みんな」の幅の変化により、公園内の配慮も幅広くされてきているのである。なお、子ども、大人、お年寄りなど、人によって公園を利用する目的は異なる。このような公園を利用する目的について追究していくことにより、社会を形成している要因について認識させ、子どもたちの公園に対する見方を広めていきたい。



(写真：車いすでも利用できる砂場)

(2) 公園の教材化

子どもたちにとって、公園はどんな場所なのか。子どもたちの答えとしては、「遊ぶところ」「休憩するところ」という答えが多い。「遊ぶところ」「休憩するところ」は、普段の生活の中で、子どもたちがどのように公園を利用しているかをよく象徴している。しかし、公園を利用する目的は多々ある。また、公園の種類によって、公園を利用する目的も様々である。

街区公園や近隣公園と子どもたちが、普段よく利用するものもあれば、車で出かけて家族で利用するような公園もある。利用する目的が異なれば、利用する人々も異なる。そのため、公園は、多様な見方を育成する教材となりうる。

なお、実践で教材化した公園は千田公園である。一つ目の理由として、千田公園が休息、鑑賞、散歩、遊戯、運動等総合的な利用を想定した総合公園のためである。公園は、「遊ぶところ」「休憩するところ」というイメージがある子どもは、公園の利用目的について見方を広げることができる。そして、どんな人が、「鑑賞、散歩、運動」といった目的で千田公園を利用するのか、見方を広げることができる。

また、千田公園には、スロープと、多目的トイレを備えている。本校の近くで、スロープを備えている公園は、千田公園と広島平和記念公園である。街区公園や近隣公園でスロープはなかなか備えられていないという現状である。スロープに着目することにより、誰の利用を想定してスロープがつけられているのか考えるきっかけとなる。

多目的トイレは、学校近隣のいくつかの公園にもよく見られる。しかし、千田公園の多目的トイレの特徴は、小さい子ども用の便座があるということである。また、千田公園の水飲み場の形状は、車いすの人や小さい子どもでも使いやすい形状となっている。千田公園は、どんな人が利用しやすいように考えられている公園なのかについて追究していく学習において、適している公園である。

(3) 「こうえんは だれのもの?」の開発と実践

第1学年「こうえんは だれのもの?」を次のように開発し、実践した。

①単元の指導目標

- 公園は、多目的トイレや水飲み場、広い通路といった体が不自由な人でも使いやすいように配慮していることを、写真や資料を比較して考えることができる。

②単元計画（11時間完了）

時	おもな問い	目 標	教材・教具
1 ・ 2	・公園で遊ぶルールを決めよう。 ○「なぜ、○○してはいけません」なのだろうか。	・遊具やベンチ、トイレなどを、自分たち以外の人が使っていることを想定し、順番を守る、さわがないといった行為が大切であることに気付くことができる。 ・自分たちで決めたルールについて、再度吟味することができる。	・公園のイラスト ・遊具の写真 ・ベンチやトイレの写真
3	○公園には、どんな工夫がされているのかな。	・「公園はみんなのもの」の「みんな」とは、自分たちだけでなく、幼児、大人、お年寄りなど、いろいろな人を指していることに気付くことができる。	・多目的トイレの写真
4 ～ 7	・千田公園へ行こう ○誰もが使いやすい工夫があるかな。	・多目的トイレにおける車いすのピクトグラムに着目し、多目的トイレの特徴を知ることができる。 ・水飲み場の高低差に着目し、何のために高い水飲み場、低い水飲み場があるのか考えることができる。 ・トイレに、「清掃チェックシート」がついていることから、トイレを掃除してくれている人がいることを知ることができる。	
8	○千田公園で、子どもにとって使いやすい遊具や施設は何かな。 ○誰もが使いやすい公園になるために必要なことは何かな。	・遊具や施設の位置から、千田公園は、子どもが使いやすい区域と、大人が使いやすい区域に分かれていることを知ることができる。 ・車いすユーザー、妊婦、お年寄り、日本語がわからない外国人といった、誰もが使いやすい公園になるためには、何が千田公園に必要なか考えることができる。	・千田公園内の遊具、施設カード ・人物画（フラッシュカード）
9	○お年寄りの人が過ごしやすい公園を考えよう。	・お年寄りの人が千田公園で過ごしやすくするためには、ベンチやトイレがどうあるべきか考えることができる。 ・お年寄り子どもが、千田公園で一緒に過ごすためのアイデアを考えることができる。	・千田公園内地図 ・トイレ、ベンチのカード
1 0	○公園のベンチやトイレは、なぜ形が変わってきたのだろうか。	・トイレやベンチ、水飲み場のそれぞれ3枚のカードを、古いものから順に並びかえることができる。 ・トイレやベンチ、水飲み場は、新しくなるにつれ、誰もが使いやすくなるよう改善されてきたことを知ることができる。	・トイレ、ベンチ、水飲み場のカード
1 1	○千田公園は、どんな人たちが、何をするために利用しているのだろうか。	・千田公園での活動を振り返り、千田公園は自分たちにとって、遊ぶことや休憩することを主な目的にすると理解することができる。 ・千田公園は、自分たちだけでなく、小さな子どもや大人、お年寄りや、車いすの人たちにとっても過ごしやすい個所があることを、説明することができる。	・千田公園内の遊具、施設カード

(3) 本単元の実践と子どもの反応

この授業は、グローバル社会だからこそ、低学年社会科で社会的な見方や考え方を育てていくことをねらい開発した。公園は、多目的トイレや水飲み場、広い通路といった体が不自由な人でも使いやすいように配慮していることを、写真や資料を比較して考えていく



(写真：健康遊具は誰のため?)

学習を行った。この学習活動を通して、公園が体の不自由な人だけでなく、お年寄りや、小さい子どものために工夫されていることを認識させていくことを目標とした。このような社会的な見方や考え方が、子どもたちにどのように身についたのかについて分析を行った。

第1時から第3時では、「公園はみんなのもの」の「みんな」が、誰のことを指すのかについて考えた。今までの公園を利用した経験より、自分たちより小さい子どもや、大人、お年寄りといった人たちに着目することができた。また車いすユーザーや妊婦、外国人の存在にも気づき、より多面的に公園について考察していく視

点を設けることができた。次に、第4時から第7時では、実際に公園の見学を行った。車いすユーザーの視点で、多目的トイレを考察したり、お年寄りや小さい子どもの視点で水飲み場を使用したりした。また、公園内が子どもと自分より小さい子どもが遊ぶゾーンが分かれていること、大人がスポーツをするゾーンが分かれていることについて、理解を深めることができた。第8時から第11時では特にお年寄りに焦点を当てることで、ベンチの形状やトイレ、水飲み場の形について考察をしていった。ベンチやトイレがどのような形状をしていると、お年寄りにとって使いやすい公園となるのかという見方を広めていくことができた。

以上、グローバル社会に対応した授業づくりを行うことで、様々な人の視点から公園について考察を深めることができたことから、社会形成力を育成する授業構成の在り方を示すことができた。しかし、子どもの一人一人異なる意見を、十分に交流し、他者理解をする場面を位置付けられなかったことから子どもの他者理解をする手立てについて検討していきたい。



(写真：お年寄りが公園で使いやすいトイレは?)

4. 小学校6年間を見通した理科（その他の要素）

まずは、先に述べた本論における大きな一つの問いである、なぜ今、「グローバル化社会を生き抜く子どもを育てる」ために、低学年から理科をスタートさせるのかという問題について考えていきたい。端的に言えば、次のような考えに基づいている。

グローバル化社会を生き抜くためには、科学的リテラシーは重要な能力の一つである。そして、その育成は、小学校段階では理科によって行われる。低学年理科において、発達段階の特性を考慮し、自然の特徴を全体的、直覚的にとらえる観察・実験活動を充実させることで、小学校6年間の一貫性のある理科の視座から低学年の2年間を位置づけ、小学校理科の指導をなお一層充実させるという理由から、低学年理科を実践する。

このような考えのもとで、第1学年の実践について述べていく。

(1) 第1学年「いし」の実践について

ここでは、問題解決の過程を踏まえた第1学年「石」の実践事例を論じていく。しかし、その際低学年であることの実態を考慮すると、やはり体験活動の重要性は無視できない。この理科における体験活動については、野上が、その活動を理科の指導目標達成のみならず、自主的、主体的なものに構成し、児童相互に積極的に作用させあうことによって、児童の個性の伸長につながっていくものにしていくべきという指摘を行っている⁽⁷⁾。実践では、これを大切な視点としつつ、ここまで述べてきた問題解決の場面につながるようにしていきたいと考えた。

①本単元の学習での体験活動①「石さがし」

本単元において、まずは、「石さがし」を行った。具体的には、ただ単に学校の敷地内にある石を探すと活動ではあるが、その際に、「自分の石」と「みんなの石」とに分けるよう

に伝えた。特に自分の石については、自分が集めた石の中から好きな石1つを自分の石とするように指示し、なぜその石を自分の石としたのかをこれまで理科で学習してきた観察をするときの視点である色・形・大きさという視点から自分の言葉で言えることを大切にしたい。子どもたちは石をえらび、「恐竜の爪みたい」といったことや、「たまごみたい」といった、形を比喩的に言葉で表す児童もいた。

そして、自分の石については、大切に保管をするようにした。また、拾った石で、自分の石でないものはみんなの石とし、石置き場を作って、そこに集めるようにした。

②本単元の学習での体験活動②「にている石さがし」

そして、次は自分の石と似ている石を探し、どれくらい似ているかを比べ合う活動を行った。この活動の際にも、これまでの理科で学習した観察の視点である色・形・大きさがそれぞれ似ているかどうかについてを評価するように伝えた。子どもたちは、「色が似ている石」を探したり、「色と大きさが似ている石」を探してきたり、「色も形も大きさも似ている石」を探してきたりすることを通して、石についての興味も膨らんでいった様子であった。

③本単元の学習での体験活動③「石つみ」

そして、次の体験活動では、「石つみ」を行った。これは単純に石を積み上げていく活動である。ただし、児童に何の指示も与えずに石つみをさせることは、無目的かつ、活動にのみ終始してしまうと考えたので、条件を与えて、その条件のもとで、石つみを行うこととした。その条件とは、「土台の石は1つだけ」という条件である。土台を1つにすることで、子どもたちは、土台の石えらびを慎重に行う。その際には、形や大きさといった視点が非常に重要になる。また、その土台の石が決まったら、今度は、上に石をつみあげていくのだが、その際



には、やはりバランスがとれ、なおかつ積み上げやすいという条件を考慮しながら形や大きさがちがう石を積まないといけな。子どもたちは石を高く積むことを楽しみつつ、石のいろいろな形や大きさなどに考えを巡らせていた。中には、石の形を変えようと、地面を使って、石を削っている児童もいた。そして、一通り、石積が終わったところで、やはり、これまでで学習してきた「色・形・大きさ」の中で積み上げる石をえらぶ際には何に気がつけたのかを確認すると、「形と大きさ」という声が返ってきた。逆に「高く積むのに、色は関係ない」という声もあった。このように、石を通して、その色や形や大きさが様々であることを学ぶだけでなく、観察の大切な視点である色、形、大きさについても常に意識させて指導を行っていった。

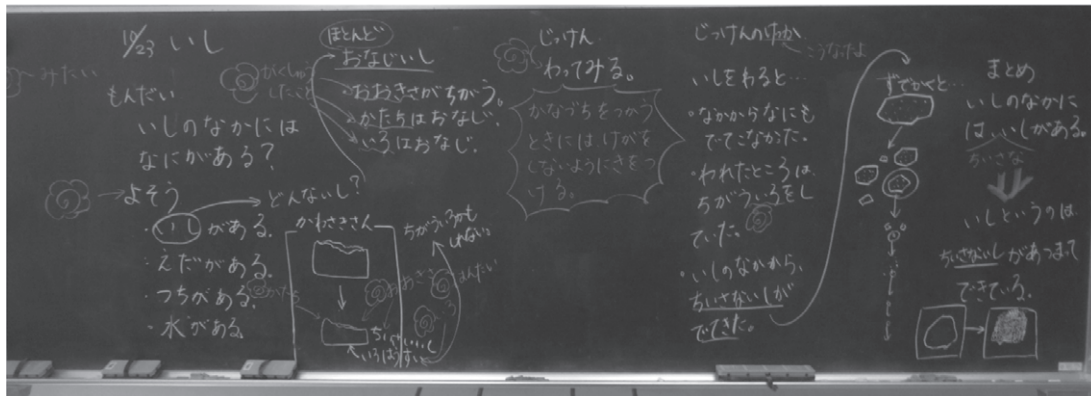


ここまでの活動を通して、子どもたちは石について、その色や形や大きさが様々であるということだけでなく、活動を通して石に対して興味を膨らませていくことができた。そして、ここで学習を終わらせるのではなく、ここまでの学習を踏まえて、問題解決の場面を設定することとした。その実践について以下に説明する。

④問題解決の場面

次頁の写真が、問題解決の場面の板書である。このように、理科の問題解決の過程に沿って、授業を進めた。

まずは、問題の場面であるが、この場面については、子どもたちがこれまで石をたくさん観察してきたが、それらはすべて目に見えるところを観察していることを声掛けをした。まだ石の見ていないところがあるという声掛けをしたところ、石の中のことに気付いた。そこで、石の中にはなにがあるかという問題を子どもたちに問いかけると、子どもたちは自分の考えを



口々に言っていたそこで、本時で重要なのは、問題解決の過程に沿うことなので、自分たちが言った問題に対する答えに相当するものを予想とよぶことを伝えた。そして、その予想について根拠や詳しい考えを聞いていき、どんな実験をすればよいかを問うと、わるという実験を考えることができた。つまり、それぞれの問題解決の過程を丁寧に追いながら授業を進めていくことを心掛けた。そして、実際に石を割ってみると、中からは何も出てこず、ただ、小さな石が出てくるだけだった。



そこで、何があったか?と聞くと、石があったというだけであった。そして、そうやって実験をしてみて、自分たちが見たことや聞いたことを結果とよぶことをこちらから教えた。そして、結果からは、石の中には小さな石が入っていたということから、石は小さな粒からできているということ子どもたちにつかませていった。子どもたちが石は小さな粒でできているということを本当に理解できているかどうかについては検証の必要があるが、問題解決の過程の定着については、このように継続していくことで身に付けさせていきたい。

また、本実践では、十分な体験活動を行ったために、このような問題解決の場面を設定できたのではないかと考える。つまり、子どもたちが活動を通して石に対して十分に興味・関心をもつことができ、なお且つ、石にたくさん触れ、その色や形、大きさを見るという経験を多くしたことによって、石について問題解決をはかることができた。このように低学年であっても、体験活動を十分にした後であれば、問題解決の能力を育成するための授業は可能であることがこの実践から得られた知見である。

ここまでで、なぜ、低学年から理科をスタートするのか。また、本年度から始まった低学年理科は、これまで行われてきた低学年理科とどのような違いがあるのか。これらの点について、簡単に論じた。

まずはなぜ低学年から理科をスタートさせるのかという点については、科学・技術を背景とした社会的諸問題への対応として、科学的リテラシーの育成が必要であることを明らかにした。そして、その育成を目指すにあたり、低学年から理科を行うことで、発達段階に即した観察・実験活動の充実と問題解決能力を育むことが、科学的リテラシーの育成につながると考えた。

そして、これまでの低学年理科との違いについては、現在の児童の発達の特性を踏まえた上で、現在の小学校理科カリキュラムとの整合性を保ち、問題解決の能力を育成していくという点に重点を置いている点が挙げられる。それに伴い、低学年理科における体験活動の意義も、

問題解決の授業をすることにつながっていく必要があるということを実践の事例を踏まえて明らかにした。

今後は、カリキュラムの作成と、日々の実践の中で、体験活動と問題解決の能力の育成に資する授業場面との関連を図れるように単元レベルで具体的な指導について考えていくことが課題として挙げられる。なお、次頁に、現段階の低学年を踏まえたカリキュラム案について提示する。次年度以降はこれをもとにして、低学年を含めた6年間の理科カリキュラムを作成していきたい。

5. 課題と今後への展望について

今年度の取組を通して大きな課題となったことは、グローバル化社会を生き抜く子どもの育成のために各教科で育成すべき資質・能力について明らかにし、実践事例を提案することはできたものの、それをカリキュラムとして学年ごとに系統性をもたせるには至っていないという点である。この点は大きな課題ととらえている。特に、低学年から始まった社会科や理科については、小学校6年間を見通したカリキュラムを作成していく必要がある。

そこで、次年度については、各教科で育成すべき資質・能力を育成するカリキュラム作成に取り組んでいくこととする。そして、作成したカリキュラムについては、本校が文部科学省の研究開発学校の指定を受けていることから、そのような場での指導・助言、および成果発表等を通して評価されていくことが重要であると考えます。

文献

- (1)広島大学附属小学校、「社会のグローバル化に対応した広島大学附属小学校の取り組み」、『社会のグローバル化に対応した初等中等カリキュラムの開発Ⅱ』, pp.10-11, 2014
- (2) 文部科学省,「国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的施策」, 2011, http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/icsFiles/1343704_01.pdf.
- (3)文部科学省,「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」, 2011, http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/_icsFiles/afieldfile/2014/01/31/afieldfile/2011/07/13/1308401_1.pdf.
- (4)同上書
- (5)文部科学省, 小学校学習指導要領解説 外国語活動
- (6)文部科学省,「今後の英語教育の改善・充実方策について 報告」, 2014
- (7)野上智行,「活動を中心とした低学年の理科指導」,『昭和53年度初等教育全国協議会個性を伸ばしあう学習集団の創造—教科の本質・学級経営のあり方を問題として—』, pp43-45, 1979

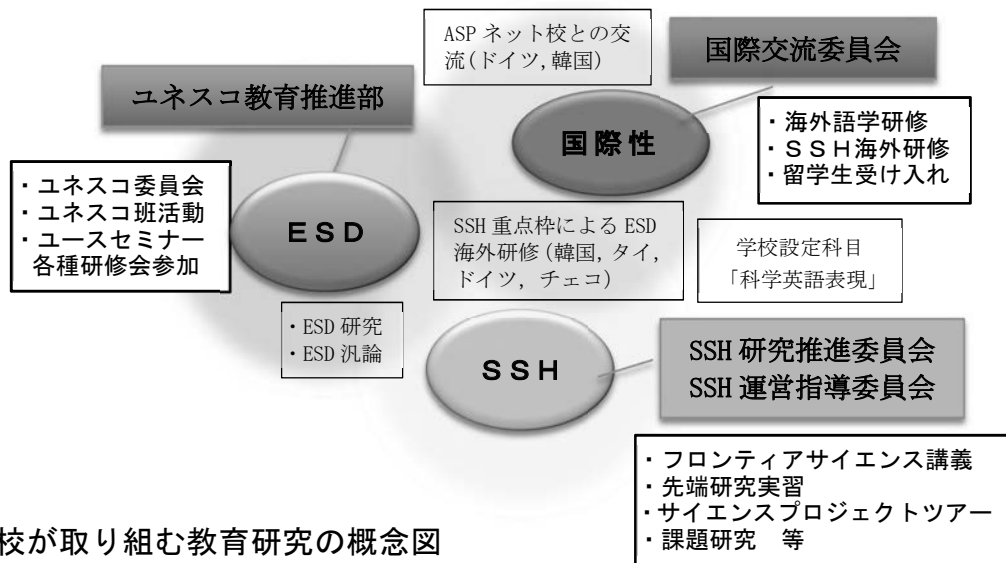
Ⅲ. グローバル人材育成のためのカリキュラム開発と今後の課題

広島大学附属中・高等学校

1. グローバル人材育成の3本の柱

本校がこれまで組織的、継続的に取り組んで来たグローバル人材育成のための教育プログラムは、次に示す3つの柱よりなる。

- (1) ユネスコスクール 昭和 28 (1953) 年よりユネスコ協同学校に参加
 - ・ 広島ユネスコ高校生海外研修第 1 回 1991 年 (訪問国米国) 以降 5 ヶ年生徒参加
 - ・ 2006 年度「アフリカの子どもたちに運動靴を」に毎年参加
 - ・ ユネスコ・アジア文化センター (ACCU) による国際教育交流事業に本校教職員 2008 年以降 3 ヶ年参加
- (2) SSH 事業における海外研修
 - ・ 平成 21 (2009) 年度, 重点枠でドイツへ 10 名
 - ・ 平成 22 (2010) 年度, コア SSH 事業として, ドイツへ 14 名
 - ・ 平成 22~25 年度, 韓国天安中央高等学校への訪韓, 訪日研修 (1 回の訪韓で生徒約 40 名, 平成 25 年度までで延べ 150 名程度訪韓, 訪日参加, 韓国の高校生約 120 名参加)
 - ・ 平成 25~26 年度 SSH 重点枠による, 韓国, タイ, チェコ, ドイツとの連携事業
- (3) 国際性の育成
 - ・ 毎年, 数名の生徒が約 1 年間の留学
 - ・ 平成 20 年, 生徒 20 名がイオン環境財団イオン 1%クラブ企画・出資プログラムに参加 (ドイツ)
 - ・ 平成 14 年度より, 高校 1 年の春期休暇中に約 2 週間の「海外語学研修」実施
 - ・ 留学生を数年に 1 名程度受け入れ



本校が取り組む教育研究の概念図

2. カリキュラム開発の事例

(1) 幅広い視野の育成を目指した取り組み

(ア) SSH事業（通常枠）に関する取り組み

・フロンティアサイエンス講義

平成 26. 6. 4 (水) 「みんなで科学者になろう！」 横浜国立大学大学院環境情報研究院 教授 根上生也先生

平成 26. 6. 4 (水) 「もっと自由に考えるー位相幾何学的グラフ理論入門ー(第2学年 SS コース対象特別講義)」 横浜国立大学大学院環境情報研究院 教授 根上生也先生

平成 26. 7. 7 (月) 「放射光をつかって物質の本性を見抜く！」 広島大学大学院理学研究科 准教授 森吉千佳子先生

平成 26. 9. 16 (火) 「放射光で見る分子の対掌性と生命の仕組み」 広島大学放射光科学研究センター 助教松尾光一先生

平成 26. 10. 2 (木) 「放射光を用いた地球内部構造の解明」 広島大学大学院理学研究科 助教 佐藤友子先生

平成 26. 11. 5 (水) 「昆虫の世界」 神戸大学大学院理学研究科 講師 佐倉緑先生

・「科学と倫理」の取り組み

平成 26. 11. 14 (金) 「科学者と『まちがった理論』の科学史」 広島大学大学院総合科学研究科 准教授 隠岐さや香先生

平成 27. 2. 17 (火) (全体テーマ) 「STAP 細胞問題から何を考えるか」
(個別テーマ) 「生命科学研究と倫理的問題」 広島大学大学院総合科学研究科 准教授 佐藤明子先生
「研究不正とは何か：STAP 細胞問題からわかること」 広島大学大学院総合科学研究科 准教授 隠岐さや香先生

(イ) ESD に関する国内外の取り組み

[国内] 平成 26. 4. 11 (金) ～12 (土) NPDI(軍縮・不拡散イニシアチブ)ユース非核交流プログラム参加 (広島) 小櫻智穂

平成 26. 8. 4 (月) JISS(Japanese International Student Society) 広島平和研修 応接 小櫻智穂

[国外] 平成 26. 4. 2 (水) ～6 (日) CIF(Critical Issues Forum)に参加 アメリカ モントレー大学における軍縮・不拡散会議 小櫻智穂

平成 26. 7. 22 (火) 朴大王教授 (広島修道大学), 藤原隆範教諭 (本校) による韓国 海外研修事前学習

平成 26. 7. 28 (月) ～31 (木) ESD韓国海外研修(韓国 天安市)天安中央高等学校訪問

平成 27. 1. 13 (火) ～14 (水) ESD韓国訪日研修 (広島) 天安中央高等学校来校

(ウ) SSH 事業（重点枠）における海外校との連携事業

1) 2年間の訪問国、受け入れ国の関係、及び実施時期と参加生徒数

連携国	韓国	タイ	ドイツ	チェコ
H25年度	訪日 15(14)	政変のため訪問中止 15(国内研修)	訪問 10,5(15)	訪日 15(1)
H26年度	訪問 15(15)	訪日 15(15)	訪問 5(9)	訪問 10,5(15)

() 内の数字は連携国の参加生徒数, ゴシックは広島国泰寺高校の参加生徒数を示す

2) 研修内容

事前に実施してきた各国生徒による共同調査研究の成果を発表する。共同調査研究テーマとしては、地域の特性に応じた内容を実施した。（ドイツ：ゴミ処理を通じたエネルギー問題、及び都市におけるヒートアイランド現象と再生可能エネルギーの可能性、チェコ：醸造所研修によるバイオ技術から見た環境問題、韓国：瀬戸内海の開発と環境保全、干潟の生態系と環境に与える影響、タイ：河川の水質から地域の水資源と持続可能性について）また、海外連携校生徒と一緒に、現地または日本で、対象地域、関連施設、企業、行政機関等へのフィールドワークを行い、得られた成果に関する討論とプレゼンテーションを行った。

参加生徒には、全員情報端末機器(iPadmini)を貸与した。得られた情報のリアルタイムでの整理と生徒間による共有化、連携国生徒とのネットワークを介した定常的な交流を行うためのツールとして、端末使用のためのガイダンスを行い、活用させた。

3) 派遣、及びホスト生徒について

①対象生徒（高等学校1, 2年の全生徒）の条件

- ・韓国、タイ、ドイツ、チェコのいずれか一カ国に参加できる。
- ・連携国（韓国、ドイツ、チェコ）を訪問する高校1年生は、平成27年度両国生徒訪日時のホスト生徒となる。（引き続きSSH重点枠が採択された場合）
- ・タイ訪日交流事業で、ホスト生徒となった高校1年生は、平成27年度連携国を訪問することができる。（引き続きSSH重点枠が採択された場合）

②派遣生徒の主な活動

- ・環境に関する調査研究を行い、プレゼンテーション資料を作成する。
- ・連携国の生徒とインターネット等による情報交換を行う。
- ・今年度は韓国、ドイツまたはチェコの連携校を訪問し、調査研究内容の発表、相手校の生徒と合同フィールドワーク、プレゼンテーション、意見交換等を行う。

(2) 英語によるコミュニケーション能力育成のための取り組み

学校設定科目「科学英語表現」

平成26. 7. 25（金）プレゼンテーション特別講義（講師：有限会社インスパイア
副代表 ヴィアヘラー幸代先生）

平成 26. 12. 1 (月) ～2 日(火) 英語合宿 (於 ; (財)広島市未来都市創造財団広島市国際青年会館)

- ・プレゼンテーションワークショップ (講師 : ヴィアヘラー幸代先生)
- ・プレゼンテーション特別講義 (講師 : 獨協大学・東洋大学 講師 松岡昇先生)
- ・海外研究者による講義 (独立行政法人日本学術振興会のサイエンスダイアログ事業) (講師 : 島根大学生物資源科学部 Roxana Y. PARADA JACO 博士, 教授 荒瀬榮先生)
- ・英語による課題研究ポスター発表および指導
(指導者 : 広島大学国際センター准教授 恒松直美先生, 松岡昇先生, ラング教育センターALT, 本校英語科・理科教諭)

3. グローバル人材育成のための教育実践から抽出される資質・能力と評価・検証の在り方

平成 22 (2010) 年から本格的に実施している国際交流事業 (韓国研修) の実践を通して、グローバル人材に求められる資質・能力を次のように (1) ～ (4) の4つのカテゴリーとそれぞれに対応した項目に整理した。

- (1) 幅広い視野と見識
 - ・幅広い基礎的教養
 - ・自国や他国の歴史, 文化, 生活習慣等の理解
 - ・自国と他国の違いを認識し, 理解しようとする態度
- (2) 異文化に柔軟に対応する力
 - ・旺盛な好奇心
 - ・既存の考え方を変えることを厭わない進取性
 - ・他者を尊重する態度 (他者への思いやり)
- (3) 他者と共生し, 他者の良さを引き出す力
 - ・相互に理解しあい, 協力することの大切さやすばらしさを見出し, 将来に渡って互いを尊重し合おうとする態度
 - ・新たな価値を見いだそうとする創造性
 - ・全体をまとめ方向性を示すリーダー力
 - ・問題を発見し, 問題解決のための方法を他者に伝える力
- (4) 英語によるコミュニケーション能力
 - ・英語による表現力
 - ・積極的に他者に働きかける力
 - ・相手の考えを理解し, 自分の考えを論理的に組み立て, 説明する力

今回, 『『グローバル人材育成』への対応表』 (広島大学大学院教育学研究科准教授岩田昌太郎氏作成) と比較して, 特に本校が取り組んだ要素は要素 I (語学, コミュニ

ケーション)、要素Ⅲ(異文化理解、アイデンティティ)、その他の要素(問題解決能力、ICT活用能力)に相当する。またこの領域は、上に示した抽出要素では、要素Ⅰは(4)に、要素Ⅲは(1)に、その他の要素は(3)にそれぞれ対応している。これらの内容についての評価・検証は、生徒、学生、院生、教職員等を対象としたアンケート調査を行うことによって、問題点の把握や改善の方法を探っていくことが考えられる。

4. 成果と課題—来年度に向けての改善点—

グローバル人材の育成に求められる資質・能力として、先に示した4つのカテゴリにおける(1)「幅広い視野と見識」を備えた生徒の育成については、通常の授業において、ESDの視点を取り入れた内容の実践、また「倫理の探究」として教科固有の視点に基づいたカリキュラム開発を実践している。また、昨年度より総合的な学習の時間等で高等学校第Ⅱ学年約200名を対象に実施してきた「ESD研究」等を踏まえ、多面的な取り組みが定着しつつある。また、(3)「他者と共生し、他者の良さを引き出す力」の「問題を発見し、問題解決のための方法を他者に伝える力」については、特にESDの視点から捉えた環境問題をテーマにした海外連携において、生徒の事前・事後のアンケート調査やレポートの内容を分析した結果、問題を発見する力、他者に伝える力等の能力が着実に養われていることが明らかになった。(4)「英語によるコミュニケーション能力」の育成では、学校設定科目「科学英語表現」の実践による効果は大変高いことが挙げられる。このことは海外での生徒達のパフォーマンスの様子や、アンケート結果、また海外の指導者のコメント等から知ることができた。また、SSH重点卒業事業である4ヵ国との連携事業では、高1、2学年ではそれぞれ約20名(各学年全体の1割程度)、合計40名程度の生徒達が参加し、各事業の事前・事後学習で、あるいは歓迎会等での海外高校生達との交流で、さらにはホームステイや共同で実施するフィールドワーク等で直接海外の生徒達や家族とふれ合い、海外を身近にまた親しみを感じる機会を得ることができた。こうした取り組みは、先に3.で示した(2)「異文化に柔軟に対応する力」や(3)「他者と共生し、他者の良さを引き出す力」を育むものとして成果が得られた事例である。

来年度に向けての改善点として、次の点が挙げられる。まず、これまで実践した内容を様々な教育・研究機関における研究協力者等の指導、助言を得ながら精緻化、高度化し、ESDに関する内容に基づいたテーマを設定し国際交流を軸に推進する。また、韓国の科学重点校との連携を継続し、新たなカリキュラム開発を行っていく。

また、その他のグローバル化対応の取り組みとして、本年度は、本校が取り組んで来た実践内容を大学院生に説明する機会を1日設定したが、これを教育実習生のグローバルマインド育成のために、教育実習ガイダンス等の機会を利用して実施することや、本年度英語科以外の一部の教科で行うことができた英語による教材作成の取り組みを、他教科にも広げ学校全体で取り組むことも考えられる。

IV. グローバル人材育成における共生社会の基盤となる「協調性・柔軟性」の要素に特化した取り組み

広島大学附属東雲小学校

1. はじめに

本校では、グローバル化の進む社会において、様々な国々や人々が共生関係を築く上で基盤となる「協調性・柔軟性」に着目し、これをグローバル化人材に求められる資質・能力の柱としてとらえることにした（図1）。本年度は、この「協調性・柔軟性」を基に、グローバル人材育成推進会議で提言されたグローバル人材育成のための要素を効果的に育むことができるよう、以下を研究の重点とした。

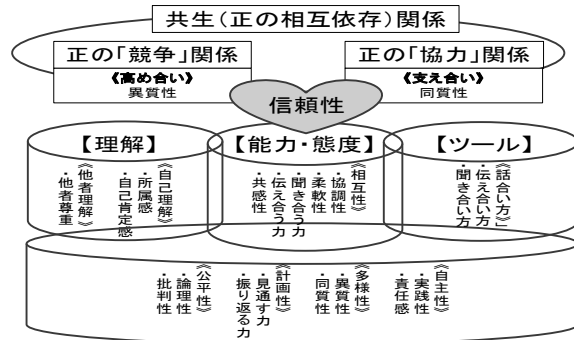


図1. 児童の共生関係を育む要素

共生社会を担う人材を育むための以下の取り組みを実施する。

- ①既存カリキュラムのねらいの再検討と改善したねらいによる取り組み
- ②共生社会を担う資質・能力を育むための授業開発・実践
- ③学校教育活動における教師の「意味づけ」や「評言」という手立ての実施

2. 本年度の取り組み

共生社会の形成者を育む上で、本学児童の課題やグローバル人材育成の観点を生かしながら、既存カリキュラムにある教育活動（学校行事や集団生活、授業）を見つめ直し、そのねらいや意義、関連性を全教職員で検討・確認し、東雲教育に関する共通理解を図ることをねらった。

(1) 既存カリキュラムのねらいの再検討と改善したねらいによる取り組み

東雲小のカリキュラムの中でも、東雲小の学級編成の特性を生かして児童の共生関係を育むことができるよう、「学校行事」・「特別活動」に焦点化してねらいの再検討を行った。昨年度の考察では、ねらいと実際の活動に差があるとともに、附属教員の経験年数など個人によってねらいのとらえ方がまちまちであったことが明らかとなった。この点を改善できるよう、①グローバル人材育成担当者と各分掌チーフで構成する「グローバル人材育成委員会」、②学校行事や特別活動の提案を行う校務分掌、③低・中・高の2学年の担任・専科で構成する学年部、さらに、④附属教員年数や教科、所属学年をシャッフルして構成したプロジェクトグループ、の4つの異なる集団を

構成し、その中で意見交換・連絡、ねらいの検討や立案を繰り返し行った。また、全体の協議の場である「グローバル人材育成会議」において、グループごとの検討を経た立案を基に2度話し合い、8月末までにねらいの改善や教員団の、「学校行事」・「特別活動」における意識統一を行い、9月以降の提案で生かすこととした(図2)。

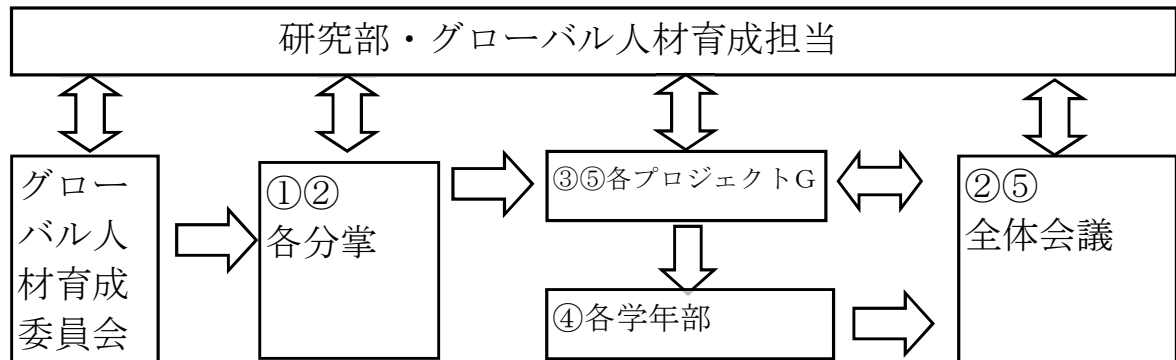


図2. 既存カリキュラムの再検討のための組織構成

実際に2回の「グローバル人材育成会議」では次のような内容が確認された。

《1回目》

- ① 部全体の柱となる項目、行事の設定。
- ② 日々の活動、柱となる大行事との系統性（共通点）と差異（相違点）の明確化
活動の重点に関しては、グローバル人材育成の要素における下位項目でとらえるのではなく、もう少し大きな枠で重点を考える。
- ③ 実際の活動やねらいの文言にある各項目を洗い出すことや重点化に止まるのではなく、出口を見据え、活動全体を包括的にとらえた場合、どういうねらいの文言がふさわしいか検討し、重点項目の焦点化を行うことが重要。
*重点が総花的なので、思い切った焦点化がいる。
- ④ 余りにも共生関係が内向きではないか。確かに学校全体、クラス、学年、色別といった学校社会という狭義な社会を対象とした共生関係の構築が基盤ではあるが、今後広い社会と関わる上でも、外との関わりがいる点が課題。

《2回目》

- ① 表は「自分たちにとって」・「見やすさ」という観点から重点(◎)のみにする。
- ② 枠は「自己理解・他者理解」の言葉を、公平性等と並列にして、児童部グループの表のように観点のもとに帯で示す。
- ③ 論理性よりも本校の特性を生かす観点から「自己肯定感・所属感」「他者尊重」を「受容性・共感性」と並列に、上位項目の「つながりを尊重する力」の上位概念に包摂する。
- ④ 各分掌の柱を以下に示す。
保体部・宿泊学習の柱＝「柔軟性・協調性」

教務部の柱＝「共感性・受容性」、児童部の柱＝「自己肯定感・所属感」

- ⑤ 重点をつける方法としては、重点化することで他の項目も連動して高まるような項目につける。
- ⑥ 宿泊学習は他の各分掌とは異なり、各活動ごと点を絞るのではなく、学年が上がるごとに重点項目が増える形式にする。

上記の内容を踏まえ、各分掌の学校行事・特別活動のねらいや重点を以下のように設定した。

【保体部提案】

OECDのキー・コンピテンシー				相互作用的に道具を用いる		異質な集団で交流する		自律的に行動する				共生を育む場の設定															
ESDの7つの態度・能力				批判的 思考・判断 する力	未来像を 予想して 計画を立て る力	多面的、総 合的に考 える力	コミュニケー ションを行う 力	他者と協力 する態度	責任を重ん じる態度	つながりを尊重する力			競争関係	協力関係													
共生関係を育む児童の資質				批判性 論理性	見通し 振り返り	同質性 異質性	伝え合い 聞き合い	柔軟性 協調性	責任感 実践性	受容性 共感性	自己肯定感 所属感	他者 理解	高め合い	支え合い													
月 集団形態 関わり 行事				めあて																							
				公平性・計画性・多様性・自主性・自己理解・他者理解																							
5	色別	同学年 異学年	運動会	<ul style="list-style-type: none"> ○責任と見通しをもって活動に取り組み、相手を尊重し、互いに高め合う態度を身につける。 ○集団行動における望ましい態度や、学年・学年の枠を超えて協力する力を身につける。 ○友達と一緒に練習したり、互いの演技を見合ったりすることを通して、日常においても積極的に友だちに関わり合うことができる。 ○仲間と一緒に体を動かすことを楽しみながら、体育の学習を中心とした日常の学習成果を総合的に発揮する。 										◎			◎	◎		◎			◎		◎	◎	
11	学年	同学年 異学年	リズム	<ul style="list-style-type: none"> ○なわとびの技能の習熟や、仲間とともに一つの演技をつくりあげることを通して、達成感や所属感を味わうことができる。 ○友達と一緒に練習したり、互いの演技を見合ったりすることを通して、日常においても積極的に友だちに関わり合うことができる。 ○リズム練習が大会を通して、運動に関する興味・関心を高め、日常においても安全に気をつけながら自己の体力向上に努めることができる。 																						◎	
	色組 学年	同学年	早期活動	<ul style="list-style-type: none"> ○安全に気をつけ、仲間と体を動かす楽しさを味わうことができる。 ○学年ごとに学級間交流の活性化を図る。 																							◎

【宿泊学習】

OECDのキー・コンピテンシー				相互作用的に道具を用いる		異質な集団で交流する		自律的に行動する				共生を育む場の設定													
ESDの7つの態度・能力				批判的 思考・判断 する力	未来像を 予想して 計画を立て る力	多面的、総 合的に考 える力	コミュニケー ションを行う 力	他者と協力 する態度	責任を重ん じる態度	つながりを尊重する力			競争関係	協力関係											
共生関係を育む児童の資質				批判性 論理性	見通し 振り返り	同質性 異質性	伝え合い 聞き合い	柔軟性 協調性	責任感 実践性	受容性 共感性	自己肯定感 所属感	他者 理解	高め合い	支え合い											
月 集団形態 関わり 行事				めあて																					
				公平性・計画性・多様性・自主性・自己理解・他者理解																					
7	学年 (3年)	同学年	三滝宿泊学習	<ul style="list-style-type: none"> 【見通し】 ○学校や家庭を離れ、見通しをもって宿泊活動を行うことにより、精神的・身辺的な自立を図る。 【大切な役割・協力】 ○自分の役割を自覚し最後までしっかりとやり切る。 【支え合う仲間】 ○共同生活を営むなかで、友だちのよさを見つける。 ○仲間を優先することのよさ、率先してもらった喜びを実感する。 【自然との会話】 ○自然とのふれあいを通じてそのよさや楽しさを感じる。 ○本物の自然に浸り、感じ、味わう。 										◎			◎								◎
9	学年 (4年)	同学年	海の学習	<ul style="list-style-type: none"> 【生活をつくる！】 ○自分の役目を最後まで果たす。 ○時刻を守り、見通しをもって行動する。 ○自分の身の回りのことは自分でする。 【海・自然とふれあい！】 ○海（自然）のよさ、楽しさを味わう。 ○命あるものを大切にす。 ○仲間との関わりを深める！ ○友だちのよさを見つける。 ○助け合い、支え合う関係をつくる。 										◎			◎	◎							◎
9	学年 (5年)	同学年	山の学習	<ul style="list-style-type: none"> 【生活つり】 ○家庭や学校を離れ、仲間とともに自分たちで生活を創り出す。 ○計画をもとに、自分や自分たちの力で見通しをもって行動する。 ○自分の役割を自覚し最後までしっかりとやり切る。 【支え合う仲間】 ○共同生活を営むなかで、友だちのよさを見つける。 ○仲間を優先することのよさ、率先してもらった喜びを実感する。 【自然との会話】 ○自然とのふれあいを通じてそのよさや楽しさを感じる。 ○本物の自然に浸り、感じ、味わう。 										◎			◎	◎	◎						◎
7	学年 (6年)	同学年	旅の学習	<ul style="list-style-type: none"> 【見つめよう自分を】 ○仲間の人・自然・文化と積極的にふれ合い、自分の見方・考え方を広めたり深めたりする。 【高まり合う仲間と】 ○集団生活の中で、友だちのよさを見つけ合う。 【気づこう関わりを】 ○社会の一員としての気配り、心遣いを大切にす。 										◎	◎		◎	◎	◎						◎

【教務部提案】

OECDのキー・コンピテンシー				相互作用的に道具を用いる	異質な集団で交流する	自律的に行動する			共生を育む場の設定					
ESDの7つの態度・能力				批判的 思考・判断 する力	未来像を 予想して計 画を立てる 力	多面的、総 合的に考 える力	コミュニ ケーション を行う力	他者と協力 する態度	責任を重ん じる態度	つながりを尊重する力	競争関係	協力関係		
共生関係を育む児童の資質				批判性・ 論理性	見通し・ 振り返り	同質性・ 異質性	伝え合い・ 聞き合い	柔軟性・ 協調性	責任感・ 実践性	受容性・ 共感性	自己肯定感・ 所属感	他者 尊重	高め 合い	支え 合い
月	集団形態	関わり	行事	公公平性・計画性・多様性・自主性・自己理解・他者理解										
4	同学年 異学年	同学年 異学年	始業式	○前期：全校が一室に集い新しい学年の始まりを仲間と共に意識し、進級した喜びを味わい、これからの学校生活に乗り組む意欲をもつ。 ○後期：全校が一室に集い、これから始まる後期の学校生活に仲間と共に期待を抱き、新たなめあての達成に向けて意欲をもつ。	◎					◎			○	
4	学年	同学年 異学年	入学式	○(新入生) ○小学校に入学した喜びを仲間と共に味わい、新しく始まる学校生活に期待をもつ。 ○(2～6年生) ○前1年生を迎え、共にようこそよ学校生活を創っていくとすする心構えをもつ。 ○自分の入学した頃を振り返り、自分の成長に気づき、よ級生としての自覚をもつ。				◎		◎	◎			○
3	学年	同学年 異学年	卒業式	○児童、教職員、保護者が卒業という新しい出発を心から喜び合うと共に、これまでの学校生活をふりかえり、今後の向上、発展への意欲を高める。 ○小学校6年間の全課程を終了して卒業するという喜びを仲間と共に味わい、新たな進路への希望と意欲を高める。 ○これまでの小学校生活をふりかえり、家庭、学校、社会などに対する感謝の気持ちをいづ。 ○卒業生と共に、これまでの歩みを振り返る活動を通して、卒業生への感謝の気持ちいづ。今後の自分の生活における向上、発展への意欲を高める。				◎		◎		◎		○
10 3	全児童	同学年 異学年	終業式 修了式	終業式：全校が一室に集い、仲間と共に過ごした前期の学校生活をふりかえるとともに、後期に向けての新たなめあてを定める。 修了式：全校が一室に集いして仲間と共に1年間の活動や生活を振り返り、次年度に向けての見通しや意欲をもつ。	◎									○
毎月	全児童	同学年 異学年	全校朝会	○全校児童と教職員が一室に集い、仲間と共に一体感を味わう。 ○これまでの自分をふりかえり、今後のめあてや見通し、生活目標について考え、仲間と共に意欲を明確にもつ。	◎									○
毎月	全児童	同学年 異学年	音楽朝会	○全校が一室に集い音楽活動を行うことにより、一緒に表現するよさや楽しさを感じる。 ○異学年の表現を鑑賞することにより、互いの表現のよさや違いに気づく。				◎		◎				○

【児童部提案】

OECDのキー・コンピテンシー				相互作用的に道具を用いる	異質な集団で交流する	自律的に行動する			共生を育む場の設定					
ESDの7つの態度・能力				批判的 思考・判断 する力	未来像を 予想して計 画を立てる 力	多面的、総 合的に考 える力	コミュニ ケーション を行う力	他者と協力 する態度	責任を重ん じる態度	つながりを尊重する力	競争関係	協力関係		
共生関係を育む児童の資質				批判性・ 論理性	見通し・ 振り返り	同質性・ 異質性	伝え合い・ 聞き合い	柔軟性・ 協調性	責任感・ 実践性	受容性・ 共感性	自己肯定感・ 所属感	他者 理解	高め 合い	支え 合い
月	集団形態	関わり	行事	公公平性・計画性・多様性・自主性・自己理解・他者理解										
毎 週 日	縦割り 異学年	縦割り活動	○異学年活動を通して、互いのつながりを実感し、児童自らかかわりを作る。 (低学年) ○一緒に楽しみながら進んで活動することができる。 ○分からないことは聞きながら活動することができる。 (中学年) ○自分の役割を考えながら責任をもって活動することができる。 ○相手の立場を考慮しながら活動することができる。 (高学年) ○見通しをもって、状況を判断しながら、計画的に活動することができる。 ○リーダーとして、グループ全体を考えながら活動することができる。	◎				◎		◎			○	
毎 日	縦割り 異学年	掃除活動	○縦割り活動の場として ○学年や学校の異なる仲間とのかわりを大切にし、集団への所属感を深める。 ○集団の中で自分の責任や役割を自覚し、公共心、協調性を養う。 ○時間を守って効果的に活動する工夫をする中で、主体的に行動するための素地を養う。						◎	◎			○	
4	縦割り 異学年	お迎え遠足	○新しい仲間と出会い、これから1年間活動していくことの期待をもつ。 ○互いに思いやり協力して活動することで、児童相互のふれあいを深める。							◎	◎		○	
2	縦割り (児童会)	6年生を送る会	○縦割り班を中心とした集会活動を行ったり、6年生への言葉を表現したりすることを通して、6年生に感謝の気持ちを表すことができる。 ○送る側のリーダーとして責任を持って活動することができる。(5年) ○協力し合って集会に参加し、縦割りの仲間とのふれあいを深めることができる。(1～4年) ○在校生に感謝し、東雲小学校に通ってよかったという気持ちを表す。(6年)							◎	◎		○	
児 童 会 (高 学年)	異学年 (高学年)	委員会活動	○「共生」の理念に基づいて望ましい人間関係を形成し、集団の一員としてよりよい学校生活づくりに参画し、協力して諸問題を解決しようとする自主的、実践的な態度を育てる。 ○児童の自発的・自立的活動が促進されるよう、全教員が協力して指導にあたり、適宜、適切な助言を行う。 ○児童の創意工夫が十分に生かされた、計画的・継続的な活動になるよう、年間の見直しをもって指導、助言にあたる。	◎					◎		◎		○	
毎 月	児童会	全校児童 児童朝会	○自分の手で学校生活をよりよくしようとする委員会の自主的活動の発表、報告、交流の場とする。 ○全校児童が一室に集いながら、児童会への所属感を高め、共に学校生活を送る仲間がいることを確認し合う場とする。	◎				◎		◎			○	
10	児童会	学級 全校児童	しのめ祭り	○「計画・準備→運営→ふりかえり」の一連の活動に進んで取り組むことにより、自主性を養う。 ○遊びやゲームなど自分たちでアイデアを出し合うなど、自ら創意工夫することを通して、学級内での児童相互のふれあいを深める。 ○他学年の取り組みにふれ異学年とのふれあいを図る。	◎				◎		◎		○	
10	児童会	被災地 世界へ	募金活動	○児童会活動の一環として、被災地、さらには世界で苦しむ子どもたちの現状を知り、自分たちの力でできる支援のあり方を考え、行動する。						◎	◎		○	
毎 4 ～ 6 年 生	異学年	クラブ活動	○同好の児童が、異年齢集団の交流を深め、所属する集団の生活を楽しく豊かにしようとする意図のもとに、個性的な活動を展開し、共通の興味・関心を追求しようとする自主性・社会性を育てる。 ○子どもの自主性が促進される活動になるよう、全教員が協力して支援する。 ○子どもの興味・関心に基づいた計画的・継続的な活動になるようにする。 ○子どもどうしの「かわり」を鑑賞し、異学年の交流が深まるようにする。	◎				◎		◎			○	
4 9 2	登校班 同学年 異学年	登校班別集會	○自分の近所や同方向から通ってくる仲間を知る。 ○自分たちの登下校について、ルールの遵守という視点から考え、より安全な登下校のための具体的な実践目標をもつ。						◎	◎			○	
2	学年	同学年 異学年	東雲発表会	○日頃の学習の成長を総合的に表現し、鑑賞し合うことを通して、自分たちの成長をふりかえり、さらに自己を伸ばそうとする。 ○発表の練習や準備、運営を通して、自主性、協調性や責任感を身につけるとともに、学級や学年の一員としての所属感を味わう。					◎		◎			○

(2) 共生社会を担う資質・能力を育むための授業開発・実践

今年度は、来年度の実施に向けた基盤づくりとして本校の課題に直結する児童の学級内における共生関係を高めるための方法について検討した。学級内での活動の9割が授業であることを重視し、道徳や学活はもちろんのこと、これまで意識されにくかった各教科の授業を通して、児童の共生関係を育んでいく必要がある。

そのための授業構成として、大きく以下の2つが考えられる。

第1に、グローバル人材育成の要素に関わる資質・能力を育む授業開発である。

第2に、それらの能力や態度を意識しながらも、本校の設定する共生概念や共生社会の構造を教科の学習内容と関連させて理解させる授業開発である。

第1に関しては、児童の発達段階や学習内容を考慮しながら、グローバル人材育成における態度や能力を焦点化することで、低学年でも行うことが可能と考える。重要なのは、先に示した児童の共生関係を育む資質を、どの段階でどこに焦点を当ててカリキュラムを構成するかである。最も効果的な方法は、各教科を通して各要素を重点的に育む活動を組みればよいが、各教科の習得内容や特活の集団活動を考えると、かえって複雑化し机上の空論となりかねない。そこで、各要素の重点化はカリキュラムの集団活動に任せ、教科ではグローバル人材育成の上位項目として挙げたOECDのキーコンピテンシーとして示す3つの能力を外さないよう意識して各学年に年間を通して組み込むことが重要であろう。児童の発達段階が上がるにつれ、下位項目として挙げるグローバル人材育成の要素を焦点化し、単元を工夫して構成できるよう弾力性を持たせることが現実的である。

第2に関しては、学習内容に共生関係の内容が関連している社会科や理科を中心に行うことが可能と考える。特に社会科では、実際の社会が学習対象であるため、現在の社会状況と児童の学校生活を関連させることで、児童の実感を踏まえた共生社会に関わる認識を育むことができると考える。

そこで、各教科で共生社会の担い手としての資質や認識を育む授業を、手探りながら開発した。これまで、生活単元（養護低学年）、図画工作科（複式高学年・養護高学年）、社会科（3年・複式中学年・5年・複式高学年）、国語科（複式低学年）、体育科（複式中学年）、算数科（6年）理科（6年）などの授業を行っている。紙幅の関係上、詳細については、割愛する。

(3) 学校教育活動における教師の「意味づけ」や「評言」という手立ての実施

他方、それらの授業を構成したとしても、実践において児童が意識できなければ意味がない。授業構成に組み込まれた共生関係や共生社会で育むべき資質を身に付けることの重要性を、児童に意識化させる必要がある。その手立てとして、以下の2つを挙げる。

1つは、先の授業構成の2つの視点に関する児童への「意味づけ」、もう1つは授業構成の視点に関わる児童の行動や発言に対しての「評言」である。

「意味づけ」とは、児童の活動の前後に対して、活動を行う意味や価値を教師が伝える

ことで、児童に考える視点や実感を与え、活動を社会生活する上での経験として高めていくための手段である。

例えば、ごみのリサイクル施設の建設の是非に関して、それぞれの意見を基に話し合った後、自分なりの理由を述べて意思決定を行ったとしよう。前の意見と見比べて感想を述べ合った後に、教師側から“建設の是非に関して、意見が変わった人もいれば変わらなかった人もいるでしょう。でも話し合い後の意見を決めた理由を見てごらん。例えば〇〇君は、『費用や時間がかかり、一部の地域は開発するけれども、市全体の自然環境や社会環境を維持する必要から賛成』と相手の考えをきちんと受け入れながら自分の考えを述べています。みなさんはどうですか。話し合いを通して、初めはある特定の狭い見方からしか、この問題をみていなかったけれども、話し合いを通して、多様な見方を得ることができましたね。”と意味づけを行えば、児童はこの時間での活動の意味や話し合う重要性を感じるとともに、ものの見方・考え方を広げ、その必要性も実感できるであろう。

もう一方、「評言」とは文字通り「評価する言葉かけ」のことを指し、一般的には「批評の言葉」と解釈されている。しかし批評には、ほめたり認めたりする正の評価もあれば、注意したり諭したりする負の評価も存在する。本校では、前者の「正の批評」を「評言」としてとらえ定義することにした。そして批判的思考の育成に関しては、「負の批評」というより、児童の認知的不協和をおこすような「なげかけ」や「ゆさぶり」を通して育んでいきたい。あくまでも、本校で扱う「評言」は、人間性の尊厳や多様性の尊重という立場から、児童相互の考えを尊重する意識を育めるよう、意味づけにつながる肯定的評価に重点を置く。

例えば、先のごみのリサイクル施設の建設の場面で言えば、教師の意味づけの後、児童が教師からの意味内容を踏まえ発言したとしよう。その時、教師から“〇〇さんも話し合いを通して、自分の見方・考え方を広げながら自分の意見をいうことができたね。”と評言すれば、発言した児童だけでなく、他の聞いている児童にも、先の意味づけを強化させることができる。

このように、「意味づけ」と「評言」は、互いに補完し合うことで、グローバル人材育成における児童の資質を高める上で有効な手立てとなる。また、児童に「意味づけ」・「評言」をする教師の関わりが、児童のコミュニケーションモデルとなり、潜在的に児童を育むことも充分可能と言える。

そこで、この「意味づけ」「評言」について具体的にとらえて、実践できるようにするために、外部講師を招聘して研修会を行った。その講師は本校OBでもあるので、本校の実情を踏まえた上で、その実態に沿った講話を聴くことができた。

3. おわりに

本年度は、グローバル人材育成の観点から児童の共生関係を育む手立てとして、①既存カリキュラムのねらいの再検討と改善、②共生社会を担う資質・能力を育むため

の授業開発・実践，③学校教育活動における教師の「意味づけ」や「評言」という手立ての実践の3点を重点として研究を行ってきた。実際どの程度有効なのか，本年度これまでのいじめアンケート調査に加え，新たにQ-Uテストを実施した。しかし，9月以降の本格的なカリキュラムの取り組みである点，授業開発に関してはまだ試行段階であるため，有効なデータは得られていない。今後，調査を積み重ねることで，有効性を実証していきたい。

V. グローバルマインドを培う総合的な学習の時間の取り組み

広島大学附属東雲中学校

I. グローバル時代に求められる資質・能力

グローバル化に関しては、中央教育審議会答申（2005）の「新しい時代の義務教育を創造する」において、次のように述べられている。

「我が国が、変動の激しいこれからの時代において、今後とも国際的な競争力を持つ活力ある国家として、また世界に貢献する品格ある文化国家として発展するためには、国民一人一人が、そのような国家・社会の形成者として、それぞれの分野で存分に活躍することのできる基盤を義務教育を通じて培う必要がある」

このことは、社会情勢の変化に応じて、国際社会で活躍できる人間を育成する必要性を謳ったものである。

このようにグローバル時代を生き抜く人間の育成が社会的に要請されている中で経済産業省（2010）は、以下のグローバル人材に必要な資質・能力を挙げている。

- ① 社会人基礎力（アクション・シンキング・チームワーク）
- ② 外国語でのコミュニケーション
- ③ 異文化理解・活用力

（産学人材育成パートナーシップ～グローバル人材育成委員会報告書より）

また、グローバル人材育成推進会議（2012）では、グローバル人材の定義について以下の項目を挙げている。

- 要素Ⅰ：語学力・コミュニケーション力
- 要素Ⅱ：主体性・積極性，チャレンジ精神，協調性・柔軟性，責任感・使命感
- 要素Ⅲ：異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティー

（グローバル人材育成戦略～グローバル人材育成推進会議・審議まとめより）

以上のような経済産業省とグローバル人材育成推進会議の定義をみると、グローバル時代を生き抜く人間に必要な資質・能力はほぼ共通しており、国をあげてこのような資質・能力を培う方向性であることがわかる。

II. グローバルマインドを培う総合的な学習の時間における実践

これまでに本校では総合的な学習の時間を活用して、上述したグローバル人材の要素Ⅰ、Ⅱ、Ⅲを網羅した「グローバルマインドを培うためのカリキュラム」について協議を重ね、今年度実践した。

1 国際交流活動について

本校では、平成13年よりアメリカ合衆国ノースカロライナ州の Exploris Middle School、平成19年よりカリフォルニア州の Odyssey School、平成22年よりインドネシアの MENDOYO 第4中学校と国際交流活動を行ってきている。



毎年、これら3校から生徒数名が本校を訪れ、授業交流や文化交流、ホームステイなどを行っている。また、

Exploris Middle School が来校する際には Shinonome 国際ミーティング、MENDOYO 第4中学校が来校する際にはフラワーフェスティバルでのパレードを行い、特色ある国際交流を展開してきた。さらに、毎年8月には本校からも6～8名の生徒が Exploris Middle School や Odyssey School を訪問し、日米文化の共通点や相違点を学んできている。次の表1は、国際交流活動に関する主な年間スケジュールである。

表1 国際交流活動に関する主な年間スケジュール

時 期	内 容	備 考
5月 第1週	<u>MENDOYO SMP4 来校 (2日間)</u> ・文化交流活動 ・フラワーフェスティバルパレード合同参加	生徒4名 教師5名 来校
5月 第3週	<u>Odyssey School 来校 (3日間)</u> ・通常授業への参加 ・意見交流会 ・ホームステイ体験	生徒8名 教師2名 来校
8月 第3週 ～ 第4週	<u>Odyssey School 訪問 (3日間)</u> ・通常授業への参加 ・ホームステイ体験 ・フィールドワーク*1参加 <u>Exploris Middle School 訪問 (1週間)</u> ・通常授業への参加 ・文化紹介活動 ・ホームステイ体験	生徒8名 教師2名 訪問
3月 第3週	<u>Exploris Middle School 来校 (1週間)</u> ・通常授業への参加 ・文化紹介活動 ・Exploris の教師による授業 ・ホームステイ体験 ・Shinonome 国際ミーティング*2開催	生徒8名 教師2名 来校

*¹ 「フィールドワーク」は、Odyssey School が取り入れている教育プログラムの一つである。生徒がグループごとに様々なミッションを協働で達成していく内容である。これまでにサンフランシスコの町中でのミッションを行っている。

*² 「Shinonome 国際ミーティング」は広島県内の公立中学校も招待し、各校生徒会のメンバーがそれぞれの学校活動の取り組みを紹介する。お互いの紹介を通して自校の良さや他校の良さを感じることができる。

ここで特筆すべきことは、本校の国際交流活動は、学校間の交流やホームステイなどを通じた異文化理解にとどまらず、Shinonome 国際ミーティングのように国境を越えて、それぞれの立場や状況を踏まえながら、グローバルな問題を考えていく教育活動を取り入れていることである。ここでは、質の高い異文化理解だけでなく、国際社会における日本のスタンス、ひいては、日本人としてのアイデンティティーをも必要とする。

2 SMARTについて ～修学旅行を利用した取り組み

本校では、平成 25 年度より「東雲中学校 (Shinonome) の生徒は、自らの使命 (Mission) を自覚し、問題発見したことを現地で探究 (Research) し、その過程において見通しをもった行動 (Action) をとる修学旅行 (Tour) —SMART—」を行ってきている。これは、問題を発見し、その解決に向けて見通しをもち、仲間と協力してミッションを遂行していく力の育成を図った教育プログラムである。また、この SMART は、旅行の行程を予算や安全性に考慮しながら自分たちでデザインする。したがって、必然的にプロジェクトマネジメント能力も求められる。



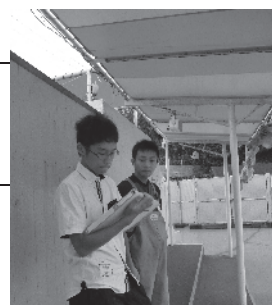
また、この SMART は、旅行の行程を予算や安全性に考慮しながら自分たちでデザインする。したがって、必然的にプロジェクトマネジメント能力も求められる。

例えば、野球部に所属する Hくんが、部活動の際に手にするロジンバックの肌触りや臭いに関心を示したことから、人の体にやさしいロジンバックの開発をテーマとした。そして、紀州備長炭に着目し、仲間と協働して現地での取材をもとに新たなロジンバックの開発プランを作成するような一連の研究活動を行う。

ところで、先進的な教育を展開しているシンガポールの Temasek Junior College では、英語力や学力の育成だけでなく、リーダーシップ育成のための教育プログラムを実践している。本校においても国際交流活動に加え、グローバル社会のリーダー育成という視点をも重視する。したがって、プロジェクトマネジメント能力の育成が期待できる SMART は、グローバルマインドを培ううえで重要な位置づけとなる。次の表 2 は、SMART に関する教育プログラムである。

表2 SMARTに関する教育プログラム

時 期	内 容
第1学年 前 半	自分の興味・適性について Pre Task Trip (広島市近郊)
第1学年 後 半	Pre Research Tour に向けた 研究テーマ・内容・方法の作成及び行程の計画
第2学年 前 半	Pre Research Tour (呉市近郊, 昨年度は尾道市) 研究のまとめ・提案及び交流
第2学年 後 半	SMARTに向けた 研究テーマ・内容・方法の作成及び予備調査
第3学年 前 半	SMARTに向けた 研究の再考・行程の計画
SMART (7月)	Task Trip 京都近郊で行うミッションが朝発表され、それに向けて京都に向かいながら行程を計画し、ミッションを協働して遂行する
	Research Tour 紀伊半島を中心として各人の研究テーマを遂行できるように、協働して現地調査を行い、探究活動を展開する
第3学年 後 半	研究のまとめ・提案 研究の報告・交流



なお、個々人の研究に見通しをもたせ、研究の質をあげさせることを目的として、本校教員は、例えば、鈴木敏恵氏のプロジェクト学習など、年に数回の研修会を開催して、生徒への支援を充実させるように研鑽してきている。

Ⅲ. グローバルマインドを培う総合的な学習の時間における実践の検証

1 国際交流活動について

アンケート調査の結果（浜岡ほか，2011）から本校で実施する国際交流活動は，グローバルマインドを培う一助になっていると判断できる。

平成 26 年 3 月に実施した Exploris Middle School 来校後に，本校生徒に実施したアンケート調査の結果によると，「英語を話せるようになることは自分にとって必要である」と回答した生徒が約 8 割，「言葉に関係なく誰とでもコミュニケーションをとれるようになることは自分にとって必要である」と回答した生徒は約 9 割いた。これらのことから，本校の生徒は要素Ⅰである語学力・コミュニケーション力の必要性を強く感じながら学校生活を送り，多くの国際交流の活動を行っている様子うかがえる。平成 26 年 8 月に Odyssey School と Exploris Middle School へ訪問した生徒へのインタビュー調査によると，「言葉に関係なく誰とでもコミュニケーションをとれるようになること」の重要性について，8 名全員が「とても重要である」と回答した。このことから，実体験によりコミュニケーションの重要性を痛感している様子うかがえる。



また，平成 26 年 3 月に本校生徒に実施したアンケート調査の結果によると，「相手の国の文化や考え方をよく知ることは自分にとって必要である」，「日本の文化や考え方をよく知ることは自分にとって必要である」と回答した生徒は，ともに約 7 割いた。これらのことから，本校の生徒は国際交流活動を通して要素Ⅲである異文化に対する理解の必要性を感じている様子うかがえる。平成 26 年 8 月に Odyssey School と Exploris Middle School へ訪問した生徒は，渡米の感想として次のように記している。

〔Aさんの感想〕

私はこの渡米中に，アメリカの生徒は自分の意見を貫こうとする意志があることを自身の目で見てきました。日本の生徒は他の人と異なる意見や考えをもつことに消極的で，自分が正しいと思っていることもひかえて大多数の意見に流されてしまう傾向があると思います。しかし，今回お互いを認め合うという形は国や地域によって異なることがわかったので，日本の場合は信頼関係が存在すれば日本人として積極的に意見を出してもわかり合えるということを実感しました。

〔Bさんの感想〕

私はホームステイを経験することで，アメリカの文化や習慣にふれることができました。まず，家で靴を脱がないことにも驚いたのですが，くしゃみをしたときに「Bless you」と言われました。これは「神のご加護を」と投げかけることによって相手と良好な関係を築こうという思いがあることを知りました。私が思ったことは，日本の習慣に慣れてはいるけれど，それが決して1番良いとは限らず，アメリカの文化や習慣にふれて初めてその良さもわかると思いました。

AさんとBくんの感想から、渡米の経験が異文化に対する理解に加え、日本人としてのアイデンティティーを強く意識する機会になったと解釈できる。実際にAさんは、平成26年10月に本校で実施した「渡米報告会」において、全校生徒に日本人としてのアイデンティティーをもつことの重要性を主張する報告を行った。

2 SMARTについて ～修学旅行を利用した取り組み

今年度の全国学力・学習状況調査の生徒質問紙において、「総合的な学習の時間の授業で学習したことは、普段の生活や社会に出たときに役に立つと思いますか」という質問に対する結果は、次の表3のようになっている。

表3 「総合的な学習の時間の内容は社会で役立つか」(全国学力・学習状況調査)

	1 (当てはまる)	2 (どちらかといえば、 当てはまる)	3 (どちらかといえば、 当てはまらない)	4 (当てはまらない)
本 校	34.6 (30.4)	44.9 (45.6)	14.1 (15.2)	6.4 (8.9)
全 国	23.1 (22.6)	48.1 (45.1)	20.7 (22.6)	7.9 (9.3)

※ 表の数値は百分率 (%) であり、() 内の数値は昨年度の結果である。

また、「総合的な学習の時間では、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいますか」という質問に対する結果は、次の表4のようになっている。

表4 「総合的な学習の時間ではPDCAサイクルで活動しているか」(全国学力・学習状況調査)

	1 (当てはまる)	2 (どちらかといえば、 当てはまる)	3 (どちらかといえば、 当てはまらない)	4 (当てはまらない)
本 校	47.4 (38.0)	38.5 (38.0)	11.5 (16.5)	2.6 (7.6)
全 国	16.2 (15.3)	38.5 (35.6)	31.4 (32.7)	13.7 (16.0)

※ 表の数値は百分率 (%) であり、() 内の数値は昨年度の結果である。

以上の生徒質問紙の調査結果から、平成25年度から本校で実施しているSMARTの活動は、2年目となる今年度さらに充実度を増しながら、普段の生活や社会に出たときに役に立つという視点において、グローバルマインドを培う一助になっていると判断できる。



さらに、今年度のSMARTの活動後に、本校第3学年の生徒に実施したアンケート調査の結果によると、「自分の判断で行動する力に関する自信」に対して61%の生徒が肯定的な回答をした。また、「さまざまな考えを受け入れる柔軟性に関する自信」に対して62%の生徒が肯定的な回答をした。これらのことから、本校の生徒はSMARTの活動を通して、要素Ⅱであるチャレンジ精神や柔軟性にかかわる自信を高めていった様子が見えてくる。

IV. おわりに

グローバルマインドを培うために本校では、グローバル人材の要素Ⅰ、Ⅱ、Ⅲのすべてを網羅したカリキュラムを実践した。このカリキュラムは、要素Ⅰ：語学力・コミュニケーション能力や要素Ⅲ：異文化に対する理解の伸長を目指す「国際交流活動」と要素Ⅱ：チャレンジ精神や柔軟性の伸長を目指す「SMART」の2つの方向による実践である。

第一に、本校の国際交流活動は、生徒へのアンケート調査やインタビュー調査から、渡米した生徒の語学力に加えて、全校生徒におけるコミュニケーションへの意識において有用な実践であることを示した。第二に、本校におけるSMARTの活動は、全国学力・学習状況調査から全国平均の150%の割合（表3における「当てはまる」の回答比は1.49である）で、社会に出たときに有用な実践であることがわかった。また、生徒へのアンケート調査から、自分で判断して行動することや様々な考えを受け入れながら行動することに関する意識において有用な実践であることもわかった。



今後は、今年度有効性を示した総合的な学習の時間を活用した「グローバルマインドを培うカリキュラム」の枠組みをもとに、さらなる内容の充実をめざした実践を展開していきたい。具体的には、例えば、プロジェクト学習システムやICTの有効活用というような視点の導入を構想している。また、各教科等で日々行う授業と連携する視点から、すべての教育活動において子どもたちのグローバルマインドの伸長に寄与できるような実践を構想していきたい。これからも地域、日本、世界で積極的に挑戦し活躍できる人間を培うために本校の実践は継続され、発展していく。

文献

- グローバル人材育成推進会議：グローバル人材育成戦略（グローバル人材育成推進会議 審議まとめ），2012.
- 浜岡恵子ほか：中学校における国際交流の在り方－Exploris Middle School・Odyssey School・MENDOYO SMP4 との交流を通して－，
広島大学学部附属共同研究紀要第40号，59-64，2011.
- 広島大学附属東雲中学校：社会のグローバル化に対応した初等中等カリキュラムの開発Ⅱ－大学と連携した研究開発システムの構築に向けて－，平成25年度広島大学附属学校園研究推進委員会報告書，33-38，2014.
- 文部科学省：中学校学習指導要領，2008.
- 産学人材育成パートナーシップ～グローバル人材育成委員会：報告書～産学官でグローバル人材の育成を～，2010.
- 中央教育審議会答申：新しい時代の義務教育を創造する，2005.

VI. 社会のグローバル化に対応する資質・能力及び 態度・価値観を育成するための幼小中一貫のカリキュラム開発

広島大学附属三原幼稚園・小学校・中学校

1 はじめに

本学校園の新領域「希望（のぞみ）」への取り組みは3年目を迎え、研究開発指定校としては最終年度となる。私たちは、益々少子高齢化・グローバル化していくであろう10年後、30年後、50年後を生きる子どもたちに「今育むべき資質・能力及び態度・価値観とは何か」を昨年度末に再考、焦点化して目標構造図（図1）、研究構想図（図2）を改善し、今年度の取り組みをスタートした。また、小中学校においては教科等との関連を明らかにし、横断的な学習を取り入れた単元開発にも着手していった。

本構想においては、「グローバルリーダーとなりうる人材の育成」を重点課題と位置づけ、グローバル化に対応した能力・態度・価値観を育むための幼小中一貫のカリキュラムを開発・実践していくことを目的として研究を行うこととする。

2 研究開発におけるグローバル化の取組み

研究開発課題

「社会的自立の基礎となる能力・態度及び価値観の体系的な育成のための、幼小中一貫の新領域による自己開発型教育の研究開発」

(1) 新領域「希望（のぞみ）」におけるグローバル化に対応する取組み

新領域「希望（のぞみ）」の学習領域『つながり』からにおいて、異文化理解や他国の方々とのコミュニケーションを通して「なりたい自分」を考えていけるような幼小中12年間の系統性のある「希望（のぞみ）視点の保育」及び「希望（のぞみ）」の活動・単元を開発・実践し、社会のグローバル化に対応するための資質・能力および態度・価値観の育成を目指す。

(2) 教科等における取組み

学校園教科部会共通研究テーマを「学ぶ意義を感じながら課題に粘り強く取り組む子どもの育成」とし、新領域「希望（のぞみ）」との関連を図りながら、子どもたちの関心・意欲を高めるよう取り組む。その一環として、相手意識や目標を明確にしたグローバルな活動を取り入れた単元（題材）の開発を進める。また、「希望（のぞみ）」と教科との内容的な関連を図り、横断的な学習を取り入れた単元開発に着手した。その際、英語・外国語活動・社会等との関連によりグローバルな視点での学習が深まるよう教科担当が相互に連携して進める。

(3) 「グローバル人材育成」の要素と新領域「希望（のぞみ）」及び保育・教科との関連

グローバル人材育成推進会議（2012年）において「グローバル人材育成」の概念における要素Ⅰ～Ⅲが提言されている。それに各附属・学校園における取組みをその他の要素としてまとめた対応表（岩田2012による）に対し、「希望（のぞみ）」で育成する基礎的・汎用的能力、態度・価値観及びその他の保育教科等で育成する資質・能力との関連性をまとめたものが表1である。

表1 「グローバル人材育成」の要素と新領域「希望（のぞみ）」及び教科等との関連

「グローバル人材育成」の概念における要素		「つながり」から	「自分づくり」から	「もの・こと」から	教科等
		人間関係形成・社会形成能力	自己理解・自己管理能力	課題対応能力 キャリアプランニング能力	
		共生	自律	参画	
Ⅰ	語学 コミュニケーション	◎			外国語活動 英語科
Ⅱ	主体性・積極性 チャレンジ精神 協調性・柔軟性 責任感・使命感		◎	◎	
Ⅲ	異文化理解 アイデンティティ	◎			美術科
その他	問題解決能力 批判的思考 ICT活用能力			◎ ○	社会科

「希望（のぞみ）」の学習領域「つながり」からでは、主に「国際」を柱とした単元を中心に、要素Ⅰの「コミュニケーション」、要素Ⅲの「異文化理解」に係る能力、態度・価値観を育成する。

また、学習領域「自分づくり」からでは、要素Ⅱの「主体性・積極性」、学習領域「もの・こと」からでは、地域参画等の学習により、要素Ⅱの「チャレンジ精神」、その他の「問題解決能力」「ICT活用能力」を育成するものである。

「希望（のぞみ）」の目標構造<H26年度版>

H260404

【「希望（のぞみ）」の目標・内容と育成される能力・形成される価値観】

「希望（のぞみ）」の目標 学習領域ごとの目標 〔中学校修了時〕	「つながり」から	「自分づくり」から	「もの・こと」から
自己についての理解を図り、自己の生き方・在り方についての具体的な目標や課題を明らかにする中で〔自己設計・自己選択〕、社会的自立に資する基礎的・汎用的能力の育成、社会の形成者として必要な態度及び価値観を養う〔態度・価値観の形成〕。			
学校内外の他者とふれあい、つながる体験的な活動を通して、めざす自己と社会の実現のために、相手の立場や気持ちを尊重しながら考えや思いを伝え合い、よりよい関係を築こうとする。	「つながり」から (1) 同学年とのつながり (2) 異学年とのつながり (3) 地域とのつながり (4) 国際とのつながり	「自分づくり」から 「自分と向き合う活動」を中心とした体験的な活動を通して、将来、人の役に立てる自分になるために、今の、すべきことを判断して行動しようとする。	「もの・こと」から 身近な集団や社会を巻き込んだ体験的な活動を通して、よりよい集団や社会を築くために、見通しをもって計画立案をくり返しながら取り組もうとする。
他者とのつながり	人間関係形成・社会形成能力 他者に働きかける力 他者を理解する力	自己設定・自己選択 自己理解・自己管理能力	創造 (1) 自然・素材 (2) 伝統文化 (3) 身体表現 (4) 企画・運営
育成される能力	<具体的姿>〔中学校修了時〕 他者と共に生きることの大切さを知り、自分の意見を分かりやすく伝えたり、相手の意見を丁寧に聞いて取りよるようになる。 他者を尊重することの大切さを知り、自分のことだけでなく、相手の立場や気持ちも理解したり、考えや文化の違いを認めたりするようになる。	<具体的姿>〔中学校修了時〕 将来、人の役に立てる自分になるために、自分の置かれた状況の中で、今の自分の力をどのように生かせばよいかを考え行動できるようになる。	勤勞 課題対応能力 キャリアアプラーニング能力
形成される価値観	共生 共存共生の尊重 他者の尊重	自律 希望・自立の重視	参画 自己の向上の重視 変革・革新の重視 勤勞の重視

【「希望（のぞみ）」・「希望（のぞみ）」の各学年（段階）の目標及びねらい】

各学年（段階）の目標及びねらい	「つながり」から	「自分づくり」から	「もの・こと」から
年少	身近な他者とふれあい、つながる体験的な活動を通して、自分の思いを伝えようとする。		身近なものや出来事とかかわる中で、驚いたり、不思議に思ったりしたこと を繰り返してやってみようとする。
年中	学校内外の他者とふれあい、つながる体験的な活動を通して、自分の思いや気持ちを伝えたり相手の思いを聞いたりしようとする。		身近なものや出来事とかかわる中で、思いの裏面に向けて自分なりに考えた 試みたりしようとする。
年長	学校内外の他者とふれあい、つながる体験的な活動を通して、自分の思いや気持ちを伝え合い、受け入れようとする。		身近なものや出来事とかかわる中で、思いの裏面に向けて自分たちなりに考 えたり試みたりすることを繰り返しようとする。
第1学年及び第2学年	学校内外の他者とふれあい、つながる体験的な活動を通して、自分たちのことを考えて行動して行く人たちの大切さを感じとり、進んで受け入れようとする。		身近な集団や社会を巻き込んだ体験的な活動を通して、課題を見つけたら活動す ることの大切さに気づき、様々な解決方法を考え出そうとする。
第3学年及び第4学年	学校内外の他者とふれあい、つながる体験的な活動を通して、相手の立場や気持ちを尊重することの大切さに気づき、共に活動しようとする。		身近な集団や社会を巻き込んだ体験的な活動を通して、計画的に活動することの大切 切さに気づき、見通しのある解決方法を考え出そうとする。
第5学年及び第6学年	学校内外の他者とふれあい、つながる体験的な活動を通して、相手の立場や気持ちを尊重することの大切さに気づき、進んで考えや思いを伝え合おうとする。		身近な集団や社会を巻き込んだ体験的な活動を通して、よりよい集団を築く ために、計画立案を繰り返しながら取り組もうとする。
第7学年及び第8学年	学校内外の他者とふれあい、つながる体験的な活動を通して、めざす自己の実現のために、相手の立場や気持ちを尊重しながら考えや思いを伝え合い、よりよい関係を築こうとする。		身近な集団や社会を巻き込んだ体験的な活動を通して、よりよい集団を築く ために、計画立案を繰り返しながら取り組もうとする。 仲間や社会との関わりについて知り、社会貢献に対する意欲に気づき、具体的 な目標を持って取り組もうとする。

図 1 「希望（のぞみ）」目標構造図

※第9学年は、「学習領域ごとの目標〔中学校修了時〕」欄に記載

3 平成 26 年度の取組みの重点

(1) 「希望 (のぞみ)」「希望 (のぞみ) 視点の保育」における「国際」を柱とした活動・単元の開発・改善

「希望 (のぞみ)」「希望 (のぞみ) 視点の保育」においては、学習領域「つながり」からの中で、「国際コミュニケーション科」の研究を引き継ぎ、異文化への理解や実践的なコミュニケーション能力の育成をめざし、「国際」を柱とした実践を行ってきた。この間開発した活動や単元では、本学校のめざす子ども像に向かっていくため、グローバル人材の育成に通ずる基礎的・汎用的能力である「人間関係形成・社会形成能力」と合わせて態度・価値観「共生」の育成に重点的に取り組んできた。

そこで、ここでは「つながり部会」での取り組みについて明記する。12 年間の具体的な活動・単元の内容・目標・つけたい力、態度・価値観については表 1 のとおりである。本年度は、ねらいに沿った適切な活動・単元となるよう開発及び指導計画の改善を行う。

(2) 各教科等における単元 (題材) の開発

「学ぶ意義を感じながら課題に粘り強く取り組む子どもの育成」にむけ、新領域「希望 (のぞみ)」との関連を図りながら、子どもたちの関心・意欲を高めるよう、相手意識や目標を明確にしたグローバルな活動を取り入れた単元 (題材) の開発を進める。その際、グローバル化に対応する力として「①日本文化の理解、②様々な文化の理解、③読み取ることを中心としたコミュニケーション力、④伝えることを中心としたコミュニケーション力」のうち、何をねらうのかを明確にして単元 (題材) を開発する。

(3) 実施の効果に係る評価・検証

①「希望 (のぞみ)」「希望 (のぞみ) 視点の保育」における評価・検証

幼稚園は、5 月と 7 月に「能力尺度及び価値観評価表」と保護者アンケート、教師によるエピソードの蓄積とそのカンファレンスから考察を行い、評価・検証する。

小中学校は、5 月と 7 月に「希望 (のぞみ)」アンケートを実施する。また各単元の事前事後アンケート、教師による観察、児童生徒の感想等により検証する。

②教科等における評価・検証

教科等においては、開発した単元 (題材) の指導案を作成し蓄積していく。また、その結果、「①日本文化の理解・②様々な文化の理解・③読み取ることを中心としたコミュニケーション力・④伝えることを中心としたコミュニケーション力」についてグローバル化に対応する力の育成につながったかを明らかにする。

なお中学校英語科においては、評価の観点「外国語表現の能力」及び「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」の 3 段階評価の状況、ALT との面接におけるパフォーマンス評価結果等により検証する。

表2 「希望(のぞみ)」の「学習領域『つながり』から」における「国際」を柱とした活動・単元

	年少	年中	年長	1年	2年	3年	4年	5年	6年	7年	8年	9年
単元・活動	留学生さんとふれあおう～思いを出す～	留学生さんとふれあおう～思いを出す～聞く～	留学生さんとふれあおう～思いを出す～聞く～	交流会をみんなで行おう～留学生の方とふれあおう～	留学生さんとの交流	留学生さんとの交流	絆プロジェクト	絆プロジェクト～留学生さんとの交流～	自分たちで作る行事～外国の方にインタビューしよう～	平和公園へ行こう	ヒロシマからオキナワへ～そして世界へ～	ピースプロジェクト
内容	<ul style="list-style-type: none"> 留学生と一緒に遊んだりお弁当を食べたりして一緒に過ごす。 海外の遊びの様子を教えてもらい取り入れて遊ぶ。 外国の歌や踊りを教えてもらう。 			簡単な挨拶や自己紹介、歌を歌ったり踊りを披露したりして、外国の方々と交流を行う。	外国の方々に日本の遊びを紹介したり外国の遊びを紹介してもらったりして異文化理解を深める。	留学生との交流活動(内容検討中)	外国の方々と交流活動(内容検討中)	自己紹介や相互へのQ&A活動を中心とした留学生との交流活動を行う。	修学旅行地で出会った方々にインタビューをする。	平和公園を訪問し見学や講演を通して平和について考える。	ヒロシマ・オキナワの歴史や様々な立場の人々の考えを学び平和について考える	広島平和記念公園内の施設をガイドし、平和に対する意見交換をする。
目標	<ul style="list-style-type: none"> いろいろな人や文化に出会うことを楽しむ。 自分と他者の違いやよさに気づく。 いろいろな人に自分の思いをいろいろな方法で伝えようとする。 	<ul style="list-style-type: none"> いろいろな人や文化に出会うことを楽しむ。 自分と他者の違いやよさに気づく。 いろいろな人に自分の思いをいろいろな方法で伝えようとする。 自分の思いや考えをいろいろな人にわかりやすく伝える。 	<ul style="list-style-type: none"> いろいろな人や文化に出会うことを楽しむ。 自分と他者の違いやよさに気づく。 いろいろな人に自分の思いをいろいろな方法で伝えようとする。 自分の思いや考えをいろいろな人にわかりやすく伝える。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分たちと異なる文化をもつ人々の存在を理解し、素直に受け入れともに活動できるようにする。 自分の思いを表現したり、伝えようとしたりすることができるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分たちと異なる文化をもつ人々に興味・関心をもち、尊重しながらともに活動できるようにする。 自分の思いを表現したり、伝え方を工夫したりすることができるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分と異なる物の見方や考え方を理解したり、尊重したりできるようにする。 異なる見方や考え方を、多文化共生に対する自分の考えを持つことができるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> 多様な価値観を理解したり、尊重したりする中で、自らの見方や考え方をより豊かなものにしていく。 多文化共生社会の中で、自分たちができることを実践していくことができるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> 多様な価値観を理解した上でさまざまな人々と積極的に意見交換をする。 世界の中の日本人として、平和に対する異なった考えや共通する考えを見出そうとする。 	<ul style="list-style-type: none"> 平和な社会を築くために私たちにできることを考えるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> 異なる文化の人たちと平和を語り合う活動を通して、世界の中の自分や日本を意識し、世界平和に貢献しようとする。 		
付きたい力・態度・価値観	基礎的・汎用的能力 他者に働きかける力	新しい環境や身近な人たちにかかわろうとする。身近な人たちとかわる中で、自分の思いを伝えようとする。	様々な人たちとかわる中で、自分の思いや気づきをいろいろな方法で伝えたり、相手の思いや気づきを聞いたりしようとする。	新しい環境や身近な人たちにかかわろうとする。自分の思いをいろいろな方法で伝えたり、相手の意見を聞いたりする	自分の意見を自分に合った方法で伝えたり、他者の意見を聞いたりする。	自分の意見を相手に応じた方法で伝えたり、他者の意見を聞いたりする。	新しい環境や人間関係に適応しようとする。相手の必要としていることに応じて、自分の意見を分かりやすく伝えたり、相手の意見を丁寧に聞いたりする。	様々な立場の人に対して、場に応じた表情や態度で自分の意見を分かりやすく伝えたり、相手の意見を丁寧に聞いたりする。	自分の意見を分かりやすく伝えたり、相手の意見を丁寧に聞いたりする。	相手の個性を認め、受け入れながら、相手の考えや思いを理解しようとする。	相手のことを分りやすく伝えたり、相手の意見を丁寧に聞いたりする。	相手のことを分りやすく伝えたり、相手の意見を丁寧に聞いたりする。
	態度・価値観 共生	いろいろな人たちとかわらうとする。自分の思いを伝えようとする。いろいろな人の思いを聞いたり、その人の気もちを考えたりしようとする。	相手の伝えたいことや気持ちを考えようとする。	相手の立場を自分のことのように想像しながら、相手のことを考え理解しようとする。	相手の立場に立って、相手の考えや思いを理解しようとする。	相手の立場に立って、相手の考えや思いを理解しようとする。	相手のよさを見つけないながら、相手の考えや思いを理解しようとする。	自己実現のために、多様な価値観や多角的な物の見方をしながら他者とかかわり、相手の良さを見つけ個性を認めようとする。	自己実現と目指せる社会を実現するために、自分のことだけでなく、相手の立場や気もちを理解し尊重しようとする。			

4 実践報告

(1) 「希望（のぞみ）」「希望（のぞみ）視点の保育」における「国際」を柱とした活動・単元の開発・改善と実施の効果

① 幼稚園

幼稚園においては、「希望（のぞみ）視点の保育」の中で留学生との交流を9月より継続して行ってきた。昨年度の課題を改善し、幼児期の子どもたちの特性を生かした取り組みになるようにした。以下、今年度の留学生との交流による年間活動計画（表2）と交流の方向性を示している。

表3 留学生交流年間活動計画

月	留学生人数	ねらい	交流の主な内容
9月4日 木曜日	5名	<ul style="list-style-type: none"> ・留学生の方に親しみを持ち、一緒に遊ぶことを楽しむ。 ・外国の遊びや様子を教えてもらい自国と他国の文化に興味関心をもつ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・留学生と一緒に遊んだり、お弁当を食べたりして一緒に過ごす。 ・海外の遊びの様子を教えてもらい、取り入れて遊ぶ。 ・外国の歌や踊りを教えてもらう。
10月7日 火曜日	5名	<ul style="list-style-type: none"> ・留学生の方に親しみを持ち、一緒に遊ぶことを楽しむ。 ・外国の遊びや様子を教えてもらい自国と他国の文化に興味関心をもつ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・留学生と一緒に遊んだり、お弁当を食べたりして一緒に過ごす。 ・海外の遊びの様子を教えてもらい、取り入れて遊ぶ。 ・外国の歌や踊りを教えてもらう。
12月2日 火曜日	5名	<ul style="list-style-type: none"> ・留学生の方に親しみを持ち、一緒に遊ぶことを楽しむ。 ・外国の遊びや様子を教えてもらい自国と他国の文化に興味関心をもつ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・留学生と一緒に遊んだり、お弁当を食べたりして一緒に過ごす。 ・海外の遊びの様子を教えてもらい、取り入れて遊ぶ。 ・外国の歌や踊りを教えてもらう。
1月15日 木曜日	お正月遊び 《年少・年中》 3名	<ul style="list-style-type: none"> ・留学生と一緒に自国や他国の正月遊びを楽しむ。 ・日本と他国の正月の様子や雰囲気を知り、自国と他国の文化に興味をもつ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもたちと日本の正月遊びを楽しむ。 ・留学生から母国の正月遊びを教えたり一緒に日本の正月遊びをしたりする。また、留学生から母国の正月の様子や雰囲気を聞く。
2月20日 金曜日	卒園茶会 《年長》 2名	<ul style="list-style-type: none"> ・留学生と共に卒園茶会に参加し、伝統ある和文化に興味をもつ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・卒園茶会に留学生と共に参加し、茶室の落ち着いた雰囲気や日本の伝統文化、もてなしの心にふれたり、お茶会での心得を知ったりする。また、茶道同好会の先生にお茶や茶室について質問する。

○ 今年度の留学生との交流の計画について[方向性]

- ・1年間を通して各クラス同じ方に来ていただき、親しみをもつとともに、よりかかわりを深めて

いく。

- ・ 普段の生活の日に来ていただき、子どもたちの遊びの中に自然な形で入り過ぎていただくことで、双方向のかかわりが生まれるようにする。
- ・ クラスに応じて、歌や踊りや遊びを教えてください、テーマのある遊びが盛り上がっている場合には異文化の要素を教えてください、遊びの中に新たな視点を取り入れ、より遊びが盛り上がるようにする。



図2 年長 留学生とのふれあい

○ 実施の効果

幼稚園では、学習領域「つながり」からでねらう力や価値観について、5月と7月に「能力尺度及び価値観評価表」を用いた評価、保護者アンケートを行った。その結果は以下の通りである。

表4 「人間関係形成・社会形成能力」に係る尺度

尺度
『他者に働きかける力』（共存共生の重視）
3：いろいろな人（同学年・年下の異学年など）に対して、相手にわかりやすいように、言い方を考えたり身振りや手振りを交えたりして根気よく伝えようとする。
2：気の合う友だちや教師など親しみをもった人に対して、自分の思いをわかってもらおうと、言葉やしぐさ、表情や身振り手振りなど、自分なりの言い方で伝えようとする。
1：ひとりごとなど、思いを自分なりに表現しているが、他者に伝えようとするしない。
『他者を理解する力』（他者の尊重）
3：いろいろな人の思いに気づき、相手に共感したり自分なりの思いをもったりする。相手の思いや気づきを受け入れ、自分の思いとの折り合いをつけようとする。
2：相手の思いや気づきに対して、耳を傾けるが折り合いをつけようとせず、自分の思いを押し通そうとする。
1：相手の思いや気づきがあることに気づかず、自分の思いだけを押し通そうとする。

表5 「人間関係形成・社会形成能力」の変容

因子	学年	評価	7月	7-5月
他者に働きかける力	年少	3	7%	7%
		2	93%	11%
		1	0%	-18%
	年中	3	10%	5%
		2	90%	2%
		1	0%	-7%
	年長	3	44%	23%
		2	54%	0%
		1	2%	0%
他者を理解する力	年少	3	18%	14%
		2	79%	46%
		1	4%	-61%
	年中	3	15%	-5%
		2	76%	15%
		1	10%	-10%
	年長	3	59%	13%
		2	42%	-8%
		1	0%	-4%

3段階（3＝能力が育まれている、2＝能力が育まれつつある、1＝能力が育まれていない）

年少では、「他者を理解する力」について評価1が61%減少し、年中では、「他者を理解する力」については、評価3が5%減少した。また、年長では、「他者に働きかける力」について評価3が23%増加した。

表6 保護者アンケートの結果

因子	学年	7月	7-5月
他者に働きかける力	年少	42%	13%
	年中	32%	6%
	年長	39%	19%

保護者の調査は家庭における子どもの姿を質問している。保護者の記述の中から、つけたい能力が育まれている姿、育まれつつある姿を抜き出し、それらの記述の合計数をもとに能力ごとの割合を出していった。

表5は、「他者に働きかける力」が育まれている子どもの姿の割合を5月と7月で比較したものである。表5より、「他者に働きかける力」が年少では13%、年中では6%、年長では19%上昇している。

表7 「共生」の変容

因子	学年	評価	7月	7-5月
共存共生の重視	年少	a	96%	18%
		b	4%	-18%
	年中	a	81%	29%
		b	20%	-30%
	年長	a	90%	25%
		b	10%	-25%
他者の尊重	年少	a	70%	43%
		b	32%	43%
	年中	a	37%	20%
		b	63%	-20%
	年長	a	71%	38%
		b	30%	-38%

a: 価値観が育まれている b: 価値観が育まれていない

年少では、「共存共生の重視」について、評価aが18%増加し、年中では、「共存共生の重視」について、評価aが29%増加、年長では「他者の尊重」について、評価aが38%増加した(表6)。

また、幼稚園においては、留学生との交流でのエピソードを9月から蓄積し、考察を行う中で評価を行った。

計4回の交流を通して、各クラスほぼ同じ留学生に来ていただいた。回数を重ねていく中で子どもたちは留学生が来て下さることを心待ちしている様子が窺えた。第1回の交流では、年少児たちが初めて出会う留学生にとまどい、緊張している様子が見られた。また、年長児においては、留学生と同じ空間の中にはいるがかわ

わりを楽しんでいる様子には見受けられなかった。しかし、交流を重ねていくうちに留学生が来園すると自分からかかかっていこうとする年少児の姿や自分たちのお気に入りの遊びに誘う年長児の姿が見られるようになった。留学生の方々は、子どもたちに自然体で接して下さるとともに、子どもたちの思いを受け入れてくださったり気遣ったりしていた。1日を一緒に過ごす中で、子どもたちは留学生のやさしさを感じる体験を積み重ねてきた。これにより、子どもたちの中で留学生に対する親しみの気持ちが湧いていき、子どもたちからかかかっていくという姿につながったと考える。

また、年長組での交流では、次のような姿が見られた。

子どもたちが留学生を「氷鬼」に誘う。ルールを身振り手振りで留学生に伝えるが、伝わらない。その後、子どもたちがジェスチャーをし始める。その様子を留学生は一生懸命見ながらも、首を傾げ「ん？」困っている表情である。それを見た子どもたちが、「じゃあ、見ててね、俺が鬼でA君が逃げる役ね。こうやって追いかけてタッチするじゃろ、そしたら、見て！固まるんよ。氷。かちんこちん」と言ながらやって見せる。留学生は首をかしげながらも、“うん”と頷くと、子どもたちはわかったととったのか「じゃあ、はじめ！」と逃げ始める。初めは留学生も様子を見ながら参加をしていたが、途中、あっと驚いたような顔をし、子どもがやったジェスチャーを真似しながら「あー！」と言って納得をしていた。

これは、日本語を習得していない留学生に子どもたちが、「氷鬼」の遊びに誘い、遊び方を身振り手振りで一生懸命伝える姿である。園での普段の生活の中に入っていたため、留学生は、子どもたちのしたい遊びを受け入れて下さり、一緒に遊んで下さった。また、交流の回数を重

ねるごとに、子どもたちの中に留学生に対する親しみが湧いていき、子どもたちから留学生の方を遊びに誘うようになった。こうした過程を踏んできた結果、留学生と子どもたちの双方向のやりとりが増えていったと考える。

② 小学校・中学校

○ 実践事例（小学校）

昨年度、小学校における「国際」単元は、1・2・5・6学年のみであったが、今年度は、3・4年生でも「留学生さんとの交流」「絆プロジェクト」の単元を計画し、より系統的なカリキュラムとなるよう改善しているところである。

すでに実施した単元の状況は次のとおりである。

5年生「希望（のぞみ）」においては広島大学の10人の留学生さんとの交流会の第1回目を6月に実施した。留学生さんとの交流に向けての活動や交流会を通して、自分にできることを見つけたり、友だちのためにすすんで行動したりする力を伸ばすとともに、自分と異なる国や言語の人々を理解しようとする大切さを感じ、多文化共生社会を生きていこうとすることをねらった単元である。交流会へ向け児童が計画を立て、すべて英語で会話ができるよう取り組んだ。また事後には交流会や交流会に向けた自分たちの行動と留学生の様子をふり返る活動を通して、外国の人と交流する際に大切なことについて意見交流をした（図4）。

○ 実践事例（中学校）

中学校9年生「希望（のぞみ）」では、12年間の集大成の行事であり、今年で10年目を迎えたピースプロジェクトにおいて、生徒は、英語によるコミュニケーションに果敢にチャレンジした。また今年度は、その場での交流だけでは聞き取りきれないという課題の改善をはかるため交流相手の先生方に平和への考えを色紙に綴っていただいた。事後はそれらの色紙の文書から平和についての考えを広げようと和訳に一生懸命取り組む姿が見られた。

○ 実施の効果

小中学校では、学習領域「つながり」からでねらう力や価値観について、5月と7月の児童生徒質問紙等調査を実施した（表7）。その結果、「人間関係形成・社会形成能力」に係る質問紙の肯定的評価の平均は、5月77%、7月79%となり、2%増加した。また、「共生」に係る質問紙の肯定的評価の平均は、5月91%、7月92%となり、1%増加した。

また、「国際」を柱とした単元の事前事後アンケートや具体的な子どもたちの変容について検証したりしながら、実践事例を作成した。

たとえば留学生との交流では、交流後の振り返りにおいて、児童の記述の中には、次のようなものが見られた。

「留学生さんとみんなが楽しめて、時間を有効に使って、留学生さんと少しでも長い時間いられるようにプログラムを作った。」と書いており、「友だちの様子などをみて」どう行動すればよいの



図3 5年 留学生との交流



図4 9年 ピースプロジェクト

かを考えていた。

他にも、「交流を終えて、言葉が通じなかったらどんなに大変なのかを学んで、留学生さんに英語で伝えなくてもジェスチャーなどで伝えたら、留学生さんも分かってくれることを発見しました」 「言葉が伝わらなくても、言葉以外で伝えようとしたら伝わる」という記述があり、様々な人とコミュニケーションをとる場合には、言葉だけが手段となるのではなく、身振りや手振り等のジェスチャーでも分かってもらえることに気づいていた。また、振り返りの作文でも、「今回学んだことは、伝わらなくてもがんばって伝えようとしたら、相手も理解してくれるということを学びました。」と記述していた。

このことから、最初は英語を話すことができないと、自分が伝えたいことを伝えられないということを考えていたようだが、実際に交流体験をすることによって、自分が相手意識をもって伝えようとするれば、伝えたい気持ちが通じるということにつながったようである。つまり、「コミュニケーション力」「異文化理解」等の力が向上し、子どもたち自身の意識の変容につながったのではないかと考える。

表8 「希望（のぞみ）」児童生徒質問紙における肯定的回答（一部抜粋）（単位％）

力・価値観		質問項目	5月	7月
			全体	全体
人間関係形成・ 社会形成能力	他者に働き かける力	家族の人や友だちに自分の思いをしっかりと伝えることができる。	70	73
		声の大きさや話し方を気を付けて、聞き手にわかりやすく話すようにしている。	69	73
		信頼できる友だちがいる。	90	91
	他者を理解 する力	相手の気持ちを考えながら、声をかけたり関わったりすることができる。	79	84
共生	共存共生の 重視	いろいろな人たちといっしょに話をすることは楽しいと思う。	94	95
		自分の考えを出して話し合おうとしている。	84	86
	他者の尊重	話す人の気持ちを考えながら、話を聞いている。	90	93
		自分と考えがちがう人の話を聞こうとしている。	93	92
		いろいろな人といっしょに話をし、自分では思いつかなかったことに気付いたことがある。	93	94

(2) 各教科等における単元（題材）の開発

グローバル化の視点から各教科等においては、これまでの実践の成果や課題を踏まえ、少しずつ改善を加えながら進めた（表8）。

表9 小中学校で行ってきたグローバル化に対応した単元（題材）の状況

交流相手	学年	教科等	H25 年度実践内容	H26 年度実践内容
	4年	社会	グローバル化に対応したクールジャパン戦略（キャラクタービジネス）の将来性についての単元開発を行った。	
	5年	社会		『文化』に焦点化したグローバル社会学習（グローバル化に対応した小学校文化産業学習）を、日本アニメ「ドラえもん」および「千と千尋の神隠し」を事例として単元開発を行った。
海外からの旅行客	6年	外国語活動 （一部新領域「希望（のぞみ）」）	修学旅行地で出会った方々にインタビューをする。	今年度も同じ活動を5月の修学旅行時に実施している。
広島大学の留学生	9年	社会	自分の国の紹介をする。テーマは世界遺産、衣食住などであり、言語は英語を使用する。	留学生の学校訪問の際、自校の国際交流の取組について2名の教諭（英語・美術）がP Pで説明し、意見交流した。さらに9年「希望（のぞみ）」の時間（ピースプロジェクト）のゲストティーチャーとして海外の客人に平和公園を案内できるよう英会話練習の対応をしていただいた。
C. M. Eppes 中学校 （アメリカ合衆国）	7～9年	英語	手紙の交換を年に3回程度実施する。C. M. Eppes 中学校は広島大学の相互体験型海外教育実地校である。	文通は相手校の都合により休止となった。 英語科の取り組みとして、学習規律の校内掲示の英語版等を作成するなど、掲示物の工夫をした。9年はピースプロジェクトと関連を図った指導をした。
沖縄駐留米軍家族 （E-アドベンチャー）	8年	特別活動 英語 美術	修学旅行地沖縄において、Eアドベンチャーの活用により、沖縄駐留米軍家族との半日交流を実施した。	夏休みには、平和に関する新聞記事の感想を英作文した。英語科では、英語カードファイルを作成し、実践にいかせるようにした。また、美術で鑑賞した鳥獣人物戯画の英語カードを作成し、Eアドベンチャーに臨んだ。
Cloonan Middle School Rippowam Middle School IB School （アメリカ合衆国）	7年	美術	世界中の Art Links（クリエイティブ・コネクション）に所属する中学校が、共通のテーマで互いに絵を描き、作品を交換・鑑賞し、分析した。今年のテーマは「私たちの食文化を紹介しよう」であった。	昨年度の取り組みに対し、学校賞を受賞し、その授賞式（米国）に校長が出席したため、その様子（You tube）を英語の時間に見せ、解説した。また、団体関係者が来校し、受賞した生徒が、自作を紹介する等の交流ができた。今年度は、木版画作品を送付し、交流した。

① 小学校における実践

【実践事例】

小学校社会科ではグローバル化に対応した授業開発を「文化」に焦点化して行った。事例として、日本国内はもちろん東アジア・東南アジア諸国で人気作品となっはいる一方で、アメリカでは 2014 年まで放送されなかった「ドラえもん」を取り上げ、その理由について考える場を設定した。その後、グローバル化に成功した事例として、一般的に文化・生活習慣に合わせて様々な変更を加えたローカライズ（現地化）されるが、全く内容の変更なしにアメリカ等の欧米で受け入れられ、ベルリン国際映画祭では金熊賞を、米国のアカデミーアワードでは長編アニメーション映画賞を受賞するなど高く評価された「千と千尋の神隠し」を事例として、文化面でグローバル化に対応するための方法について考えさせた。

さらに日常的な取り組みとして、小学校では、自伸会信条（図 6）を今年度から 4 学年以上の学年において英語で覚える取り組みを行っている。

- 1, We shall develop ourselves though our ability.
- 2, We shall serve people and feel pleasure and thanks for this.
- 3, We shall pay regard to our rules.

図 5 自伸会信条

また、朝の会や授業で一部英語を取り入れたり、教室環境についても掲示物（日時等）を英語で書かれているものにしたり、世界地図および世界の国々の様子等を掲示していく等、自然にグローバル化を意識できるような環境を整えていくことにも取り組んでいるところである。

【成果と課題（○成果・●課題）】

- 小学校社会科授業の中で、グローバル化社会に対応することに成功した文化的事例を取り上げた単元を開発し実践することができた。
- 自伸会信条の取り組みにより、留学生の方との交流等で外国の方に対し、自分たちが常日頃から学校生活の中で意識している信条について英語で説明することができていた。
- 小学校社会科授業において、日本アニメがアメリカを中心とした世界各国で受け入れられている現状については学習することができた一方で、文化が形成された背景にまで十分迫ることができなかった。

② 中学校における実践

【実践事例】

本年度中学校では、8 年（中 2）の修学旅行における E アドベンチャー（半日の国際交流）に関連した、英語科と美術科による取り組みを行った。

E アドベンチャーとは、沖縄在住の外国人と交流をし、異文化理解をするプログラムである。他国の文化や言語、習慣等を学び、同様に自国の文化や習慣を伝え、お互いの理解を深め合うことで英語が話せることの重要性や英語が通じたことによる喜びを感じ、語学を学ぶ大切さを一層実感するこ

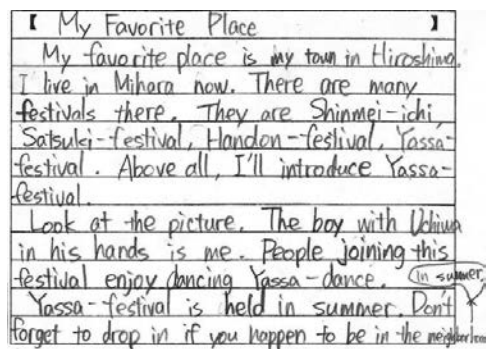


図 7 自己表現「好きな場所」

とをねらいとしている。また、本校では、学んだ英語を使ったコミュニケーションの回り方と、異文化を体験することで得られたことを、来年度の広島平和公園で行うピース・プロジェクトにつなげている。

○ 英語科の実践

授業で学習した自己表現をEアドベンチャーで効果的に活用するために、関連する絵や写真とその説明（図7・8）をカードケースに入れて持参した。内容は「お勧めの観光地」

「好きなこと・もの」「将来の夢」などである。事後、カードを見せながら会話したことについて、図9のような感想を持っていた。

成果としては、英語の授業で学習した自己表現を教室内だけに留めるのではなく、実際のコミュニケーション場面で有効活用することができた。その際、絵や写真を見せながら自分のことを伝えたので、言葉だけでは十分に伝わらないところを補うことができたようだった。相手と意思疎通が図れたことに達成感を得た生徒が多かった。

一方、課題としては、車での移動や動く活動が中心だったグループは、カードを見せながら話すタイミングが難しかった様子だった。今後の授業において、写真や絵を見ながら自分達のことを話すきっかけをつくるような場面設定をして、会話練習をさせたい。

○ 美術科の実践

美術科では、絵巻物の鑑賞の題材において、鳥獣人物戯画の模写をし、その特徴や面白さについて、定型の短文にまとめ、英訳したものをカードにして、Eアドベンチャーのホストファミリーに説明し贈呈した（図10・11）。これは、外国の方に日本の文化の良さを知っていただきたいという目的を持って、絵巻物を鑑賞することで、日本の美術への関心・意欲を高めたり、外国の方に語ることで新たな発見をしたりすることをねらったものである。

体験後に①あなたが伝えたこと②相手の反応③新しい発見・気づきについて簡潔に記述するレポートを提出させた。(図12)レポートの主な内容は表5のとおりであった。ホストファミリーの方々の豊かな感情表現や温かい賞賛の言葉を通して、絵を描いてよかったと感じたり、鳥獣人物戯画の魅力が改めて感じたりした生徒の様子がうかがえた。また、体験全体と関連させ、「Eアドベンチャーで外国の文化に私たちが興味を持つことができたように、ホ



図8 「好きな場所」を説明する写真

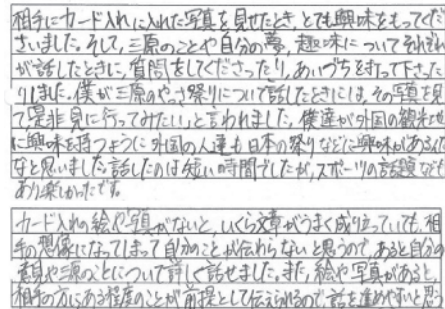


図9 カードを活用した学習への感想

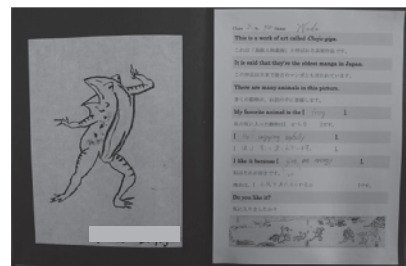


図10 鳥獣人物戯画紹介カード



図11 カードを見るホストファミリー

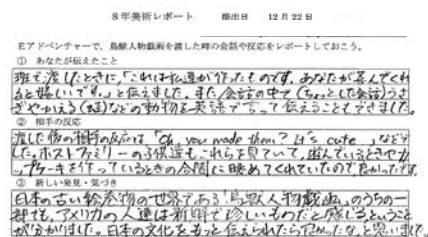


図12 事後レポート

ストファミリーの方も鳥獣戯画に興味を持ってくださいました。よって、人は自分の中での常識とは異なるものに興味をもつということが実感できました」という感想を抱いた生徒もいた。

これらの感想や生徒の様子を通して、自分がとらえた日本文化の良さを外国の方々に伝えるという相手意識を持って鑑賞したり、実際に相手の反応を見ながら伝えたりすることにより、「もっと日本の美術について知り、異文化の方々と交流してみたい」等、日本の美術への関心・意欲を高めることができたと考える。一方課題としては、グローバル人材として生徒が日本の美術について生き生きと語るだけの材料を美術室で習得させることであり、その手立てについては、今後検証していきたい。

表 10 事後レポートの主な内容

①伝えたこと	鳥獣人物戯画の特徴・自分の感想・動物の紹介等
②相手の反応	豊かな感情表現・丁寧なコメント・興味を持った様子・積極的な質問・あいづち話の盛り上げ方・理解の示し方等
③新しい発見 気づき (○よさ ●課題 ◎今後の展望)	○ホストファミリーの方も、よく知られているようだった。 ○日本文化・墨絵に興味を持たれていることがわかった。 ○絵だから伝わりやすい。 ○美術が人を笑顔にすると実感した。 ○外国人の大人にも子どもにも興味を持たれる鳥獣人物戯画の魅力を改めて感じることができた。 ●解説文を準備していても、緊張して思うようにいかないものだ。 ◎もっと世界のいろいろな国の人とも交流してみたい。 ◎人に喜んでもらえる作品をこれからも作りたい。 ◎自分たちが日本文化をもっと楽しみ継承すべきだ。

③ 教科等における評価・検証

本年度、本学校の園の保育・教科部会は「学ぶ意義を感じながら課題に粘り強く取り組む子どもの育成」を共通テーマに掲げ、新領域「希望(のぞみ)」との関連を図りながら、子どもたちの関心・意欲を高めるよう取り組んだ。その中で、相手意識や目標を明確にしたグローバルな活動を取り入れた単元(題材)の開発を進めることができた教科も増えている。このような実践においては、グローバル化に対応する力として掲げられた「①日本文化の理解、②様々な文化の理解、③読み取ることを中心としたコミュニケーション力、④伝えることを中心としたコミュニケーション力」のうち、何をねらうのかを明確にして単元(題材)開発をしているところである。

今後は、実施できている教科の事例を参考にしながら、全教科へ広げていくと共に、具体的な評価・検証計画についても、次年度の重点として取り組んでいかなければならない。

これらは、今後各教科部の研究において共通理解のもと実施していく。

5 おわりに

本研究の成果として、研究開発指定校としての本学校園の新領域「希望（のぞみ）」への取り組みが最終年度（3年目）を迎え、将来グローバル化社会を生きる子どもたちに対し、今育むべき資質・能力及び態度・価値観に焦点化して目標構造図（図1）を改善したものを踏まえ、実践を行った。また同時に、小中学校において可能な教科等との関連を図った取り組みを始めている。ここでは、「グローバルリーダーとなりうる人材の育成」を重点課題と位置づけ、主に新領域「希望（のぞみ）」においてグローバル化に対応した能力・態度・価値観を育むための幼小中一貫のカリキュラムの開発・実践を行うことができつつある。

一方、課題としては、先述したようにグローバル化人材育成という観点から、各教科における単元（題材）開発や評価・検証が十分でない。このような視点から、教科等の単元（題材）を捉え直し、単元（題材）の開発を行っていくことが、今後必要となるのではないかと考える。

【参考文献】

- 1) 広島大学附属三原幼稚園・小学校・中学校『平成19年度研究開発実施報告書第5年次』2008
- 2) 広島大学附属三原幼稚園・小学校・中学校『平成20年度研究開発への取り組みに関する部会実践事例集第6年次』2009
- 3) 広島大学附属三原幼稚園・小学校・中学校『平成20年度研究開発実施報告書第6年次』2009
- 4) 広島大学附属三原幼稚園・小学校・中学校『平成25年度第16回幼小中一貫教育研究会紀要』2013
- 5) 広島大学附属三原幼稚園・小学校・中学校『平成26年度第17回幼小中一貫教育研究会紀要』2014
- 6) 広島大学附属三原幼稚園・小学校・中学校『研究開発実施報告書 平成26年度（第3年次）』2015
- 7) 広島大学附属三原幼稚園・小学校・中学校『研究開発実施報告書（別冊資料） 平成26年度（第3年次）』2015

[各章]

Ⅶ. グローバル人材に求められる資質・能力を育む教育課程の開発 ～持続可能な社会の構築に向けての基盤となるクリティカルシンキングの育成～

広島大学附属福山中・高等学校

1. はじめに

附属福山では、これまで、文部科学省 研究開発学校の指定を受けた教育課程の開発を12年間行ってきた。

平成15～17年度「中学校・高等学校を通して科学的思考力の育成を図る教育課程の研究開発」、平成18～20年度（延長3年）「中等教育における科学を支える「リテラシー」の育成を核とする教育課程の開発」をテーマに研究開発を行い、全教科で科学的思考力やリテラシーを育む「サイエンスプログラム」を提案した。

平成21～23年度は先の研究開発をベースに、「クリティカルシンキングを育成する中等教育教育課程の開発」をテーマとして、新教科「現代への視座」を設置し、クリティカルシンキングをいかに捉え育むかについての具体例と系統的な教育課程を提案した。この「クリティカルシンキング育成プログラム」では、クリティカルシンキングを「適切な規準や根拠に基づき、論理的で偏りのない思考」、「よりよい解決に向けて複眼的に思考し、より深く考えること」と位置づけ、他者の考えなどを鵜呑みにすることなく、じっくりと考え、課題を発見し、解決に向けて粘り強く取り組む態度や能力を育むことをねらいとした。

知識基盤社会、高度情報化社会、グローバル社会に対応する教育においては、まさにクリティカルシンキングの育成が重要となっている。しかし、クリティカルシンキングはこれからの教育において重要な要素ではあるが、それ自体が目標ではない。クリティカルシンキングを活用して創造的な力を育成し、創造的な社会をつくるという観点が重要である。そのため、平成24～26年度では、これまでの研究開発の延長指定を受け、「クリティカルシンキング」を「持続可能な社会の構築」という概念と結びつけ、「資源・エネルギー」、「環境・防災」、「安全・健康」、「地域・文化」、「国際化・グローバル化」などの教科横断的な内容を扱い発展させることで、今後必要とされる教育に対して新たな提案を行った。

ここで、平成24～26年度の研究開発で開発した教育課程については、国立教育政策研究所の先行研究¹⁾を参考に、右図の、テーマ、構成概念、ねらいとする能力・態度で関連性

◇テーマ

- A 資源・エネルギー B 環境・防災
C 安全・健康 D 地域・文化
E 国際化・グローバル化 F その他

◇構成概念

▶人を取り巻く環境（自然・文化・社会・経済など）に関する概念

- I 多様性 II 相互性 III 有限性

▶人（集団・地域・社会・国など）の意思・行動に関する概念

- IV 公平性 V 連携性 VI 責任性

◇ねらいとする能力・態度

- ① 批判的 ② 未来 ③ 多面的・総合的
④ コミュニケーション ⑤ 協力
⑥ つながり ⑦ 参加

や発展性を検討して構成している。創設した新教科「現代への視座」の各科目および総合的な学習の時間と、それらの要素との関連は、前年度の報告書²⁾に掲載している。

それらをもとに、教育課程と「グローバル人材育成」の要素（**要素Ⅰ**、**Ⅱ**、**Ⅲ**、**その他**）との関連について述べる。

まず、**要素Ⅰ**（語学力、コミュニケーション力）については、「現代への視座」の現代評論 A、B において、評論を通した論理的な思考力の育成、論理の誤謬の教材化、英語による表現活動やコミュニケーションなどを通して、直接的に育成するプログラムを提案している。また、他の科目の中でも、協働的な学習を行い、発表や相互評価などを取り入れることで、育成するようになっていく。

要素Ⅱ（主体性・積極性、協調性・柔軟性、責任感・使命感）については、構成概念における**Ⅳ公平性**、**Ⅴ連携性**、**Ⅵ責任性**、および、ねらいとする能力・態度の**⑤協力**、**⑥つながり**、**⑦参加**と対応しており、各学年段階でそれぞれ発展的に対応するように構成している。

要素Ⅲ（異文化理解、アイデンティティ）については、高等学校を中心に、「現代への視座」で「国際化・グローバル化」および「地域・文化」をテーマとした学習を進めている。さらに、これらのテーマについての学習だけでなく、異文化理解のための交流などを取り入れて実際に体験する活動も必要である。そのため平成 26 年度は、広島大学大学院国際協力研究科 (IDEC) にご協力いただき、連携プログラムを立ち上げ実施した。そのほか、国際的な交流も実施し、異文化理解、異文化交流および国際協力の視点などについて学ぶ機会を設けた。

その他の要素である問題解決力、批判的思考は本研究開発の直接的な目的として設定している。また、ICT については、中学校 1 年の総合的な学習および高校 2 年の数理情報で直接扱うようになっていく。このように、研究開発した教育課程が「グローバル人材育成」の要素の多くのものに対応しているといえる。

以下、それぞれの取り組みについて報告する。

2. 研究開発学校としてのカリキュラム開発³⁾

(1) 概要

◆研究開発課題

持続可能な社会の構築をめざしてクリティカルシンキングを育成する、新教科「現代への視座」を柱にしたすべての教科で取り組む中等教育 教育課程の研究開発

◆内容

卒業段階での生徒像を次ページのように設定し、新教科「現代への視座」を創設し、これを柱に総合的な学習の時間、既存教科の発展的単元でカリキュラムを構成した。

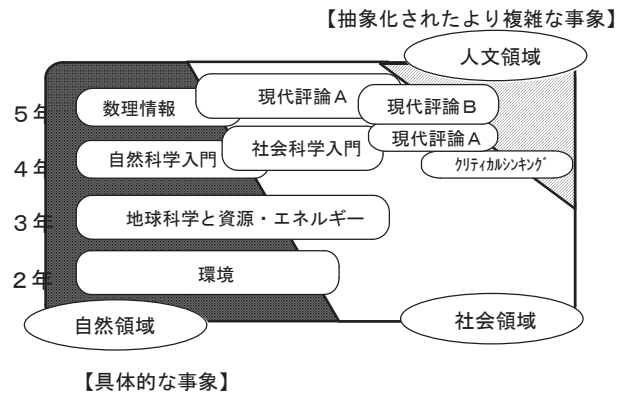
新教科「現代への視座」の教科目標

持続可能な社会の構築をめざし、現代の社会で生じている諸問題や関連する事物・現象について、論理性や科学性を重視して複眼的、創造的に思考し問題を発見したり、課題を的確に設定して解決しようとするクリティカルシンキングを育成する。

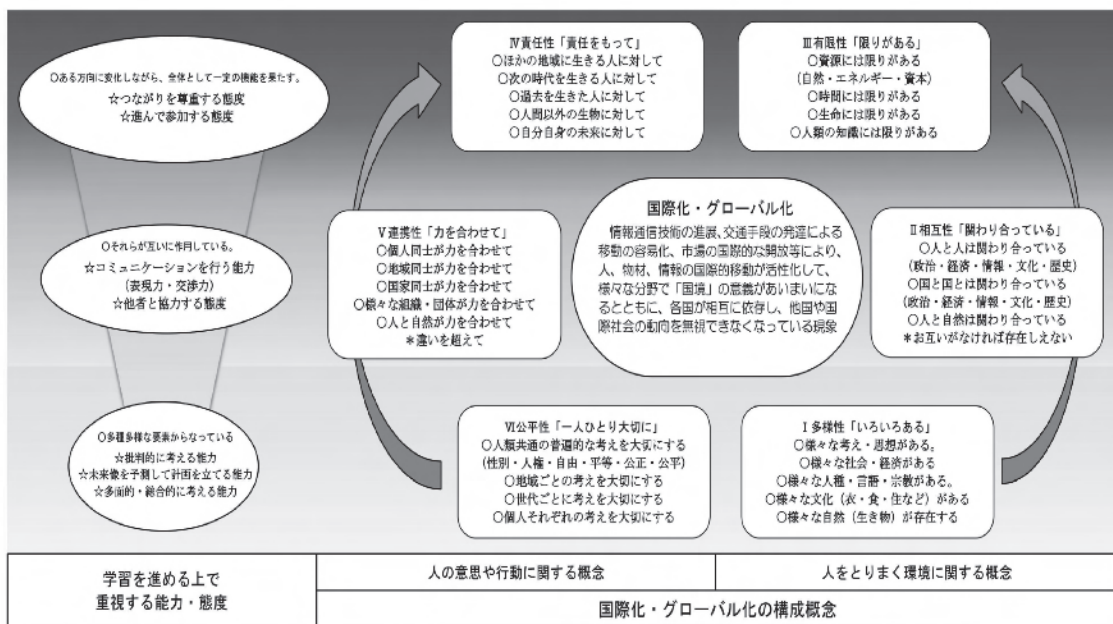
卒業段階での期待される生徒像

- 【**関心・意欲・態度**】現代の社会で生じている諸問題や関連する事物・現象に関心を持ち、自身とのかかわりで捉え、よりよい解決に向けて粘り強く取り組もうとしている。
- 【**思考・判断・表現**】事物・現象の中に問題を見だし、複眼的、創造的に思考し、論理性や科学性に留意して的確に説明したり表現したりすることができる。
- 【**技能**】議論の方法や論理の誤謬などに留意して論じたり、科学的シミュレーションなどを活用して予測したりして自分の考えをまとめ、他者と議論することができる。
- 【**知識・理解**】現代の社会で生じている諸問題や関連する事物・現象についての基本的な概念や原理・法則、および社会的・人文的背景について理解し、知識を身につけている。

この教科目標に基づいて、各発達
の段階にあわせて設定した8種の科
目は右図の通りであり、身近で具
体的な事象を扱う内容から、学年進
行に伴って、抽象化されたより複雑
な事象へと広がる内容となっている。
また、持続可能な社会の構築をめざ
す系統性のあるカリキュラムにな
るよう、「テーマ」、「構成概念」、
「ねらいとする能力・態度」で整理



し、科目間のつながり、能力・態度のつながりをもたせている³⁾。例えば、テーマ「国際化・グローバル化」に対しての、構成概念の具体と、それに対して重視する能力・態度を整理したのが下図である。



*国際化・グローバル化の定義の出自： 文部科学省 国際教育交流政策懇談会（第1回） 配付資料「グローバル化と教育に関して議論していただきたい論点例」の「2. グローバル化に関する整理」の「(1) グローバル化とは」より抜粋
(URL : http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/ehousa/kokusai/004/gjuroku/attach/1247196.htm)

また、中・高等学校 6年間を2年ごとに分割し、それぞれ「入門期」、「習得・活用期」、「発展期」とし、教材と学習方法の工夫を行い、相互評価やロールプレイ、グループ討議などの協働学習を取り入れて展開した。

学年と学習段階	協働的な学習方法の展開
5・6年 発展期 現代社会の諸問題を題材に、より高度な議論ができる	形式と内容に関する相互批評活動 グループ討議 文字チャットによる議論
3・4年 習得・活用期 互いに適切な質疑応答や指摘ができる	ロールプレイによる問題解決 多面的な相互評価や議論 デイバート 探究活動と発表会・質疑応答
1・2年 入門期 探究や表現活動を行うとともに相互評価を取り入れ、よりよい解決に向けた助言をしよう態度を育成	ルーブリックの作成と相互評価 プレゼンテーションと相互評価 探究活動と相互評価 掲示板による意見交換

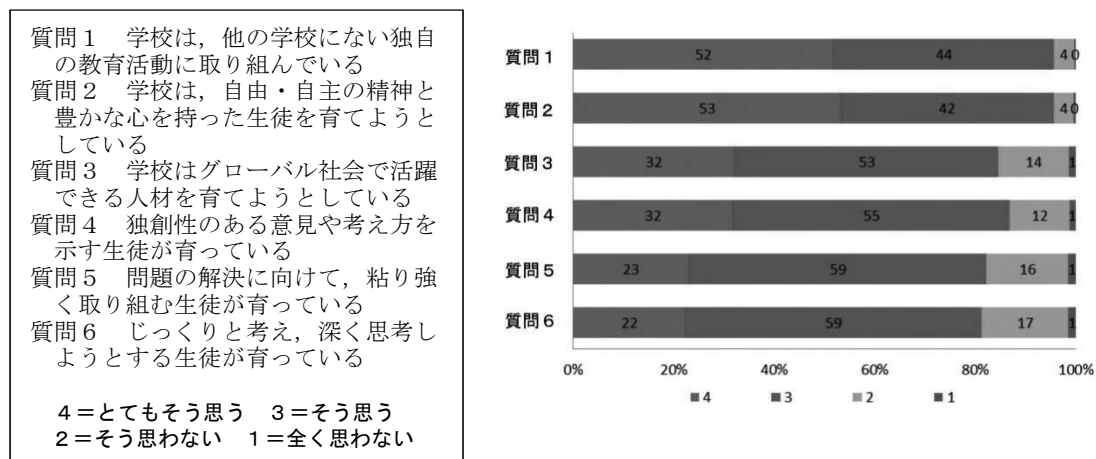
(2) 成果と今後の課題

生徒の自己評価と相互評価、およびアンケート、そして成果物などをもとにした多面的な評価を通して、開発した教育課程の生徒への効果として次の点が見いだせた。

- ◆社会的課題などについて主体的に考える姿
- ◆科学性や論理性に留意した記述や発表
- ◆クリティカルシンキングは「よりよい解決に向けて複眼的に思考し、より深く考えること」であると理解し、議論の場でも、建設的な意見を述べ合ったり、それを受けとめたりする学習集団に成長

これらの結果から、この教育課程が有効なものとなっていると判断する。

また、保護者の学校の研究に対する以下のアンケート結果は下グラフの通りであり、学校の研究についての理解が得られており、グローバル化に対応する取り組みして受け止めていただいていると判断する。

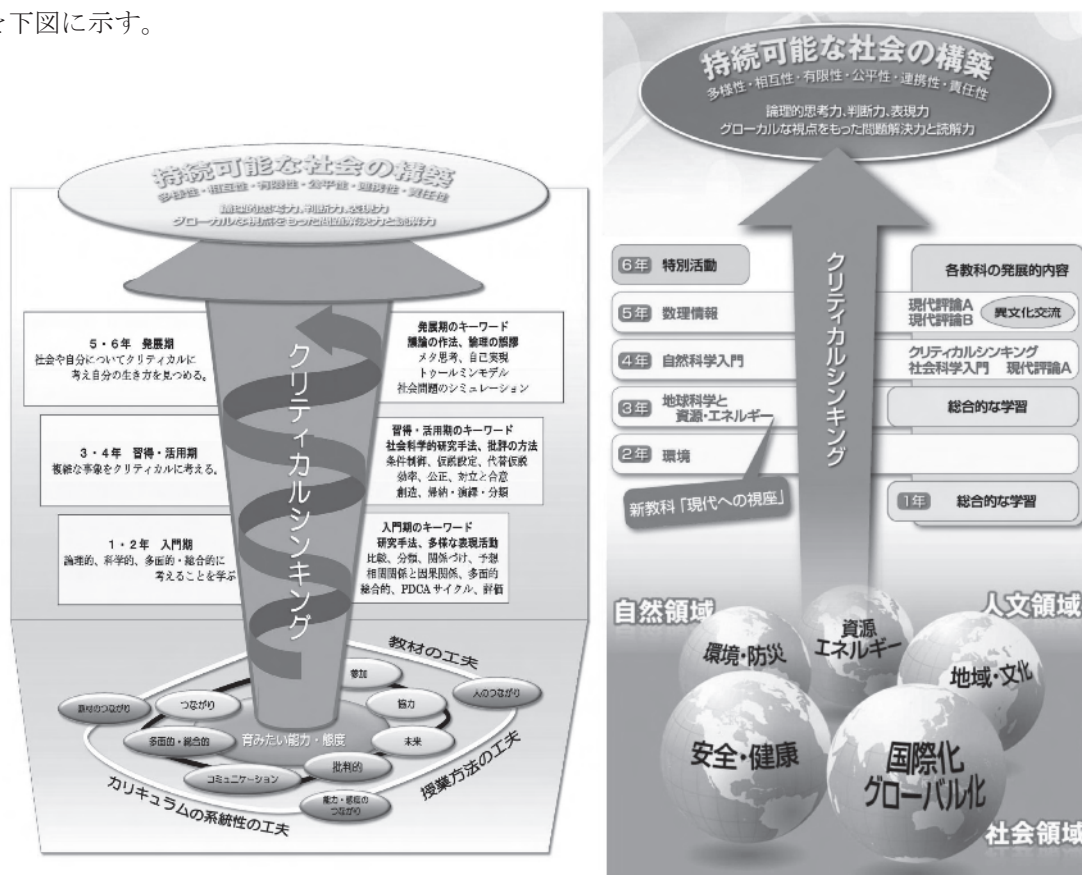


国立教育政策研究所の『教育課程の編成に関する基礎的研究報告書5』（2013年3月）は、育成をめざすべき能力・態度を、基礎的リテラシー、認知スキル、社会スキルの三つに分類している。各教科で学ぶ基礎的・基本的な知識や技能は基礎的リテラシーに、クリティカルシンキングは認知スキルに分類することができる。基礎的リテラシーと認知スキルの育成について、前期研究開発と本研究開発において達成できたと考えている。

一方で、社会スキルの育成については課題が残る。本研究開発でいえば、「協力」「つなが

り」「参加」の能力・態度とつながりが深いものである。本研究開発でもこれらの能力・態度の育成はねらいとしていたし、達成できたとも考えている。生徒は協働学習を通じて、他者観の変容について感じている。ただし、これらは日常生活を共にする関係での、「協力」であり「つながり」であった。日常生活を共にしない、異文化間での「協力」や「つながり」が今後の課題となる。次節に示すように、今年度より、広島大学大学院国際協力研究科の協力をいただき国際協力や合意形成について考える連携プロジェクトをスタートさせるとともに、国際的な交流を通じた実践的な社会スキルの育成について取り組み始めた段階である。今後は、異文化間での「協力」や「つながり」、ひいては世界への「参加」へとつなげていきたい。

最後に、カリキュラムの構造を、科目やテーマで示したものを右図、学習面で整理したものを下図に示す。



3. 異文化理解・国際交流の取り組み

平成26年度に実施したグローバル化に直接関連した取り組みを以下にまとめる。

(1) 国際協力研究科 (IDEC) 連携プログラム

- ① 3年 (中学校3年) 講師 ; M2 玉田博規先生 (6月6日実施)

◆概要

IDECのグローバルインターンシッププログラムである G.ecbo 特別教育プログラム体験者を講師として招き、海外の企業へ飛び込み、そこでインターンとして活動した経験から、海外で「人のつながりをつくり」「役割を果たす」ことについて学び、各自の課題と

して考える。

◆生徒のようす

外国の人と仕事をする事で分かる文化・習慣の違いや、外国人から日本人はどのようにみられているかについての講演を聞き、「相手の国ことを理解することの大切さ」や、一方で「自分の考えをはっきり伝えることの大切さ」を学ぶことができた。

② 4年（高校1年） 講師；D2 高阪将人先生 （6月19日実施）

◆概要

青年海外協力隊を始め各種の国際貢献事業体験者を講師として招き、国際貢献、異文化の中での活動などの経験から、グローバル化の中で必要となる視点を学び、各自の課題として考える。

◆生徒のようす

発展途上国の学校での教師経験や複数の国での生活経験で感じたことについての講演を聞き、生徒は「世界の実情を知ることの大切」や、国際貢献の分野に限らず「専門性を高めることや経験を積むことの大切さ」、そして「失敗を恐れず、挑戦していくことの大切さ」を学ぶことができた。

③ 5年（高校2年） 講師；D3 Siti Maimunah 先生（5月29日実施）

◆概要

海外からの留学生を講師に招き、世界の中での日本の役割や日本に期待することなどについての英語による授業から、国際協力や国際貢献について多面的に学び、問題解決や私たちの課題について考える。

◆生徒のようす

インドネシアからの留学生による全て英語による講演で、外国人から見た日本の素晴らしさや日本とインドネシアのために何を学んでいるかの講演を聞き、「日本の良さや素晴らしさ」を再認識したり、「もっと英語を使いこなせるようになりたい」という思いや「もっといろいろな立場の人と関わることの大切さ」を学んだりすることができた。

④ 6年（高校3年） 講師；藤原章正先生 （6月12日実施）

◆概要

社会的事業を題材に、実際に行われた合意形成に向けての取り組みから、課題の発見から問題解決の方法を学び、合意形成の方法やあり方について考える。

◆生徒のようす

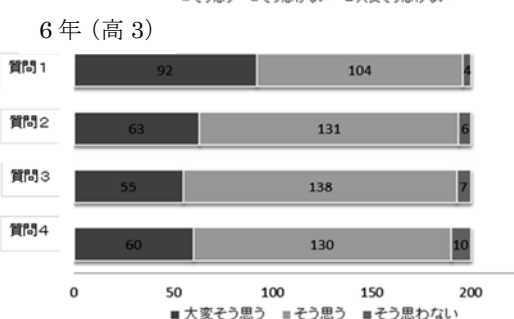
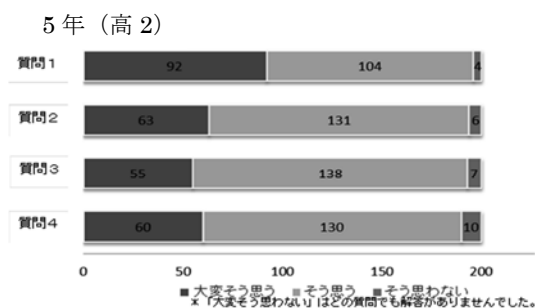
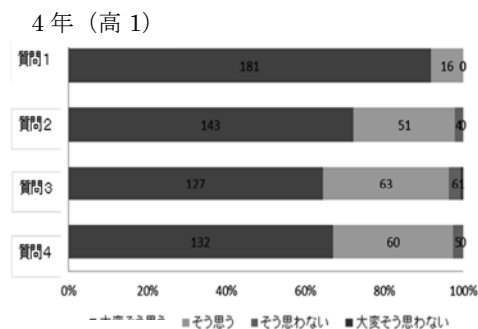
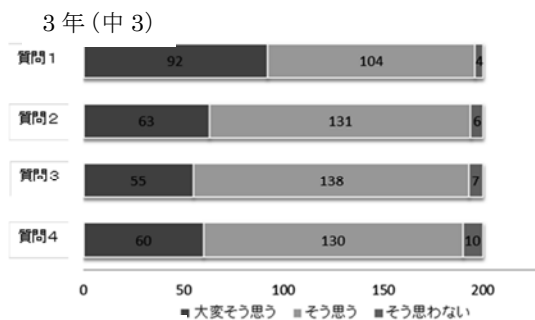
専門の交通計画学や、公共事業における住民を巻き込んだ合意形成に携わった経験をもとにした講演を聞き、意見の異なる立場を合意に導く上で「利己的から利他的になることの大切さ」やグローバル化が進んでいる今だからこそ「日本人らしさを活かした国際貢献があること」を学ぶことができた。

IDEC 連携プログラムの各学年生徒のアンケート結果を次に示す。この結果や自由記述からグローバル化や異文化理解および合意形成についての関心の高まりが見られた。

IDEC 連携プログラムでの生徒の感想（アンケート結果）

質問項目

1. 今日の講演は興味・関心をもって聞くことができましたか。
2. 今日の講演は新しい考え方や視点が学べるものでしたか。
3. 今日の講演から物事を深く考えるために大切なことが学べたと思いますか。
4. 今日の講演を通してこれからの授業や生活で生かしたいことが得られましたか。



（2）ソウル大学附属学校教員との交流（教員間交流）（10月28日実施）

ソウル大学附属学校教員12名が来校し、それぞれの学校の特徴やシステム、そしてめざす教育についての意見交換を行い、教員間交流を持った。

（3）サンタサビーナカレッジとの交流（生徒間交流）

◆概要

- ・Skypeによる交流（11月26日）
オーストラリア10名：当校高校1年17名
自己紹介と質疑応答
- ・当校訪問（教員2名，生徒8名）

（12月16日）：

共同作業：当校生徒高校1年17名，
学校紹介；高校1年生全員202名
食文化をテーマに共同作業を行い，その後，学校
紹介・意見交換などを行った。

◆生徒のようす

交流の中心になった生徒は次期学友会中心メンバー



の高校1年生17名である。生徒たちは、「もっと英語を使いこなせるようになりたい」という思いを強くする一方で、外国の人と身振り手振りも交えてコミュニケーションが取れたことへの達成感を感じることができた。また、伝統的な日本の文化を知ることの大切さやアニメといった日本の文化が世界に広がっていることを実感することができた。



学校紹介の交流に参加した高校1年生全員についても、アンケート結果から、「海外の人（高校生）と交流をしてみたい」や「海外へ行ってみたい」という思いを強くした生徒が非常に多かった。

(4) その他

科学先取りグローバルキャンパス岡山（科学技術振興機構「グローバルサイエンスキャンパス」平成26年度採択事業 実施機関：岡山大学）への参加（希望者15名）

サイエンスダイアログ（日本学術振興会）の開講（希望者44名）

4. 来年度に向けて

これまで計12年間行ってきた研究開発学校の取り組みで培ってきた全教科をあげて取り組む開発力と、成果として蓄積した能力ベースのカリキュラムを基盤に、研究テーマを「地方に根ざしてグローバルな視点からのイノベーションを生み出していく、地方と世界をつなぐグローバルリーダーや地方創生リーダーの育成」と設定し、新たな教育プログラムの開発へ向かう準備を進めている。資質・能力としては、クリティカルシンキングを基盤にした「合意形成」能力の育成を柱とする。このようなテーマを実践するのに必要となる「課題研究」や「特別講座」、教科内容の再編と新設について検討を続け、ひとつの試案をつくり審議している段階である。

※ここでのイノベーションとは、「確かな基盤と柔軟な発想による自己変革を通して、新しいアイデアを生み出して社会的意義のある新たな価値を創造し、社会的に大きな変化をもたらすこと」を意味する。

文献

- 1) 国立教育政策研究所，学校における持続可能な発展のための教育(ESD)に関する研究 最終報告書，平成24年
- 2) 平成25年度広島大学附属学校園研究推進委員会報告書「社会のグローバル化に対応した初等中等カリキュラムの開発Ⅱ」
- 3) 詳細は，広島大学附属福山中・高等学校 研究紀要 第55巻，2015，（第1部が研究開発学校 研究開発実施報告書となっている。）

海外の取組

シンガポール学校視察報告書

1. はじめに

本学は大学全体としてグローバル化に対応した教育の取り組みを最大の目標として各種の取り組みがなされている。附属学校も例外でなく、すべての学校園でグローバル人材に求められる資質・能力の育成を目指すカリキュラム開発、指導法開発に取り組んでいる。その一環として、私たちはいち早くグローバル化に対応した教育に取り組んでいるシンガポールの二つの小学校を視察した。初日は、ベドックグリーン小学校(Bedok Green Primary School)を、二日目はシンガポール日本人学校小学部チャンギ校を訪問した。視察の概要は以下の通りである。

なお、訪問した二つの小学校の概要については井上京子(附属学校再編計画室長)が、それぞれの学校の授業報告については、神津弘之(広島大学附属小学校副校長)と伊藤公一(広島大学附属三原小学校教諭)が執筆した。

2. 視察校の概要

(1) BEDOK GREEN PRIMARY SCHOOL (ベドックグリーン小学校) 訪問の概要

4月24日(木) シンガポールの東部に位置するベドックグリーン小学校を訪問した。学校の特徴や教育方針、その取り組みや英語教育について、校長の Mrs. Sita Singh から説明があった。訪問時程は次のとおりである。

① 訪問時程

08:30-09:00	到着	学校の概要説明
09:00-09:30	校内視察	
09:30-11:00	授業視察	2年 英語 5年 算数 4年 英語 3年 理科 5年 算数
11:00-11:30	質疑応答	



② 学校規模

40学級 児童数1308名 1学級平均33名
児童のバックグラウンドは、次のとおりである。

- ・57,7% 中国系
- ・27,9% マレー系
- ・5,7% インド系
- ・8,6% 他の民族
- ・33% 英語を母語とする



③ 「活力ある学びの共同体」

学校を「活力ある学びの共同体」と位置づけ、児童が主体的に学べる取り組みや子どもの多様

な学びのニーズに応えたり、課題の解決ができるICT活用学習を取り入れたりしている。また、体験学習や校外学習として動物園・植物園やバリ島にも調査や交流に出かける。

児童のバックグラウンドがそれぞれ異なっているため、一人一人の児童に学校での所属感を持たせるために、全校児童を5つのグループに分けてどれか一つに所属させている。これを House System と呼んでいる。例えば、児童が着用している体操服もそれぞれ5色（赤、緑、黄、青、紫）に分かれていて、体育の授業や縦割りの集会・行事のときなど色別に分かれて活動している。この5つの色は Five School Values 重要5項目：Integrity(red) 誠実の赤， Responsibility(green) 責任感の緑， Resilience(yellow) 快活の黄， Respect(blue) 尊敬の青， Compassion(purple) 思いやりの紫の色に基づいている。



また、多様な出自の児童が在籍している公立学校では、National Day 国民の日や国や地域の祭りなど、シンガポール人としての国民性や市民意識を醸成する活動に積極的に取り組んでいる。

④ 教員の研修と保護者のワークショップ

教科や教職経験などのレベルに分かれて7～8人のグループ Professional Learning Team で毎週1時間の研修 Sharing Sessions を行っている。研修の時間帯は日本と違って児童が学校に居る午前中であった。教員は初任者から中堅、ベテランへと段階を踏まえて研修を重ねており、それぞれの教科のリーダー教員となった者は、その自覚をもって後進の育成や教科の指導に当たっていた。(Staff engage in continuous learning.)

シンガポールは共働が多く、保護者と子どもが一緒に過ごす時間が少ない。そこで保護者に学校の行事に参加してもらう活動 Parent-Child Bonding がある。また、算数や理科では、新しい指導方法を保護者にも理解してもらって家庭学習での指導に役立ててもらえるようなワークショップ Parents' Workshop がある。

⑤ 学習指導について Instructional Programmes

重点を置いているのは、英語、算数、母国語（中国語・マレー語・韓国語・アラビア語・フランス語など）の3教科で、ほぼ毎日学習している。英語は能力別にクラスを分けて、完全習得をめざしている。そのための教材リソースルームが大変充実している。

シンガポールといえば、OECD による PISA の学力調査では、トップレベルの水準を維持している国である。ところが、子どもたちは様々なテストによるストレスを感じていることが問題となってきている。

そこで、保護者にも学習評価の説明がきちんとできて、なおかつ、子どもたちがテストに負担を感じずに学習できる評価にシフトしてきている。それが Balanced Assessment と呼ばれ、子どもたちの達成状況を small task やポートフォリオを用いながら自己・児童相互・教

師による多面的総合的な評価を重視するようになってきている。特に、低学年では Show & Tell を頻繁に行い子どもの自尊感情や心の成長を育みながら Balanced Assessment を行っている。

⑥ 施設・設備・人材について

日本と大きく違うことは、歯科医療室が校内にあり 歯科医が常駐していることだ。これは、乳歯から永久歯に生え変わる学童期に日本の国民健康保険のような制度が整っていない事情があるようだ。

理科室には実験助手，図書館には図書館司書が常駐していて子どもの活動を支援している。英語の授業については，英語のネイティブスピーカーが担当している。授業中の板書にあたるものは，私たちが見学した授業では すべてパソコンからプロジェクターを使って映し出していた。また，パソコン室では，児童一人一人がタブレット端末を利用できる設備が整っている。



(2) シンガポール日本人学校小学部チャンギ校の概要

シンガポール日本人学校は，シンガポール日本人会によって設置された私立学校であり，シンガポール日本人会学校管財人会により権限を委嘱された学校運営理事会によって学校の運営が行われている。現在はシンガポール国内に小学部が2校（クレメンティ校・チャンギ校）と中学部1校（ウエストコースト校）がある。

今回の視察校は，シンガポールの東部に位置した児童数834人の小学部チャンギ校である。ここ3年で児童数が200人程増加したそうだ。しかし，学校の総面積は東京ドームと同じくらいの広さがあり，教室の数にはまだ余裕があるとのことだった。

広々としたエントランスホールの中央に端午の節句を祝う鎧兜が配置され，明るい吹き抜けの天井にはこいのぼりが3匹泳いでいた。この日は，ちょうど「1年生を迎える会」が催され，全校児童が会場に入場していくところだった。



① 訪問時程

- | | | |
|-------------|------------------------------------------------|--------------------------------|
| 10:40-11:35 | チャンギ校到着 | 中村善治校長先生出迎え |
| | 校長室にて中村校長先生よりシンガポールの教育体系およびチャンギ校教育についての説明・質疑応答 | |
| 11:35-12:20 | 授業視察 | イマージョン水泳・イマージョン音楽 |
| | 校舎見学 | 能力別英会話教室，各教室，体育館（大・小），集会室，運動場等 |

12:20-13:40 ドカティ博美先生から講話
「日本人学校とシンガポール 現地校との違いについて」
14:00 チャンギ校出発

② 中村校長先生の講話および質疑応答より

○学校教育目標を「一人ひとりの無限の可能性を伸ばし 夢抱く 国際感覚豊かな子どもの育成」とし、次の3つの目標を掲げていた。

1. 教職員の和を重んじ率先垂範による学校改革を目指す
2. 過去の教育に必ず新たな一工夫を
3. 本年度のキーワード「夢」「挑戦」「バディシステム」として全ての教育活動で推進

中でも強調されたのが、「バディシステム」である。新しく着任した教員がチャンギ校での学校業務に速やかになじめるようにすることが、その目的の一つである。60名余りの多様なバックグラウンドをもつ教職員が、1つの学校で共通の目標に向かって進むためには、大切なシステムであると感じた。

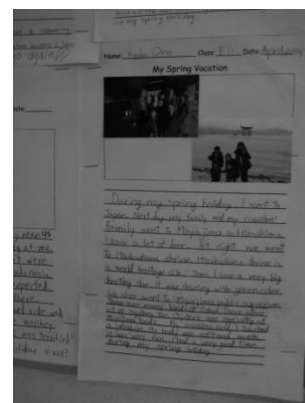
○本年度834名の児童が在籍しているが、6学年まで在学し続けるのはこのうちの10人程であり、一年間で200名前後の児童が転出入する。子どもたちの中にはそのような現実をスムーズに受け入れられる体制や雰囲気ができている。

○現地の学校との交流を学年別に年間2回は行っている。また、修学旅行ではバリ島を訪れ現地の人々と交流している。このような交流は、学校で学習した英会話を実践するよい機会ともなる。

○ICT教育を充実させている。(各担任はタブレット端末を持っていて、デジタル教材も大変充実している)

○英語教育を重視し、日本人教師はイングリッシュスタッフとの連携を強化して英語教育を推進している。(イングリッシュスタッフは14名在職)

○様々な教科・領域において、英語教育や交流教育を積極的に行っている。



3. 視察授業の実際

(1) ベドックグリーン小学校について

① 算数

5年生の算数（体積）の学習を2時間参観した。まず、最初の授業では、立方体の長さや幅、高さの各部分の名前について、何を表しているのかスクリーンに実際の立体を映しながら確認するところから授業が始められた。



まず、ホワイトボードで立体のどの部分が長さや幅、高さにあたるのかを全員で話し合い、教師が立体の体積の求め方を説明していた。その後、実際に公式を使って体積を求める問題を解く活動であったが、その際にそれぞれ教具を操作しながら隣同士で話し合い、答えをプリントに書き込んでいた。



次の授業は、教員を指導する立場にあるリーダー的な教員の授業を参観した。授業は、1時間目と同じ5年生の算数の授業（体積）であった。授業では、ラウンドテーブルの形式で行われていた。ここでは、それぞれ異なる問題を4人グループで順番に解き、最後に問題について話し合う方法で授業が進められていた。また、児童が1立方センチの立方体の個数を説明する場面では、ホワイトボードに説明を書いたものと、実際の立体を重ねながら授業が進められていた。



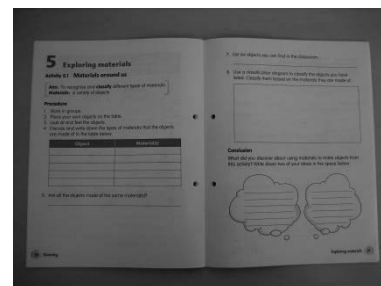
② 理科

3年生の理科の授業テーマは「身の回りの材質 (Materials around us)」であった。最初に教師はプロジェクターで自転車のイラストを投影し、自転車のそれぞれの部分ができるか発問した。子どもたちから「ゴム」「金属」などの発言があり、教師はホワイトボードに材質名を板書していった。



次に、教室にある物品を手にとったり、窓ガラスを指さしたりしながら、それぞれの材質を子どもたちに確認し、最終的に、ホワイトボードには「1 ゴム、2 プラスチック、3 木材、4 ガラス、5 金属」が板書され、「セラミック」と「布」も欄外に書き加えられた。

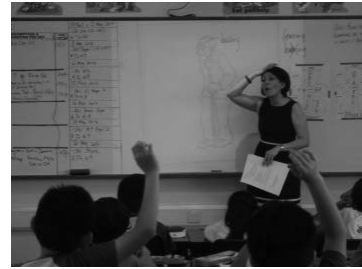
次に、「木材は何からできているか？」という発問があった。これに関しては、子どもたちは「木（植物）」と答えたが、ガラスやプラスチック等に関しては、子どもたちが口々にいろいろな発言をし、聞き取れない状態であった。最終的には教師が「ガラスは鉱物から、プラスチックは石油から」というように説明した。子どもたちは、必要に応じてこれらをワークブックに書き込んでいた。



本授業は普通教室で行われ、特別な実験・観察用具は準備されていなかった。本授業が「Materials around us」であることを考えれば、それはむしろ当然であり、普通教室内の様々な物品に注目させることに意義があったと思われる。

③ 英語

4年生の英語の授業では、まず電車の中の様子を表す挿絵が提示され、その内容について英語を使って考える場面であった。考える際に、教師側が五感を手掛かりにした指導が行われていた。たとえば、目では「What do I see?」という発問があり見えるものを子どもたちが発言していくというものであった。また、「What do I say?」という発問によって車内で交わされている会話を想像しながら英語で説明するものであった。



次の活動では、具体的に一人の人物に焦点化し、その人の容姿や服装等からその人物像を想像し、英語で答える活動が行われていた。ここでは、英語の語彙や文章等の言語によって子どもたちが思考し、発言する態度が見られた。

(2) シンガポール日本人学校について

① イマージョン水泳

イマージョン水泳では、日本人教師1名（監視）とイングリッシュスタッフ2名が3年生21名（見学6名）を指導し、イングリッシュスタッフが身振り手振りを交えながら英語で指示を出していた。



視察した場面では、準備運動で日本と変わらない動作を行っていたが、「one・two・three」と英語での掛け声や教師による指示・説明があり、準備体操後のバタ足指導でも、2人の教師による動きの指導（一人がプールの上から、もう一人がプール内）を行っていた。プールサイドでは、日本人教師が見学者へ指示をしたり、現地の教師の指導の補助をしたりしていた。

② イマージョン音楽

イマージョン音楽では、1名のイングリッシュスタッフは2年生13名を指導(1クラスを2つに分けて指導)していた。水泳同様にすべての指示が英語で行われ、参観した時(授業終盤)には、学期初めの授業であったため、教科書への記名の説明が行われていた。説明後には、教師の手拍子や英語での指示に合わせて、英語のイントネーションが自然と身につくような歌を歌う場面があった。



③ 英会話

チャンギ日本人学校においては、各教科の基礎基本の徹底を図るとともに、英語教育の効果的な取り組みを進めている。具体的に、英語教育の重視として次の点を掲げている。

○英語教育の目標を明確にし、学習意欲を高めながら英語力を育む。・カリキュラムを改善し、各レベルの指導内容をより明確にする。

- ・フォニックスの指導方法をより改善し、英語への興味・関心をさらに深めさせる。・習熟度別の英文法の指導内容を充実させ、英語の基礎基本を定着させる。

- ・イメージ音楽、イメージ水泳による学習効果をより深め英語力の定着を図る。

○英会話授業の工夫改善を図る。

- ・授業研究や教材教具の整備を進め、より楽しい英会話授業を心がける。
- ・習熟度を考慮し、レベルにあったクラス編制を柔軟に行う。

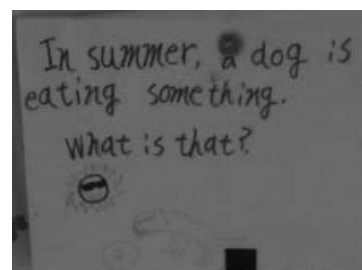
○英会話教師と日本人教師の連携を強める。

- ・日本人教師が英語活動全般を担当し、イングリッシュスタッフとの連携を強化して英語教育を推進する。
- ・様々な教科・領域において、英語教育や交流教育に工夫を凝らす。

チャンギ校においては、国際理解教育と現地校交流を積極的に推進し、英語に重点を置いた交流を進めている。具体的には、現地校の同学年の子どもたちと年2回の学校交流（行く交流・迎える交流）を行い、伝統的な遊びやパートナーとの活動を通じて実践的な英語活動に取り組んでいる。

授業については日本の学習指導要領に基づいて実践されていたが、その授業に加えて英会話の授業が日本人学校では実施されている。その授業は、E1からE12までの12クラスの習熟度別クラスに分かれて授業が行われている。毎学期、4技能（リスニング・スピーキング・リーディング・ライティング）の実践運用能力等を考慮してクラス編成が行われている。新入生は、最初の授業で個人面接を行い、この面接によってクラスが決められる。

英会話の教材としては、教科書やワークブックを用いている。E1のみ教科書・ワークブックが異なっているが、E2～E12までのクラスでは同じものを使っている。また、英会話では発達段階に応じた「英会話補充プログラム」が実施されている。たとえば、1年生のフォニックス（週1回）の授業では、「英語の音と綴り方のルール」を学習している。基本的なフォニックスを習得すれば、75%もの英単語の綴りを読む力がつくと言われているため、授業の中でたくさんの英単語を読むことに挑戦し、街中の英語表記のサインを自ら読もうとするような関心や意欲を育むことをねらいとしている。また、5・6年生の英文法では基本的な英文法を学習し、英文を読んで楽しむようになることや、正しい英作文ができるようになることを目標としている。授業では学習を通して、自分たちの伝えたい事をまとめて表現する練習も行っており、英会話教室前の掲示板に掲示されている。



4. グローバル化に対応する各附属学校の展望と課題

(1) 附属小学校

本校においては、広島大学が示すグローバル化対応の人材育成と連携し、ESDの観点を取り入れて既存の各教科においてグローバル化に対応するための実践研究を進めている。また、本年度から（平成26～29年度）は、文部科学省研究開発指定校としてグローバル化人材の育成に関する研究に着手したところである。

グローバル化した社会に求められる力の一つとして、本校では「国際的コミュニケーションに対応した語学力」を挙げている。具体的には、全学年において週2時間の英語科を設定し、英語力を育成する系統的なカリキュラムを策定しようとしている。日本人学校における英会話の習熟度別クラスは、子どもたちの英語力の極端な差異に対応したものであり、それを本校に適用することはできない。しかし、そのきめ細かな取り組みは本校のカリキュラムを策定する際に参考としなくてはならないものである。

本校においては、イマージョン教育に関して英語科としてそれが可能な場面を各教科の教科内容の中から選び出すことを検討している。すなわち、本校のイマージョン教育は、英語力を育成することよりも、英語で授業することにより各教科内容の理解を深めようとすることに主眼が置かれている。この点において、本校のイマージョン教育は日本人学校で行われているイマージョン音楽・イマージョン水泳とは根本的に異なるものであり、本校独自の課題に取り組まなくてはならない。

(2) 附属三原小学校

本学校園は、幼小中一貫教育に取り組み、自伸会信条（1、私たちは私たちの力で伸びていこう 2、私たちは人のために尽くして感謝しよう 3、私たちのきまりを尊重しよう）を教育の柱として日々指導にあたっている。

また、本学校園は平成24年度から文部科学省研究会開発学校の指定を受け、「社会的自立の基礎となる能力・態度及び価値観の体系的な育成のための、幼小中一貫の領域による自己開発型教育の研究開発」を研究開発課題とした新領域「希望（のぞみ）」のカリキュラム開発を行っている。その中で、グローバル化に対応したカリキュラム開発として、多文化理解やコミュニケーションを通して将来「なりたい自分」を見つけていくことをねらいとした「国際」をテーマとして設定している。ここでは、グローバル化に対応するための資質や能力、態度・価値観を育成するために12年間の系統性を考慮しながらカリキュラムや単元および授業開発を行っている。

小学校における「国際」単元の中には、1・2・5・6学年のものがあるが、たとえば単元「留学生さんとの交流」や「外国の方へのインタビュー」などにこれまで取り組んできた。しかし、昨年度、グローバル化の視点から各教科との関連や日常の学校生活における取り組み等が課題であった。

今回のシンガポール視察を踏まえて本校の取り組みを考察すると、教科学習や学校生活等において英語を活用した取り組みや校内環境の整備が、現状では十分に進んではいない。

そこで、まず本年度最初の取り組みとして、自信会信条を今年度から4学年以上の学年において英語で覚える取り組みを行っている。

- 1, We shall develop ourselves though our ability.
- 2, We shall serve people and feel pleasure and thanks for this.
- 3, We shall pay regard to our rules.

また、授業においては外国語活動の時間以外にも、朝の会や授業でも、チャンギ日本人学校で取り組まれていたイマージョン音楽や体育を参考に、一部英語を取り入れることで、普段から英語を意識して生活できるようになっていくのではないかと考える。校内環境についても、掲示物（日時等）を英語で書かれているものにすることや、グローバルを視野にいれた世界地図および世界の国々の様子等を掲示していくことで、自然にグローバル化を意識できるような環境を整えていくことができるのではないかと考える。

コメント

コメント（１）

教育学研究科 山元隆春

本報告書には、各附属学校園による、グローバル人材育成に向けての取り組みが具体的に示されている。

附属幼稚園においては、おもにグローバル人材養成推進会議(2012)の「グローバル人材」概念の三つの要素を基礎づける内容を要素Ⅰとして、その具体的内容を①他者とのかかわりを通じた自己肯定感・他者への信頼感の獲得、②森での遊びを通じた好奇心や探究心の育成、③自然とのかかわりを通じた豊かな感動体験による感性の涵養、④森での遊びを通じた体力・身のこなしの向上、とし、それらの育成がどのように果たされるかということ明らかにした。また、それらが三要素のうち、とくに主体性やチャレンジ精神の育成につながると考え、要素Ⅱのうち「自然とかかわる遊びや活動による積極性やチャレンジ精神の育成」に注目した実践と研究を展開した。具体的な取り組みが記述され、評価・検証方法を明示し、結果及び成果と課題が明らかにされている。グローバル人材育成のための幼児期の役割を強調する内容となっている。

附属小学校は、小学校6年間を見通した、グローバル人材育成のためのカリキュラム作成の提案と、今年度のいくつかの教科での取り組みの報告を行っている。各教科で育成すべき資質・能力を明確にしていくことによって、資質・能力を身に付けるための基盤となる知識や技能を習得する児童、学びを通して身につけた資質・能力を必要な文脈に応じて使い分ける児童、自他の違いを把握し、異質さの大きな他者との関わり合いの中でも他者理解ができる児童、といった三点にわたる「目指す児童像」を記述しているところにも大きな特徴がある。グローバル人材養成に向かう学校の立場がいっそう明確にされている。さらに、「系統性」については今後のカリキュラム研究で取り組まなければならない課題とされている。

附属中・高等学校は、（１）ユネスコスクール、（２）SSH 事業における海外研修、（３）国際性の育成、の3つの柱で従来組織的・継続的にグローバル人材育成の取り組みを続けてきた。その取り組みにおいて明らかになったグローバル人材に求められる資質・能力は、幅広い視野と見識、異文化に柔軟に対応する力、他者と共生し、他者の良さを引き出す力、英語によるコミュニケーション能力、の四つであり、とくにグローバル人材育成の要素Ⅰ（語学、コミュニケーション）、要素Ⅲ（異文化理解、アイデンティティ）、その他の要素（問題解決能力、ICT活用能力）に相当するものであった。アンケートなどを通して下記のような成果が明らかにされている。

・「幅広い視野と見識」を備えた生徒の育成…通常の授業において、ESDの視点を取り入れた内容の実践、「倫理の探究」として教科固有の視点に基づいたカリキュラム開発を実践。総合的な学習の時間等で高等学校第Ⅱ学年約200名を対象に実施してきた「ESD研究」等、多面的な取り組みが定着しつつある。

・「他者と共生し、他者の良さを引き出す力」の育成…ESD の視点から捉えた環境問題をテーマにした海外連携において、問題を発見する力、他者に伝える力等の能力が養われている。

・「英語によるコミュニケーション能力」の育成…学校設定科目「科学英語表現」の実践による効果は大変高い。

課題としては、従来の取り組みの精緻化・高度化をはかること、他校との連携を通して、新たなカリキュラム開発を行っていくこと、などがあげられている。

附属東雲小学校は、「協調性・柔軟性」をグローバル人材に求められる資質・能力の柱としてとらえながら、児童の共生関係を育むために、①既存カリキュラムのねらいの再検討と改善、②共生社会を担う資質・能力を育むための授業開発・実践、③学校教育活動における教師の「意味づけ」や「評言」という手立ての実践、3点にとくに力を入れて研究を行っている。校内に「グローバル人材育成会議」を設置して、そこでの議論を中心としながら、組織的な取り組みを続けているところが重要である。グローバル化に対応することが、これまでのカリキュラムの見直しや新たな授業開発・実践に向かっているところに、今年度の活動の大きな特徴を見ることができる。とりわけ、児童の言動に対する「意味づけ」や「評言」を行うことによって、活動の意味や価値を児童たちが実感を伴って理解できるようにしている。

附属東雲中学校は、中教審答申やグローバル人材推進会議の示すグローバル人材の定義にもとづきながら、子どもに身に付けさせる力についての見通しを示した上で、主に、総合的な学習の時間における取り組みを中心に報告している。アメリカ合衆国やインドネシアの中学校との国際交流活動の成果や、修学旅行を利用した SMART 教育プログラムの取り組みについて報告されている。生徒たちの反応や、アンケート結果の分析などを通して、これらの取り組みについて生徒たちがどのような成果を見出しているのかということが具体的に明らかにされている。グローバル人材育成のための実践の方向性を指し示すものであった。実践を振り返って分析しながら、プロジェクト学習システムや ICT の有効活用などを取り入れるという、内容充実のための課題も指摘されている。

附属三原学園は、新領域「希望（のぞみ）」への取り組みを中心として報告した。とりわけ「グローバルリーダーとなりうる人材の育成」を重点課題と位置づけた本年度の研究開発の取り組みを中心に報告がなされ、「グローバル人材育成」の各要素との関連で、新領域「希望（のぞみ）」が、それぞれ要素Ⅰ「コミュニケーション」、要素Ⅱ「主体性・積極性」「チャレンジ精神」、要素Ⅲ「異文化理解」、その他「問題解決能力」のそれぞれについて対応するものであることが示されている。また、各教科における単元（題材）開発に関して、①日本文化の理解、②様々な文化の理解、③読み取ることを中心としたコミュニケーション力、④伝えることを中心としたコミュニケーション力、のいずれの力の育成をねらうのかを明確にして単元（題材）を開発することをめざした。図1の「目標構造」図には育むべき資質・能力を育てる学習開発の方向性が詳細に示されており、その「目標」を実現し、社会のグローバル化に対応した幼小中一貫カリキュラムの開発・実践に向かうための充実した取り組みがくわしく報告されている。今後は、実践の評価・検証を踏まえて、単元（題材）の開発を継続することが課題となるとされている。

附属福山中・高等学校は、「クリティカルシンキング」と「持続可能な社会の構築」という、現在の教育の重要な課題をテーマとした学校でのカリキュラム開発の取り組みと、「グローバル人材育成」の要素との関連を押さえながら、本年度の実践を報告している。要素Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・その他のそれぞれについて、新教科「現代への視座」及び総合的な学習の時間の内容を中心に、教科内容・学習指導法のそれぞれに触れながら詳述がなされており、学校の取り組みが「グローバル人材育成」に深く関与していることが明らかにされている。多面的な方法で学習の評価を行い、生徒への効果として、社会的課題などについて主体的に考える姿があらわれ、科学性や論理性に留意した記述や発表が増加したこと、また、クリティカルシンキングを「よりよい解決に向けて複眼的に思考し、より深く考えること」と理解することができて、その思考を生かした学習集団としての成長が見られること、といったことが明らかにされている。そのような生徒の変化をいざなう教育実践の実際もわかりやすく、詳細な報告が為された。また、新たな教育プログラム開発の方針と課題も示されている。

また、井上京子委員の「シンガポール学校視察報告書」では、グローバル化に対応した教育をいち早く進めているシンガポールの、ベドックグリーン小学校とシンガポール日本人学校小学部チャンギ校という二つの小学校での視察（附属小学校神津弘之副校長・附属三原小学校伊藤公一教諭も同行した）からに関して丁寧な報告が為されている。ベドックグリーン小学校では「活力ある学びの共同体」づくりが行われ、そのために教員研修や保護者のためのワークショップがなされているところに大きな特色を見ている。また学習指導についても多面的総合的な評価が重んじられていることも報告されている。シンガポール日本人学校小学部チャンギ校については、教職員の和・主体性・教育に関する工夫などが強調され、とくに「バディシステム」を重視し、学習における協働・交流が重視されていることが明らかにされた。これらの諸特徴を、両校の詳しい授業観察報告の記述を通して例証している。最後に、附属小学校・附属三原小学校のそれぞれ同行者との議論を踏まえた上で、二つの小学校視察の成果を広島大学附属学校園での「グローバル人材育成」にどのように生かしていくことができるかということについて、丁寧で具体的な提言が示されている。

以上の通り、本年度の各附属学校園における「グローバル人材育成」の試みを、各学校園独自の取り組みとこれまでの試行とのつながりについて、わかりやすくまとめていただいた。広島大学附属学校園がこの課題への取り組み方が、以前にも増して明瞭にされてきたと考える。

コメント（２）

教育学研究科 丸山 恭司

【背景・経緯・焦点】

「広島大学附属学校園研究推進委員会」は、広島大学附属学校園の第二期中期計画を実施するために、平成 23 年に設立された。その中期計画は次のように記されている。

「大学との連携により、地域・日本・世界をリードする人材の育成を目指す初等中等教育カリキュラムの研究開発を行う。」

第二期中期計画の終了年度を来年度に控え、三年間の活動を通じた達成点を確認し、最後の一年の展望を共有したい。

昨年度の報告書において、私は以下の「提言」をした。

今後、大学と連携したカリキュラム研究開発システムを構築するにあたって、次の二点を提言したい。

1. 大学との様々な連携のあり方を模索する。たとえば、①留学生や大学教員という人的リソースの活用、②教育学研究科のグローバル化対応との連携、等が考えられる。

すでに、留学生に協力を求めた取り組みがある。留学生にとっても貴重な経験になっているはずである。また、教育学研究科は先に「広島大学における初等中等教育段階でのグローバル化対応教育を見据えた教員養成・人材養成について」（平成 25 年度教育学研究科ビジョンと戦略提案ワーキング・グループ答申）をとりまとめている。この答申では、学士課程における副専攻プログラムとして「グローバルマインドを育成できる教員の養成プログラム」が提案されている。また、博士課程前期では「グローバルな社会で指導できる教員養成プログラム」、博士課程後期では「グローバルな研究者の育成プログラム」と「グローバルな教師教育者の育成プログラム」が提案されている。附属学校園との連携は、留学生や大学（院）教育にとって有意義なものとなりうる。そうした連携がどのように実現可能であるか検討されるべきである。

2. 附属学校園間の連携のあり方を模索する。たとえば、①他校園の報告への自校園からの応答、②他校園の取り組みへの参加、等である。

自校園の取り組みを報告書にまとめるだけでなく、他校園の取り組みから自校園は何を学ぶか、他校園にどのような助言ができるのか、今後、他校園とどのような協働がありうるのか、に答えることによって、連携が始まる。また、附属学校園間で、プログラム評価法を開発・共有し、ピアレビューアとして他校園教員にプログラムに参加してもらうことも可能であろう。

上記の提言は、第二期中期計画、すなわち、「大学との連携により、地域・日本・世界をリードする人材の育成を目指す初等中等教育カリキュラムの研究開発」の構築を念頭においたものである。そして、昨年度の焦点事項とされた「社会のグローバル化に対応した初等中等カリキュラムの開発」に即した提言となっている。大学と連携してカリキュラムの研究開発システムを構築しようとする点で言えば、必ずしもグローバル化に対応したカリキュラムに限定する必要はない。他の内容であっても大学との連携は可能であろう。しかし、まさに、大学も含めすべての校種においてグローバル人材の育成が社会から求められており、この要請に応えるべく、新しいカリキュラムの開発を試みることは、学内の教育を改善していく意味でも、また国内に新しい教育モデルを提示する意味でも、極めて意義深い。

そして、今年度の委員会活動も「グローバル人材育成」に焦点が当てられた。各学校園は現行の主要な教育活動をグローバル人材育成の視点で評価し直し、その優れた点を明示するとともに、不足していると思われる点を新たに指摘することができている。しかし、第二期中期計画の実施・完結という課題が十分に意識されていないのではないかと。終了年度に向けて、計画の完結に向けた努力と評価財の蓄積が求められるところである。

先に挙げた、昨年度の提言の観点から、今年度の取組を評価してみよう。

【成果の評価と展望】

1-①留学生や大学教員という人的リソースの活用

各学校種の報告書のあちこちに大学教員の講演や留学生との活動が紹介されていた。確かに、これまでも大学の教員が附属学校園に協力者として招かれることは多かったであろう。しかし、グローバル人材育成の観点から、教員や留学生をシステムティックに招き、プログラム運営の一部として組み入れ始めていることは特筆に値する。「研究開発」と呼ぶにはまだ十分ではないだろうが、そのシステムが構築され始めていることの証左と言える。

国際的な人的リソースをもつ大学の附属機関であるというメリットを活かすという点では、最大限に大学のリソースを活用していただきたい。そうして「地域・日本・世界をリードする」カリキュラムを開発することが可能となろう。一方、他の公立私立学校にも応用可能なカリキュラムを開発・提供するためには、外的なリソースのみに頼ることが、逆にデメリットになってしまう場合のあることが懸念される。

1-②教育学研究科のグローバル化対応との連携

教育学研究科が構築しようとしているグローバル教員養成プログラムもまた、グローバルに活躍できる人材として学校教員を養成しようとするものである。そして、さらに、グローバルな人材を育成できる学校教員を養成しようとするプログラムでもある。こうした課題は、附属学校園との協力関係によっていっそう充実した教員養成と、そのモデル開発が可能となるはずである。

このプログラム自体ははまだ計画段階にあり、今年度の「大学との連携」に組み込まれることはなかった。来年度は、大学側が附属学校園に協力を求め、連携が構築されるべきである。その際に何をどのように目指しているプログラムであるのかを明確に説明し、協力を求める必要が大学側にはある。

2-①他校園の報告への自校園からの応答

まず、各学校園はそれぞれ伝統をもち、独自の研究体制を培ってきている。学校園の内部での結束は固い。一方、同じ附属教育機関でありながら、七つのユニットが横断的に協力していく関係の構築はまだまだ十分には築かれていないようである。

本研究推進委員会は、この関係構築の一步として重要な意味があったのではないかと。松浦副理事によりグローバル人材育成という共通テーマが与えられ、岩田准教授によって整理された資質・能力表が作られた。この共通のテーマと基準に基づいて各学校園の取り組みが評価され、見通すことができたことの意味は大きい。これらの成果は、第二期中期計画が目指したものとして十分なエビデンスとなろう。

さらには、報告書の作成にとどまらず、ここに提出された他校園の報告成果を自校園のものと比較し、他校園にフィードバックするとともに、自校園の参考としていくことが望まれる。こうした協力関係が構築され、さらに大学教員もこれに加わることができれば、広島大学の附属学校園であることの潜在的な力が大きく発揮されることになるに違いない。

2-②他校園の取り組みへの参加

上記の協力関係を築くことができたとき、この研究推進委員会の限定的な関係を超えて、教員同士が相互に評価委員として関わったり、さらに、児童・生徒・教員が参画する共同プログラムを運用することもいずれ可能となろう。大学教員が助言者ないし評価者として、さらにはプログラムの運用者の一人として加わることができれば、それは、構築された「大学と連携したカリキュラム研究開発システム」がもたらした成果だと言えよう。

来年度までにこうした関係を築くことは難しいかもしれない。しかし、その先に目指すべきゴールとして見据えておくことには意味があろう。

【新たな提言】

間もなく、第二期中期目標・計画の実施状況が評価されることになる。これに備えて、成果

指標に耐えうるエビデンスを抽出しておくべきである。本研究推進委員会の活動は、この報告書も含め、形になるものを提出してきた。さらに、中身に立ち入った取り組みが求められよう。すなわち、構築されたカリキュラム研究開発システムはどのようなものであるのか、このシステムを通して生み出されたカリキュラムにどのようなものがあるのかが、吟味されなくてはならないであろう。

「資質・能力」論、とりわけ、コンピテンシー論の隆盛はめざましく、本委員会もこの流れに沿うものであった。今後は、コンピテンシー論の功罪にも批判的な視点をもって取り組むべきであろう。昨今の資質・能力論が個人の能力に限定していることに批判が向けられている。能力の発揮も育成も、特定の状況のなかで可能となるものである。構成概念である資質や能力を実在的に捉えてしまうとき、教育的働きかけや評価が空回りしてしまうことがある。学習環境をデザインするときに、状況論的観点も併せ持ちたい。

おわりに

この『社会のグローバル化に対応した初等中等カリキュラムの開発Ⅲ—大学と連携した研究開発システムの構築に向けて—』は平成26年度の広島大学附属学校園研究推進委員会報告書として刊行するものである。平成24年度の報告書ではじめて「社会のグローバル化に対応した初等中等カリキュラムの開発」という主題を使いはじめたものであるが、「グローバル化に対応…」ということが喧伝される以前からカリキュラム開発や授業開発に取り組んできた広島大学附属学校園である。毎年の報告が次第に濃密なものになることを、拝読して強く感じている。

「はじめに」で松浦副理事が触れておられるように、今年度はカリキュラムの「試行」に関する報告であった。附属幼稚園、附属小学校、附属中・高等学校、附属東雲小学校、附属東雲中学校、附属三原幼稚園・小学校・中学校、附属福山中・高等学校の各学校園のこの一年間の教育課程に「グローバル人材」の要素をどのように組み入れ、人を育てていこうとしたかというそのことが、本報告書には具体的に示されている。それを拝読すると、3歳から18歳（幼児期から後期中等教育段階終了時点）に至るまでの発達の課題を見据えつつ、それぞれの地で築かれた教育環境の特色を生かしながら開発を手がけてこられた、社会のグローバル化に対応した初等中等カリキュラムを、意欲的に試行していかれたことがよくわかる。同時に、従来から各附属学校園で進めてこられた教育実践が、いずれも「グローバル人材育成」の各要素を満たすだけの内実をそなえたものであったこともよくわかるのである。本報告書に収められた「グローバル人材」育成のためのカリキュラムの試行は、このように、これまでの各附属学校園の教育的営為の蓄積を基礎としながら、社会のグローバル化のなかを生きる人材を育成するための新しいカリキュラム実践を切りひらく提案性をそなえたものであると考える。また、井上委員には、シンガポール視察を踏まえ、これらの各学校園におけるチャレンジを振り返り、組み直し、あらたな課題を見据えるためのたくさんの知見をいただいた。

「グローバル人材」の要素とは何かということは、本報告書の岩田委員の分析においてくわしく述べられているので、そちらを参照していただきたいが、「対話」することのできる能力はそれらの要素のなかでも重要なものであると考えられる。そして、他の人の話をしっかりと聞き届けることができるかどうかは「対話」能力の中心である。実際、相手の話のなかに繰り返しあらわれる言葉や表現を読みとって、相手の論理を理解しようとするからこそ、協働と交流ということができるようになるのではないか。そうでなければ、ともに働くことはできないし、互いの価値観を相手の生きてきた文脈ごと理解することなどとてもできないはずである。それはむずかしいことだろうが、附属学校園で今年度展開してきた教育実践は、そのむずかしさに果敢にチャレンジするものであった。委員の皆様方

の多大なご尽力に感謝する次第である。はてしない道だが、みのりの多い道であることを教えていただいた。記して感謝申し上げたい。

平成27年3月

平成26年度広島大学附属学校園研究推進委員会委員長 山元 隆春

